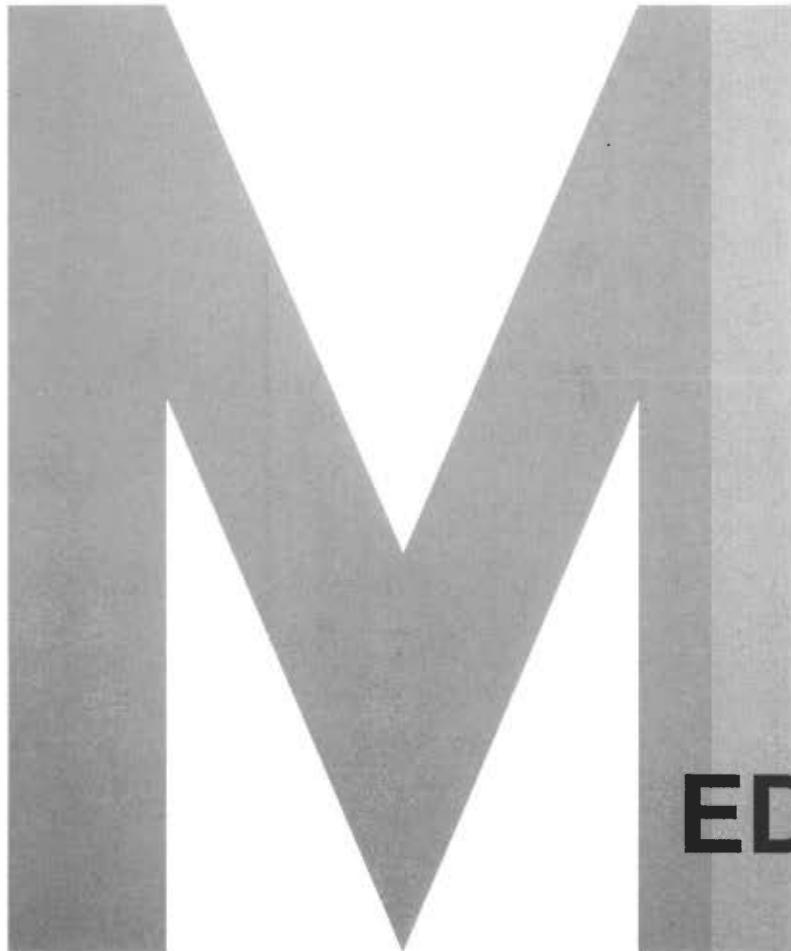


No.2

1994



EDIANET

慶應義塾大学メディアネット

『アンブロシアン図書館（ミラノ）約定』

Constitutiones collegii, ac Bibliothecae Ambrosianae
[together with] Additamenta ad primas Collegii, ac
Ambrosianae Bibliotecae constitutiones. (ca. 1630)

Bosca, P. P. De origine, et statu Bibliothecae
Ambrosianae Hemidecas. Milano, L. Montius, 1672



1603年（一説には、1609年）、3千冊の写本と3万冊の活字印刷本を持つ図書館がミラノで学究の徒に公開された。フェリゴ・ボロメオ枢機卿（1564-1631）の開設したアンブロシアン図書館である。

近世における知の展開は、ルネッサンス以降の自由な思索し、感覚の表現に卓越した才能を発揮した優れた学者、科学者、芸術家によってなされたが、彼らを支援した人びともまた、文化の興隆に重要や役割を果たした。フェデリゴ・ボロメオ枢機卿（1564-1631）もその一人である。同枢機卿は、ボローニア大学で修辞学、哲学、数学を学んだ近世知識人であったが、14世紀英國のダラム教会大司教リチャード・ドベリーと同様に眞の意味での愛書家であった。同枢機卿は愛書家の常として、人知を愛し、ガリレイとの交流をはじめ、当代の多くの学者と親交があった。そして書物を蒐集した。

アンブロシアン図書館は、学術研究を目的とした宗教法人の一種で学術研究の一層の興隆のために設立された学寮に併設されたものであったが、その成立の経緯はトマス・ボードレイのボードリアン図書館（1602年創設）と類似している。この『約定』は、この図書館の運営綱領であるが、その運営に携わる図書館員（図書館長にあたる）責任と権限（資料収集、目録、および法人と契約している学者・研究者への指導など）や、現代図書館では利用規程に当たる諸々の規則（開館時間、閲覧者の監督、蔵書管理など）が定められている。この種の図書館管理・利用規程についての資料は、上記リチャードの『フィロビブロン』でも瞥見できるが、公開図書館の諸規程はきわめて稀である。

この『約定』は、いわば自家出版で広範に頒布されたものではなく、同法人内での利用に限られていたものと考えられ、稀覯性がそれだけ高い。なお、本塾図書館にはボスコの『アンブロシアン図書館の成立と規約』がある。ボスコにはこの学寮のフロアプランが載せられている。

MEDIANET 2

目 次

新所長挨拶	内 池 廉四郎	1
新所長挨拶	小 沢 慎治	2
湘南藤沢キャンパスメディアセンター所長に就任して	斎 藤 信男	3

〈特集〉 インターネット

インターネットと社会	大 賀 裕	5
インターネットを利用して	広田 とし子 他	10
医学メディアセンターとインターネット	市古 みどり 他	15
インターネット	楠 本 博 之	19

夢<ティールーム>	辻 幸民	23
人にやさしいコンピュータ	所 真理雄	24

インターネット・マルチメディア。		
データベースをめざして	鶴 野 公 郎	27
マルチメディアって???	関 本 幸 輝	29
<スタッフルーム>	酒 井 明 夫	30
グラフで見る情報センターの23年	白 石 幸 男	36
グラフで見る計算センターの10年	村 上 篤太郎	40
湘南藤沢メディアセンターにおけるAV環境の現状と課題	福 山 欣 司	44
キャッチフレーズ<ティールーム>	関 前 田 吉 昭	48
イギリス図書館研修報告	本 間 曜	51
電子情報社会のなかの『図書館』へ	五十嵐 由美子	55
ライバルからパートナーへ	山 本 喜 一	56
「レボファイル」の行方<スタッフルーム>	萩 野 達 也	60

—MEDIANET レポート・利用者教育—

[三田メディアセンター]	吉 沢 亜季子	63
[日吉メディアセンター]	静 谷 裕美子	66
[理工学メディアセンター]	吉 川 智 江	68
[医学メディアセンター]	平 吹 佳世子	72
[湘南藤沢メディアセンター]	松 本 和 子	74
全地区利用案内に関する調査	MEDIANET 編集会議	77

三田情報センター時代のコレクション—資料再発見—	森 園 繁	80
三田メディアセンター所蔵児童コレクションについて	渡 辺 茂 男	89
MY ENCOUNTER WITH THE		
CHILDREN'S BOOK COLLECTION	山口マリアンヌ	92
債務国の豊かな生活と債権国の苦しい生活<ティールーム>	中 木 敏 夫	94
山中資料センターの発足—速報—	島 本 光 信	95
学ぶ言語はよりどりみどり<スタッフルーム>	古 沢 賢 一	96
新 倉 利江子		

〈資料〉

メディアセンターに関する書誌		97
スタッフによる論文発表・研究発表		97
目で見る標準統計<平成5年度>		100
年次統計資料		104
『アンブロシアン図書館(ミラノ)約定』	渋 川 雅 俊	表紙裏
編集後記		112

〈表紙〉 デザイン 石田恵子

〈カット〉 中川和美

MEDIANET 第2号 * 1994年11月1日発行 * 編集人 石黒教子 * 発行人 渋川雅俊

* 発行所 慶應義塾大学メディアネット本部 〒108 東京都港区三田2-15-45

* 電話 03(3453)4511 (内線 2501) * 印刷所 (有)梅沢印刷所

新所長挨拶

うち いは けいしろう
内 池 慶四郎

(三田メディアセンター所長)
(法学院教授)

この度えらいことを承り、慶應義塾メディアネット所長に就任いたしました。

生来私は朝寝坊宵張りの典型的夜行性人間でありますので、薄暗く狭苦しく散らかった場所の方が安心する。明るくて見晴らしの良い新図書館の六階のデスクに座っておりますと、どうにも落ち着かない。暗く狭い穴の中で昼寝しておった土竜が、突然に白昼広い運動場の真ん中に放り出されたような気分が致します。

まことに現在の慶應義塾のメディアネット一図書館一の仕事の膨大多彩なことは、驚き入るばかりであります。昭和二十年代の学生時代や昭和三十年代に私が助手として塾に残ってからることを考えましても、日吉や矢上台、そして最近の湘南藤沢の各キャンパスに新しい図書館が続々と誕生致しました。管理運営の機構の名称も、いわゆる「図書館」から「研究教育情報センター」へ、そしてかっての「大学計算センター」と統合した現在の「メディアネット」へと目まぐるしく変わってまいりました。

図書資料を利用する研究者の立場から見ましても、ここ二三十年の間に、いわば鵝ペンと羊皮紙の時代から活字の発明、やがてマイクロフィルムの利用を経て、一挙に CD-ROM や磁気テープの時代まで移るような、目まぐるしい発展の激動を経験しました。三田山上の赤煉瓦の図書館から「メディアネット」までの歴史は、時間的には短くとも、ライト兄弟の飛行機から宇宙ロケットへの移行にも匹敵する技術進歩の隔差を感じさせるものがあります。

私自身、四十年前の学生時代から現在に至るまで、赤煉瓦の旧図書館の時代より図書館には随分

とお世話になり、その時々の図書館員の人たちに色々とご迷惑をおかけして参りました。資料の検索の仕方からその所在の探索、そして論文の書き方に至るまで、当時の図書館員の方々から親身に、しかも随分と厳しく仕込まれたことを思い出します。これは専ら自分の研究・勉強の便宜のための、利用者的一方的な立場からの話であり、攻守両替を替えて図書館側からものを考えることは、私にとって容易ならぬ初体験ですけれども、むしろ今にして思うのは、何故にあの時の先輩図書館員の方々が、あれほど熱意をこめて私たち利用者に接してくれたかということです。

大学が明日の人間文化のために学問・研究を営む場所である以上、大学自身の不断の自己改革は当然のことであり、情報伝達の技術進歩に伴って、施設の整備や運用上の革新の波が大学図書館に最も具体的な形で現象することも、好むと好まざると拘らず必然の成り行きと申す外はありません。この点で慶應義塾は、戦後の数々の悪条件を乗り越えて、その使命を見事に果たして参りましたし、今後もまた果たすべき重い責任を負わされていることを痛感致します。

学問資料の形態や利用方法が時代と共にいかように変化しても、およそ言葉が人間の創造した思想・観念を人ととの間に伝達するものであるかぎり、大学もその図書館も、過去より将来を繋ぐ言葉に奉仕する人間の密接な相互関係なしにはあり得ない営為であります。時代と場所を越えて文化を収集し承継して将来に伝えるメディアネットの働きは、直接にこれに携わる人々の熱い心の強固な結び付きなくしては、到底不可能であろうと思います。

大学における個々の研究者の仕事は、まことに勝手気儘なものにて、またそうでなければ勤まらぬものではありますけれども、そのような研究者のエゴイズムが、今までの慶應義塾の中で、どれほど多くの人たちの長年に渡る汗と涙に支えられて可能となっているものかを、あらためて考える良い機会に恵まれたものと考えて居ります。

新 所 長 挨 拶

小 沢 慎 治

(理工学メディアセンター所長)
(理工学部教授)

山口前所長の後を受け継いで、平成5年10月から理工学メディアセンターの所長になりました。私自身は大学計算センター矢上計算室長を務めたことがありますので、情報システムサービスについては運営側に参画した経験があるのですが、図書館情報サービス、情報メディアサービスについては学生時代から今まで一利用者に過ぎませんでした。この度、運営側の立場になって、ご挨拶を申し上げるのですが、メディアネット設立のいきさつ、メディアネットの業務などについては前号で詳しく述べられていますから、所長になって感じたことをいくつか述べたいと思います。

理工学メディアセンターでは論文誌の数が多く利用者も多いことが特徴です。そしてこれは

借りて — コピーして — 読む

場合がかなり多いことを示しています。そう言えば、コピー機の操作を覚えたのは小金井にいた4年生の時でした。まだまだエレクトロニクスではなく、写真技術そのもので、できあがったコピー用紙がびしょびしょだったのを覚えています。それでも、本を買わないで本が読めるというのが驚きでした。これは

著者 — 原稿 — 書籍 — 読者

という情報の流れを当然とは出来なくなる時代の始まりだったのでしょう。

時代が変わって、旧情報センターのサービスは、書籍を保存管理することから、CD-ROMのような電子媒体に記憶し、直接またはコンピュータネットワークを介して提供する時代になっています。また、旧大学計算センターのサービスも、大型計算機を設置管理し、教員学生の利用に供するサービスから、キャンパス内、外のネットワー

クの管理、OSを始めとするソフトウェア、共用のデータベースの提供管理へと変化しています。

今日、情報センターと大学計算センターが統合されて、メディアネットが設立されたのは自然のことのように思われます。

例えば、各研究室では、ワークステーションのマニュアルが磁気ディスクに記憶されています。20年前のミニコンでは、本棚に並べると1メートルくらいの量の内容を、ソフトウェアを介して参照しています。理工学メディアセンターでも、大量の文献情報を納めたCD-ROMを購入し、コンピュータで検索するサービスを行っています。さらに情報システムサービス部門と協同して、ネットワークを介して研究室からいつでも参照できるシステムを開発中です。そして、このシステムは各研究室に記憶されているマニュアルなどのデータを共有する仕組みとほぼ同じなのです。

一利用者から、所長になったばかりなのでどうしても最近の変化に目がいってしましたが、ふと、電話の交換機が、交換手による手動交換から自動交換機に変わったときのことを思い出しました。自動になったのは電話局の方だけであって、お客様の方はそれまでは交換手に相手の名前を告げるだけで自動的に接続してもらえたのに、相手の電話番号を覚えて、ダイアルを回すこと強いられることになったのです。

この例を心に留めて、メディアセンターの本来の業務である、図書を購入、管理し、コンピュータを設置、管理して教育や研究に役立てることをこれからもますます充実し、その上で、二つの組織が寄り合い所帯ではなく協同で、新しい形の情報提供を行うことが必要なことだと思っています。

これらのことには、ささやかでもお役に立ちたいと思い、努力をするつもりでおりますので、関係各位のご理解とご協力を賜りますようよろしくお願ひ致します。

湘南藤沢メディアセンター所長に 就任して

斎 藤 信 勇

(湘南藤沢メディアセンター所長)
(環境情報学部教授)

私は、昨年湘南藤沢メディアセンターの所長を仰せつかった。このキャンパス開設以来、キャンパスネットワークを構築し整備してきたが、既に5年目を迎える。その見直し、整備、将来計画など重要な仕事が山積している。技術の進展は急速であり、常に情報処理の技術や製品をウォッチしていないと、学生や教職員に迷惑をかけることになる。

このキャンパスは、幸いなことに開設当初から構内ネットワーク SFC-CNS の構築に多くの理解を得られ、新しい試みをすることが出来た。当初懸念した学生達の反応も、何とかついてきてくれるという状況で、情報処理言語 I を必修的に課してコンピュータリテラシーが無いと 4 年間のキャンパスライフで大幅に損をするということを体験的に理解して貰った。学生の反応に呼応して、教職員の反応も素晴らしい、ユーザインターフェースがいまひとつの UNIX ワークステーションでも、何とかこなしてくれているのが現状である。

今年度 4 月より、大学院政策メディア研究科が開設され、第一回生の諸君を含め 160 名以上の修士の大学院生が誕生した。それに伴い、大学院用のネットワーク SFC-ERNS (Evolutional Research Network) を大学院棟を中心に構築し、研究教育用に使うことを目指している。これは、4 年間の情報処理技術の進展を反映して、ATM LAN や FDDI のような高速ネットワークを中心に構築し、来るべきマルチメディア時代にふさわしいプロフェッショナルを育成することに寄与できることを願っている。

また、来年度から当キャンパス内の敷地に通産省の外郭団体である情報処理振興学事協会がメディア研究センター、または情報基盤センターを開設する計画が進められている。ここでは、教育ソフトウェアの利用、普及、行政データベース、モデル電子図書館の 3 つのテーマの事業が進められる予定である。これは、慶應義塾の設備ではないが、塾の敷地内に設置されることから、情報処理振興学事協会と様々な協力をしていくことが可能であり、また、塾内だけでなく、他大学、研究機関などとの協力体制もつくることが可能となる。ネットワーク的には、キャンパスネットワークとの接続を期待されている。また、丁度時期を同じくして、NTT が高速広域ネットワークの実験サービスを開始することになっている。これは、いわゆる B-ISDN と呼ばれる 156 MBPS の広域ネットワークを ATM を使ってサービスするわけであるが、3 年間無料で使わせてくれる。NTT としては、このような高速回線サービスを実際に始める前に、本当にそのような高速回線を使う応用をたくさん見つけたいということで、この実験に参加することを募集したが、予想以上の反応で多数の提案があったと聞いている。当キャンパスでも、当面 3 プロジェクトの実験に参加することになっている。この実験サービスには、塾の全キャンパスを高速ネットワークで接続することも含まれており、全塾を覆うキャンパスネットワークの幕開けも近いと感じている。

ここで、湘南藤沢キャンパスのネットワーク管理体制について、少し紹介してみよう。分散処理や管理は、エンドユーザーの好みに合わせたサービスが行える可能性がある。この場合、管理体制を従来型にしてシステムだけダウンサイジングを行っても、ユーザは必ずしも満足は出来ない。湘南藤沢キャンパスでも、分散環境を管理していく委員会組織として、キャンパス発足以来、ネットワーク委員会を設けてきた。この委員会のメンバーは、主としてコンピュータの専門家で構成されている。これに対して、平成 6 年度のリプレース計画を立てるに際して、ネットワークユーザ協

議会を設けて、エンドユーザの立場を充分反映できるような配慮をした。ユーザ協議会は、コンピュータ専門家は勿論、いろいろの分野の専門家から構成されるように委員の選定をした。

上記に述べてきた湘南藤沢キャンパスのネットワークの中で、SFC-CNS は学部1年生から利用して貰うシステムであり、そのシステムの安定性が重要なのでその管理も充分考えて行わなければならない。それに対して、大学院用に構築した SFC-ERNS は、本来研究中心で新しいことに挑戦することが多い大学院生をエンドユーザとして想定している。従って、大学院生の自主性を重んじ、システムの安定性もさることながらかなり柔軟性のある管理、自主的な管理を実施していく必要がある。従って、SFC-CNS ではユーザの相談に応じる学生をコンピュータコンサルタントと呼ぶのに対して、SFC-ERNS ではコンピュータアドバイザと呼び、コンピュータの専門家でない学生でも自主的にシステムの管理が出来るようにアドバイスするという方針を取っている。すなわち、エンドユーザ指向の管理といつても、その性質に応じた管理方式、体制が必要なのである。その場合でも、結局分散環境を良くしていくのは、最終的にはエンドユーザ自身ということになる。

SFC-CNS で当初導入されたコンピュータは、ダウンサイ징と呼ばれるワークステーションであり、UNIX オペレーティングシステムで稼働するのが主である。UNIX は、TSS オペレーティングシステムとして設計されているので、ユーザの識別を行なう機能があり、ネットワークに接続して分散環境を構築しても、ユーザの識別を行なえるのである程度のセキュリティを保持できる。これに対して、ダウンサイ징の一つとして導入されるパソコンは、本来個人用の環境で利用するようになってるので、それらを稼働するオペレーティングシステムである MS-DOS, Windows, Mac-OS などはユーザという概念を持たずに設計されており、ネットワークに接続して分散環境を構築してもセキュリティの維持が困難になる。

当初、SFC-CNS ではそのような問題を避けるために、敢えて UNIX 中心にシステムを構築し、MS-DOS や Mac-OS は限定した形式で分散環境に組み入れていた。これに対して、エンドユーザとして MS-DOS, Windows, Mac-OS などを利用したいという要望は強くあった。そこで、SFC-ERNS ではそれらのオペレーティングシステムも含んだ形で分散環境が構築出来るように設計した。セキュリティの維持は、分散ファイルシステムとして AFS (Andrew File System) を導入し、MS-DOS や Mac-OS とのインターフェースを工夫して実験している。

ダウンサイ징の管理で問題になるのは、ネットワークや分散環境を管理出来るエンジニアの不足の問題である。実際、SFC-CNS では、メディアセンターで管理するワークステーションとそうでないもの（自管理するもの）とに分け、メディアセンター管理のものは、電源のオンオフから始まりすべてメディアセンターの管理グループが維持している。前述したように初步的なユーザがかなり多いので、メディアセンターで管理するワークステーションが大半である。これに対して、SFC-ERNS では、大学院生がエンドユーザということで、各プロジェクトグループで自管理するものがかなり多くなっている。

メディアセンターの管理グループは、ボランティアの教員、センターの担当職員、大学院生や学部生のアルバイトや臨時職員、外注先から派遣されたエンジニアの混成部隊として構成されている。それぞれ、役割を分担し何とか大きな分散環境を維持管理しているのが現状である。

今回は、ネットワークを中心に現状を説明した。湘南藤沢メディアセンターは、勿論ネットワークによる分散環境だけでなく、図書や AV 系の扱いも重要な問題である。今後、これらの要素がうまく統合化され、学生の学習に役立ってくれるように関係教職員で努力していく所存である。

特集 インターネット

インターネットと社会

おお が ゆたか
大 賀 裕

(理工学メディアセンター課長)

昨今、インターネットはそれを利用する者にとって欠かすことのできない情報基盤となりつつある。1993年9月、米国での情報スーパーハイウェイ計画推進のための NII (National Information Infrastructure) 行動アジェンダが発表され、内外で注目を集めた。また日本でも、各省庁の政策による施策が発表されたり、商用インターネットプロバイダの立上りやパソコン通信事業者のインターネットへの乗り入れが急速に進み、その結果、インターネットはキーワードとして、新聞をはじめマスコミで頻繁に取り上げられるようになった。インターネットを取り巻く環境は急速に変わっている。本稿では、インターネット上の各種サービスとそれが人々に及ぼした影響について述べる。

1. 電子メールと電子ニュース

電子メールは、インターネット上の利用者の間でメッセージを送受信することのできるシステムであり、インターネットにおける最も基礎的かつ一般的なサービスとして広く普及している。その利用者は数千万人に上るものと推定される。またインターネットに限らずパソコン通信などの他のネットワークサービスでも利用されている事から、インターネットとこれらネットワークサービス間の電子メールの相互交換は一般的なものになってきている。従来は、インターネットを利用するには設備、手続きなどの面から組織単位で加入するしかなかったが、このような状況の変化から最近では個人によるインターネットへの参加が現実のものとなってきている。

米国では CompuServe のような大規模パソコン通信をはじめ、地域限定の比較的小規模なパソコン通信サービスでもインターネットとの電子メール交換を実現しているところが少なくない。日本でも、WIDE と NIFTY-Serve, PC-VAN の交換実験をきっかけに急速に普及し、現在では NIFTY-Serve, PC-VAN, 朝日ネット, People などの大手パソコン通信サービスがインターネットとの電子メールの相互乗り入れを実現している。

電子メールの利用法としては、手紙と同様の1対1通信だけでなくメーリングリストとしての利用も多い。これは、特定のメールアドレスへメールを送ると、あらかじめリストに登録されたユーザ全員にそのメールが届くものである。メーリングリストは、特定多数の集団のための連絡手段として広く使われており、ある組織のメンバーを対象とするクローズドなものから、特定のトピックに関する話題について情報交換することを目的とした、誰でも参加できるものまで多数が存在している。

一方の電子ニュースは、一言でいえばインターネット版電子掲示板である。各種のテーマ毎にニュースグループと呼ばれる場が設けられ、利用者は、そこに自分の書いた文章を投稿する事や、他の利用者の投稿した文章を読む事ができる。また他人の書いた文章を引用して、更に自分の意見を投稿するフォローアップや電子メールで意見を送るリプライが標準的な機能として備わっており、互いの意見を交換する議論の場としての環境が整っている。このようにニュースグループの役割はメーリングリストのそれに近いが、メーリングリストはあくまでもリストに登録された特定多数を対象としているのに比べて、ニュースグループは不特定の相手に対して公開されている点が異なる。

ニュースグループの数は随時変化しているが、1994年8月中旬時点で約4,000に上る。ニュース

グループ名は階層的に付けられていて、その名前からニュースグループの内容が分かるようになっている。例えば `fj. comp. printers` というニュースグループは、日本語を主とするニュースグループ階層 (`fj`) の計算機関連の話題 (`comp`) のうちプリントに関する話題 (`printers`) を扱うニュースグループである。ニュースグループ名のうち、最初の「.」よりも前の部分はおおむねそのニュースグループの大まかな性格を表すものである。例えばインターネットの代表的なニュースグループ群の一つ USENET のうちの `comp...` は計算機に関する話題を扱うニュースグループ群であるし、`gnu...` はメジャーなフリーソフトウェア群である GNU のソフトウェアに関するニュースグループ群であり、また `fj...` は前述の通り日本語を主たる言語とする¹⁾ニュースグループ群である。ニュースグループには、このような全世界をカバーするようなものばかりでなく特定の組織内のみでの話題を扱うニュースグループ群も存在する。例えば理工学部では矢上キャンパスに固有の話題を扱う `yagami...` が運営されているし、その他に各学科や研究室のレベルで独自のニュースグループ群が運用されている。

現在理工学部では、`kogwy. cc. keio. ac. jp` が理工学部の中心となるニュースサーバである。このサーバが各学科や研究室にあるニュースサーバと記事を交換している。また湘南藤沢キャンパスにある WIDE のニュースサーバと記事を交換することで外部とのニュースのやりとりを実現している。

電子ニュースの書式がもともと電子メールのそれを踏襲している点を始め両者の共通点は多いが、最も重要なのはどちらもユーザにとって非同期通信である点である。全世界を通信対象とする性質上、通信時間や時差等の問題が避けられないインターネットにとっては、広い範囲でのコミュニケーションを成立させるためには非同期通信が不可欠である。同時に、元来研究者同士のコミュニケーションとしての歴史が長かったことからか、電子メール／ニュースの世界では見知らぬ者

同士のコミュニケーションに対する抵抗が小さい。例えば全く初対面の相手に対して電子メールで質問をする事も、常識的な礼儀を弁えていれば決して失礼には当たらない。さらに電話等と同様に、世界中のユーザ間の距離を縮め、離れた場所にいるユーザ同士のコミュニケーションを容易にする効果がある事は明らかである。これらの帰結として、インターネットの電子メールや電子ニュースは単なるツールの域を越え、世界中のユーザをメンバーとする電子社会を構築するための基盤となりつつある。実際、各種ニュースグループ群の管理は多くの場合さまざまな場所から名乗り出たボランティアたちが共同して行い、何らかの重要事項（ニュースグループの作成、廃止等）を決める際には電子メールによる投票が行われるといった、直接民主主義による自治が行われている。

もっとも、このような電子社会にも問題は少なからず存在する。インターネットに限った事ではないが、電子メールや電子ニュースでの特徴的な現象としてユーザ同士が直接顔を合わせていないためか、議論が過度にエスカレートした時には往々にして現実以上に激しい非難合戦が起こりやすい。また、先日アメリカの、ある地方パソコン通信局から弁護士夫妻が世界中のニュースグループに「容易に金を稼ぐ方法」といった類の投稿を行って世界中から抗議の電子メールを浴びるという事件が起こった。これは、インターネットへの参加が容易になったが故に現実社会の問題点がそのままインターネット社会に持ち込まれるという現象の一つである。

2. Anonymous FTP

Anonymous FTP は、もともと UNIX で異なるマシン間でのファイル転送に使われる FTP を用いて、ファイルシステムの一部を `anonymous` (匿名) ユーザで誰でもアクセスできるようにする機構である。インターネットで歴史的に多く使われてきた UNIX マシンにこの機構が標準で備えられていた事から、現在でもインターネットで

のデータ公開の手段としてもっとも普及しており、世界中に無数の anonymous FTP サーバが存在する。多くの大学では文書やソフトウェアの配布を目的として anonymous FTP サーバを運営しており、また Apple や Sun などの計算機メーカーでもソフトウェアのサポートのためにサーバを持っている。理工学部でも、センター組織の運営する bash. cc. keio. ac. jp をはじめ各学科や研究室にいくつかの anonymous FTP サーバがある。

Anonymous FTP で公開されているデータは、論文等の文献データベースからフリーのソフトウェアまで幅広い。特に研究者にとって、テクニカルレポートなど、グレーな文献を比較的容易に入手できるのは大きな利点である。同時に、文献を発表する側にとっても論文誌等の公な場で実際に発表されるまでのタイムラグを縮める事ができるという利点がある。

また、UNIXにおいて非常に充実しているフリーのソフトウェアの作者にとって、Anonymous FTP で世界中のユーザに公開する事によって問題点の指摘、改善や機能強化等のフィードバックが得られることは大きな利点である。現在インターネット上では、AT 互換機用のフリーな OS をはじめ日常必要なソフトウェアを全てフリーソフトウェアで賄う事さえ可能である。このようなフリーソフトウェアの充実は、Anonymous FTP や電子メール、電子ニュースによるインターネット上の世界中のユーザの協力抜きにはあり得なかったと考えられる。

3. Gopher, WWW, WAIS

Anonymous FTP は、手軽にデータ公開ができる利点から現在でも広く使われているが、もともとファイルの転送のために作られている事から遠隔地のデータを直接見るには不都合な面がある²⁾。近年になって計算機やネットワークの能力が向上したことにより、データを転送する事より、わかりやすい形で表示する事により重点の置かれた、分散型情報システムがいくつか登場して



図 1 Gopher

いる。

3.1. Gopher

Gopher は、1991年にミネソタ大学で開発された分散型電子掲示板システムであり、この種のシステムとしては最初のものである。Gopher は、各地のサーバ毎にファイルシステムと同様の階層型のデータ構造を持っており、メニュー形式のインターフェイスによりメニューの各項目にアクセスすることで、対応するファイル（文書、画像、音声等）を見たり他のメニューに移動することができる。

現在広く公開されているものだけでも世界各地に約 1,800 のサーバが存在する。また、一部には anonymous FTP や電子メールアドレスの検索、telnet による図書館へのアクセスを実現しているところもある。

Gopher は、既存のテキストファイルをそのまま利用できるという点で文書の公開に向いており、米国では大学や NASA などの研究機関だけでなく、ホワイトハウスもプレスリリースなどを公開した Gopher サーバを提供している。理工学部計算センターでも 3 つの Gopher サーバを運用

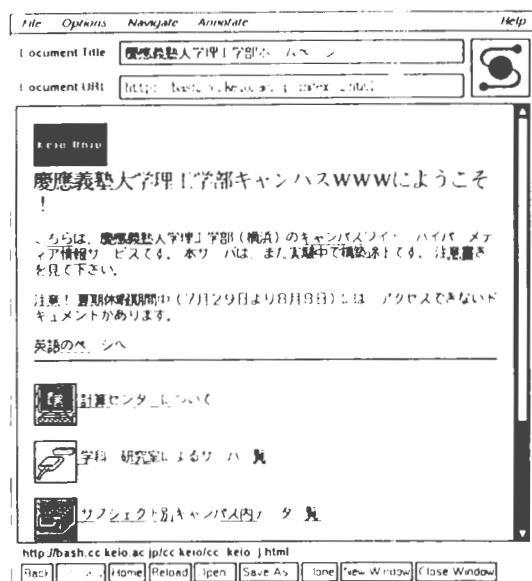


図2 WWWをMosaicでアクセス

しており、ソフトウェアの利用方法やお知らせなどのドキュメントを提供している。

3.2. WWW

WWW (World Wide Web) は、Gopher と同様の分散型情報システムであるが、Gopher と違いデータ構造としてハイパーテキストを採用している。すなわち、文書の一部分（単語、図等）にタグを設定し、これにアクセスする事で他の文書へのアクセスを可能にしている。例えば、東京に関する文書のなかの「千代田区」というタグをアクセスすることにより千代田区に関する別の文書へアクセスする、といった具合である。WWW の特徴の1つは、このタグを表す URL (Uniform Resource Locators) と呼ばれる表記法を用いることによって、WWW のみならず Gopher、Anonymous FTP、電子ニュースなど、他のシステムに対するアクセスをも表現できる。これにより WWW から他の多くの情報サービスにアクセスする事が可能になっている。

また、WWW では文書の記述に HTML と呼ばれる SGML を元にした記述言語を用いてお

り、章立てや強調等の文書整形ができるだけではなく、文書の中に画像、音声、動画などを取り込む事ができる。その結果、データをファイル単位でしか扱えない Gopher と比べて文書としての見栄えが格段に向かっており、最近では Gopher に代わってインターネットの情報システムの主流になりつつある。

WWW は比較的歴史が浅いために Anonymous FTP や Gopher 程は普及していないが、それでも世界各地に多数のサーバが存在し、種々の文献などのデータにアクセスする事ができる。最近では WWW の見栄えの良さからか、大学や企業の中にも WWW を用いて宣伝、広報を行う所が出てきている。また、WWW の代表的ブラウザである Mosaic について富士通と WIDE から別個に日本語化の計画が発表されるなど、日本国内のインターネットでも注目度は高い。理工学部でもセンター組織の他、10研究室で WWW サーバが運用されている。

このように WWW は今インターネットで最もホットなトピックスであるが、問題点がないわけではない。WWW の最大の特徴は画像、音声をふんだんに使える点であるが、これらのデータは従来 Gopher で主に流れていたテキストデータに比べて格段にデータ量が多く、ためにネットワークの転送容量に対する負荷が大きくなってきており、WWW は「インターネットキラー」とまで呼ばれている。実際、日本国内でも転送速度の遅いサイトでは転送時間がかかりすぎて WWW が実質的に使い物にならない場合もある。

3.3. WAIS

WAIS は、一言でいえば分散型の単語による文書検索システムである。WAIS では、各地の文書データベースを「ソース」と呼ぶが、検索の際はこのソースに対してキーワードとなる単語を指定することにより、単語を含むソース中の文献を得ることができる。単語検索という目的自体が、閲覧型のシステムである WWW や Gopher とは異なるが、他のシステムと同様必要なソフトウェア

がインターネット上でフリーソフトウェアとして供給されたため、広く普及している。現在テクニカルレポートをはじめとした各種の学術文献や電子ニュースの過去の記事など、世界中に広く公開されているソースだけでも約 600 に上る³⁾。検索も、専用のソフトウェアの他、WWW や Gopher から行う事ができる。

3.4. 電子図書館

計算機による文献の題名、著者名を用いた検索を遠隔地からインターネットを介して行う事は、米国では既に常識となりつつある。日本では東大、東工大、早大など 7箇所で telnet によるリモートアクセスサービスを提供しているに過ぎないが、最近千葉大学付属図書館で WWW からアクセス可能なより使いやすいシステムが公開され、話題になった⁴⁾。

4. おわりに

これまで述べて来たように、90年代に入ってインターネットは単なる通信媒体から、様々な形態を持つ情報の源泉へと変化した。同時に、最近の計算機の低価格化や冒頭で述べたインターネット

への参加形態の変化などから、インターネットはもはや限られた一部の恵まれた人々の占有物ではなくなりつつある。これにより、現実社会からある種の規制や制約を受けるかもしれないが、ある面では、インターネットの中に新たな電子社会が生まれたのと同様に、インターネットが現実社会に大きな影響を及ぼす存在となる日もそう遠くはないだろう。

注 1) 全世界を網羅するインターネットの性質上、電子ニュースの上での公用語は原則として英語である。

注 2) 例えば、標準的な FTP のプログラムは遠隔地のファイルを直接表示させる機能は持っていない。また、多くの場合 Anonymous FTP に置かれているファイルは転送時間短縮のため圧縮されているので、ファイルの中身を見るには転送してから圧縮を解くというステップを踏まなければならない。

注 3) これらのソースに関する情報は Anonymous FTP で入手できる。

注 4) 桧垣泰彦、有岡圭子、池田宏明 “千葉大学附属図書館の利用者のための情報システム (culis)”, 第23回 jus UNIX シンポジウム



インターネットを利用して

広田 とし子
 梁瀬 三千代
 宮崎 康子
 (三田メディアセンター)

1. はじめに

本年に入ってからマスコミでその言葉を見ない日はない程、インターネットに対する世の中の関心は高まっているように思える。ここでは、三田メディアセンター（三田 MC）の情報メディアサービス担当におけるインターネットの利用状況をまとめてみたい。

2. ワークステーション(WS)の利用状況

塾内では、インターネットと WS は不可分の事柄であると思われる所以、まず、WS の普及状況を見てみたい。

三田 MC では1992年の秋頃に最初の WS が設置された。当時、湘南藤沢 MC にインターネット経由での外部データベースの利用可能性について調査するグループが結成されており、この調査に協力する必要から三田 MC および医学 MC に WS が設置されることになった。この頃、図書館にはパソコンおよびホスト端末の管理についてかなりノウハウの蓄積があったが、UNIX 系 WS は湘南藤沢 MC および理工学部でしか利用実績がなく、三田地区で管理するのは無理との判断から、代わりに理工学部計算室のスタッフが設置および管理を行うという体制でとりあえず WS の利用がスタートしたのである。

設置後一年ほどは実験目的のため一

部のスタッフが利用するにとどまっていたが、世の中の趨勢を反映し、ぼつぼつと利用者が増えてきた。現在三田地区には cc, lib, flet, rsch という 4 つのドメインがある。図書館内のドメインである lib には、WS のクライアントが 3 台とクライアントに接続され WS 経由でインターネットの利用が可能なパソコンが 4 台ある。また、lib のアカウント登録者（利用資格者）は 25 名である。

三田だけでなく、全地区の図書館系のスタッフがどのように WS を利用しているか簡単にまとめてみた。以下は現在、各 MC で WS のアカウントを持っている図書館系スタッフに電子メールを用いて行ったアンケートの結果である。（表 1）

利用で最も多いのは電子メールであり、電子掲示板／電子ニュース・情報検索などの利用にはばらつきがある。OASYS による文書作成が一般的であるせいか WS を文書作成のために利用する人は少ないし、LaTeX などは OASYS に比べるとかなり難解であり、使いたくても使えないという事情もあるだろう。その他の利用としては、「ファイル転送」、「C 言語の学習」、「開発ツールとしての利用」などがあったが、これはごく少人

表 1 WS の利用の現状

	電子メール	電子掲示板／電子ニュース	情報検索	文作成	その他
--	-------	--------------	------	-----	-----

よく利用する	19	5	7	1	
たまに利用する	5	4	7	3	
ほとんど利用しない	1	6	6	5	
利用したことがない	0	9	5	17	
その他	1	2	1	0	

次は何を利用したいか（複数回答）	0	10	6	7	6
------------------	---	----	---	---	---

各地区回答率 (回答人数/アンケート送付数)		WS 設置台数 (TISP 接続パソコン含む)
三田	9/25 (36%)	7 台
日吉	3/7 (43%)	1 台
矢上	4/10 (40%)	8 台
四谷	3/7 (43%)	2 台
藤沢	6/10 (60%)	約 20 台

数の利用である。今後利用したい用途は、電子メール以外に分散した。その他の用途として、「Mosaicによる利用案内の開発」「情報検索のための統合的インテリジェント・インターフェースの開発」「マルチプラットフォーム環境でのクロスデータベース検索の開発」などがあった。また、「一般ユーザへの公開をにらみ、全塾で環境整備を行うべき」との意見も見られた。

このように、現状では結局電子メールの利用に留まっており、WSの数の制限、マニュアル・講習等の不備などからなかなか多角的な利用には至っていない様子が窺われる。WSの利用はまだ緒に就いたばかりと言えよう。

3. 三田MC情報メディアサービス担当におけるインターネットの利用

1993年の春頃から徐々にインターネットを業務に利用し始めるようになった。インターネットは言わばネットワークのネットワークであり、そのネットワーク上には様々な情報資源が散在している。その情報資源をどのように利用するかは利用者次第であるが、情報メディアサービス担当ではレンタル業務と海外ILLを担当しており、その関連から主に次のような用途でインターネットを利用している。

① 書誌事項確認

新しい文献やローカルな文献、灰色文献など各の全国書誌に掲載されないようなものの書誌確認に利用。

② 文献の所在調査

海外にILLの申込みをする際に利用できるばかりではなく、国内の図書館も徐々にそのOPACをインターネットに開放しつつある。東京大学、早稲田大学（協定により利用）、筑波大学のOPACなどが代表的なものである。

③ データベース検索

NACSIS-IR、DIALOGなど従来導入していたデータベースをインターネット経由で利用すると通信費が安価ですむばかりでなく、インターネット接続後はじめて利用が可能になった次のような

データベースもある。

UnCover—洋雑誌約18,000タイトルが収録された米国の目次速報データベース。

国立民族学博物館のデータベース・サービス

④ その他様々な情報資源

上記以外に全文情報、統計情報、政府関係情報、図書館の利用案内、名簿情報などインターネット上には様々な情報資源があるが、体系的に業務にとりこむのはむずかしい。

利用方法としては上記のようなものがあげられるが、その中でもやはり利用が多いのは他図書館のOPACである。次に海外のOPACと早稲田大学のOPAC-WINEの利用事例を紹介したい。

4. 海外のOPAC利用事例—あるスタッフの体験記

利用者から、当大学に所蔵していない洋図書中の論文を入手したいとの依頼を受けた。とりあえず、NUC(National Union Catalog)を検索してみると、1990年にニューヨークで出版されていることが確認できた。国内の所蔵を調べてみたが、残念ながら見つからない。出版地がニューヨークなので、ニューヨークの図書館なら所蔵している可能性が高い。しかし、海外への文献複写依頼等は、郵送のやりとりに時間がかかるため、申込みは確実に所蔵している図書館にしたいが、手紙で問い合わせをすると、それだけでかなり時間がかかってしまう。

そこで問い合わせをする前に、試しにインターネットでNew York Public Libraryの所蔵を調べてみることにした。私にとって、海外のOPACにアクセスするのはこの時が初めてで、検索はもちろん、つながるかどうかとも不安だった。まずは、N.Y. Public LibraryのOPACにつなぐための手順を調べて入力。すると割合すんなりメニュー画面に入ることが出来た。（図1）あとは、画面の指示に従い次々と進んでいった。（図2、3）この時は、海外のOPACを直接使っているということ自体に興奮していて、一画面変わる度に感心したり感動したりしていた。そして求める

図書の所蔵を確認することができた。(図4, 5)。早速 N.Y. Public Library に該当論文のコピーの送付を依頼した。その約一ヶ月後論文は請求書とともに到着し、無事利用者の手に渡すことが出来た。

初回の利用がこのようにうまくいくとついインターネットに頼りがちになってしまふが、当然そういうまく行く時ばかりでもない。

例えば①海外に接続しているせいか入力してからのレスポンスがかなり遅い。②基本的に24時間使えるはずだが、使える時間帯を制限しているところもあり、自分の好きな時間に調査ができない。③OPAC の使い勝手が各図書館によって異なる。など、問題点はまだまだたくさんある。

インターネットは、所在調査・書誌事項調査の手段としてかなり重要な役割を果たしうる。その利点・欠点をよく理解した上で、業務の中に取り込み役立たせていくば、業務の幅もかなり広がることだろう。

5. WINE を使った検索例

慶應義塾大学と早稲田大学の図書館相互利用については、それぞれがもつ図書資源について、学内研究者の利用を妨げない範囲において互恵の原則に基づく相互の利用を開始するという協定が、昭和60年10月に交わされ、1)図書の館外貸出(専任教員に対して) 2)館内閲覧、3)文献複写などについて、昭和61年4月1日より実施されている。

昨年度の早慶相互協力の実績は、平成5年度情報メディアサービス担当統計によると、早稲田大学からの複写依頼・調査依頼440件(私立大学の17.38%に該当)、早稲田大学への所蔵調査を含む複写依頼の件数は249件(私立大学の40.03%に該当)となっている。複写依頼においては私立大学の中でもかなり高い数字を示しており、相互協力の成果が現れているといえる。また、現物貸借においては平成5年度標準統計をみると、早稲田大学からの借用が80冊、早稲田大学への貸出が403冊となっている。

レファレンス業務では、利用者に対して他館の

所蔵調査を行うことがあり、その際に学術情報センターの NACSIS-CAT を使って検索することが多い。ただ、早稲田大学の所蔵については和・欧文雑誌の検索はできるものの、図書の所在については検索できないのが現状である。

現物貸借ができることからも、早稲田大学の OPAC システム WINE が検索できればと常常思っていたが、平成6年4月より三田 MC と早稲田大学との間で協議・合意の下、インターネット経由で検索できるようになった。

ここでは、利用者からの所蔵調査依頼を実際に受け、処理した手順を説明していこうと思う。

1. telnet で IP アドレスを指定する。
2. WINE の漢字コードである Shift-JIS コードを設定する。
3. WINE を選定する。
4. 情報検索を指定する。(図6)
5. 書名で検索する。(図7)
6. リストの中から該当するものを選択する。(図8)
7. 該当する書誌事項を表示する。(図9)
8. 所蔵データを表示する。(図10)
9. 目録検索を終了する。
10. WINE を終了する。

レファレンス業務では、FMR-70Σ (NACSIS-CAT用), FMR-50 NL/T, FMR-60 HE 3 (KOS-MOS 業務用), PC-9801 ES, UNIX などのコンピュータを駆使しながらデータベースを検索し、所蔵調査や事項調査を行っている。端末の操作法を知ることは必要最低限なこととして、これからはどのようなデータベースをどういった手段で検索すれば良いのか、どの大学や公共図書館の OPAC を検索すれば良いのかなどを把握していくことが大切になっている。漢字・カナでの入力や検索コマンド、サービス時間帯など様々な問題があるものの、一度でも多く検索することが使い勝手を知る早道と思うのだが……

6. インターネット利用上の問題点と今後

インターネットの利用はレファレンス業務に

とって、欠かせないものになりつつある。しかし、上記の利用事例でも触れられていたようにまだ利用上・技術上の問題も多い。例えば、異なった漢字コードのデータベースに UNIX の WS からアクセスする際には、検索語の入力、表示、出力、それぞれ異なった手順を踏まないと、文字化けは避けられない。また、ネットワークの接続も必ずしも安定したものではなく、昨日アクセス可能だった OPAC に今日はつながらないということがしばしば起こる。そして、その原因が、先方のコンピュータのサービス休止のためなのか、接続経路のどこかに問題があるのか（インターネットでは様々なネットワークを経由して求めるコンピュータに到達する）、それともそれ以外の問題なのか解明するのはむずかしい。また、ネット

ワークの混雑のため、時間によっては反応時間が非常に遅い。特にこの半年ほどで、塾内・日本国内の利用が急速に伸びてきた結果、反応時間がかなり遅くなってきてている。

しかし、これらの問題があっても有り余る魅力がインターネットにはある。時間的、空間的な障害を電子的に解決する方法、それがネットワークであり、それが魅力的であることは、この半年程の塾内外での急速な利用の伸びを見れば明らかである。今後、インターネットへの要望はエンドユーザーからも益々強くなっていくものと思われる。より多くのユーザーにインターネットを開放し、技術上・利用上の問題を解決していくためには、何よりもまず、充分なスタッフを揃えた強固な管理体制を築いていく必要があろう。

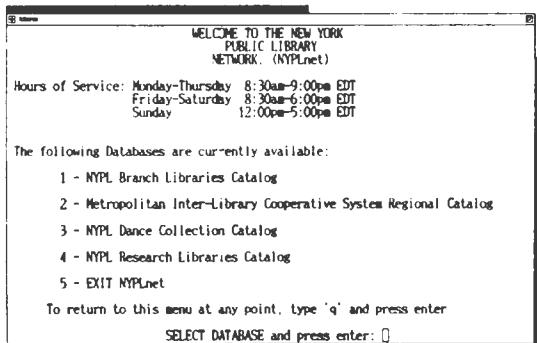


図 1

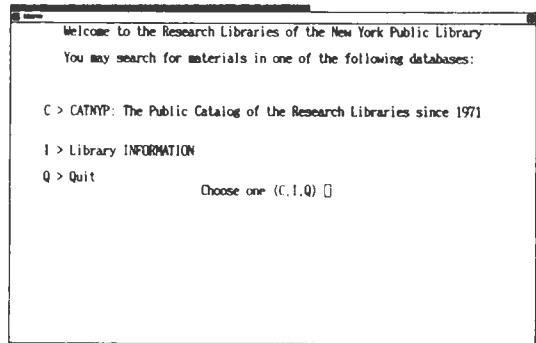


図 2

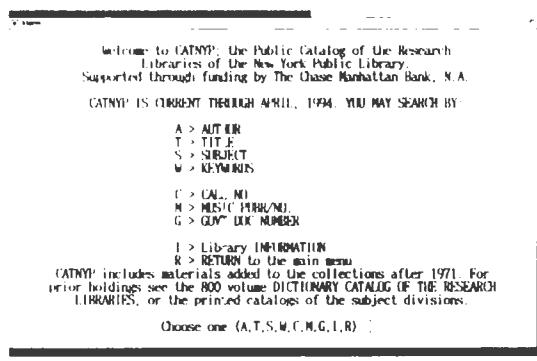


図 3

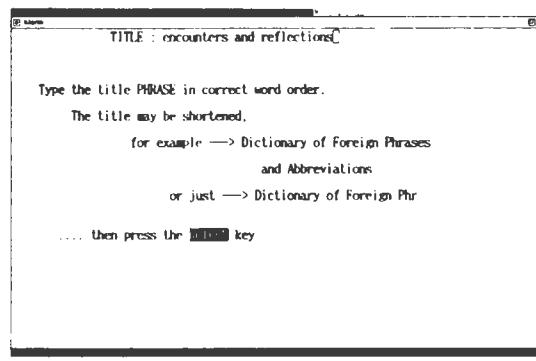


図 4

特集 インターネット

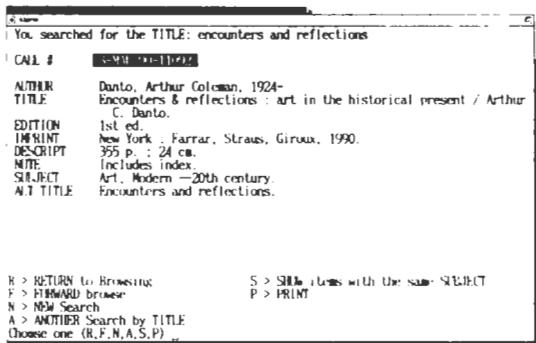


図 5

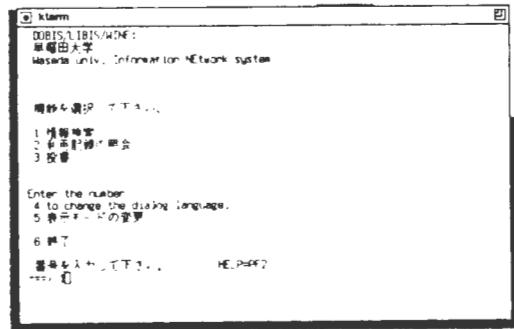


図 6

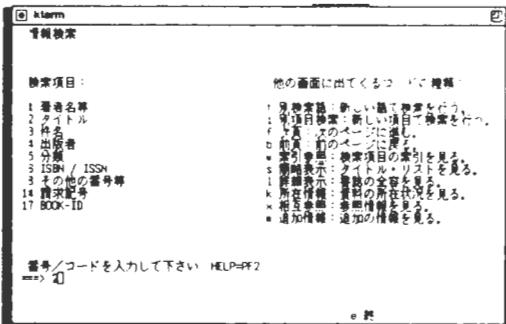


図 7

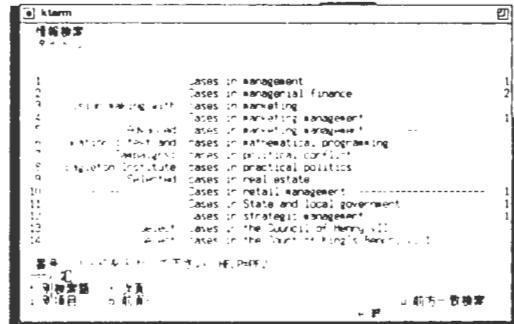


図 8

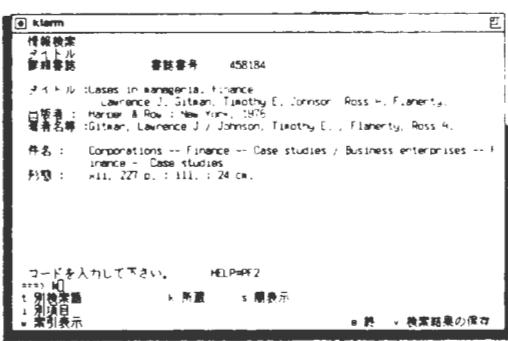


図 9

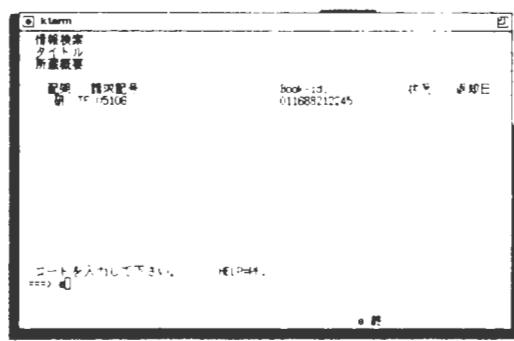


図 10

医学メディアセンターとインターネット

いち　こ　みどり
いがらし　ゆゑこ
五十嵐由美子
なが　ぬま　まりこ
長沼　真理子
(医学メディアセンター)

1. はじめに

インターネットの展開は、図書館活動に今後大きな影響をもたらす可能性を持っている。インターネットを利用して利用できるサービスは、電子メール、ファイル転送、リモートログインなどがあるが、医学メディアセンターでは、これらをパブリック部門および、テクニカルサービス部門とともに、日常業務に利用している。特に、一般に広域情報検索ツールと呼ばれている、gopher や Mosaic の利用ができるようになってからは、誰でも簡単にインターネット上の情報を手軽に入手し利用することが容易になり、より一層インターネットが身近な存在となりつつある。

2. 情報メディアサービスにおける利用

2-1 レファレンスおよび相互貸借業務における利用

レファレンス業務においてインターネットの影響の最も大きかったものは、オンライン検索である。これまで、BRS、Dialog 等の利用は、それぞれの代理店の提供している通信回線を利用していただが、インターネットの利用によって、検索料金は大幅に節約できるようになった。当センターでは、年々 CD-ROM の導入によりオンライン代行検索は減少しているが、代行検索利用者の評判は良い。

レファレンスカウンターでは、様々な質問が展開される。これらの質問に対して、ニュースグループに投書して答えを得られることがある。ただし、インターネット上の情報は無数に存在する

ため、ニュースグループの選択には注意が必要である。医学図書館のグループである、medlib-l のサブスクリプションの経験では、毎日15件を越える投書があり、また、4月以降に投書した5~6の質問には、すべての回答が得られた。こうしたニュースグループの把握、さらに、多様なサービスの情報を得るためにには、数か月おきに改定される、Lee Hancock 編集による「Internet / Bitnet Health Science Resources」が便利である。この資料は、ニュースグループ上で流される改定情報の度にファイル転送して、レファレンス資料として活用している。当然検索可能な情報にもなっている。

Mosaic の利用も有効である。Mosaic を利用すれば、インターネットの初心者であっても、これまで必要であったコマンドを意識しないで情報に行き着くことができるため、気軽に入り込むことができる。

代表的な情報源の一つである、世界保健機構(WHO)のサーバを例にあげ、Mosaic を紹介しよう。図1は、WHO のホームページである。Mosaic の機能によって、情報間の行き来は、非常に容易なため、いくつか有効な情報源を見つければ、予め Mosaic のホットリストにアドレスを登録しておけば次からの検索にも便利である。Mosaic 上では、ホームページ上の下線部分をクリックしていくだけでさまざまな情報が得られる。例えば、画面上の下線についている、World Health Organization の部分からは、いわゆる WHO のダイレクトリとしての情報が得られる。一度アクセスするとその部分は破線に変化する。続いて、Information の中の、WHO Gopher Server や、Other selected Web servers をクリックすれば、さまざまなサーバへアクセスできる。WHO のサーバの場合には、WHO および、他の国連機関の情報をはじめとして、医学図書館にとって重要な情報源である、米国国立医学図書館や、遺伝子情報の拠点である、ジョンズ・ Hopkins 大学が含まれているため有効である。また、米国の政府機関も、メニューに含まれてお

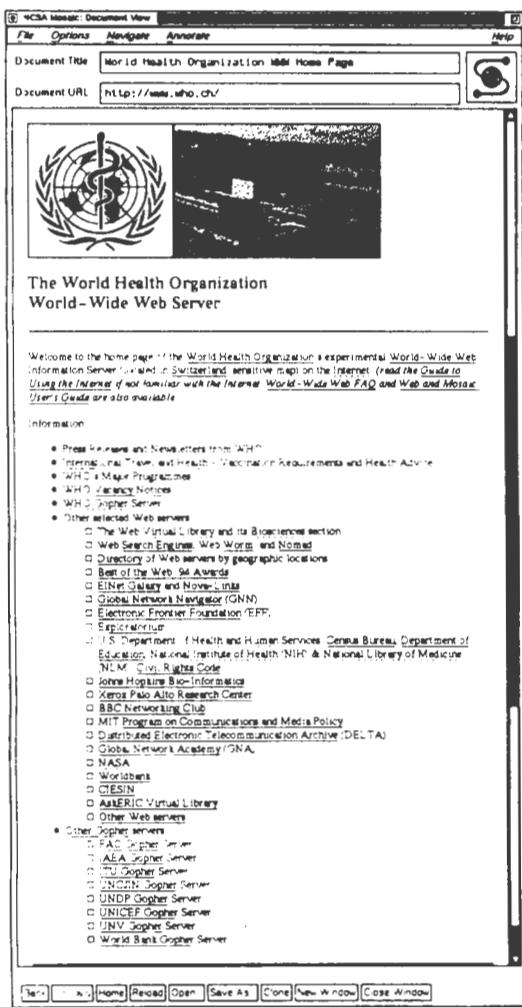
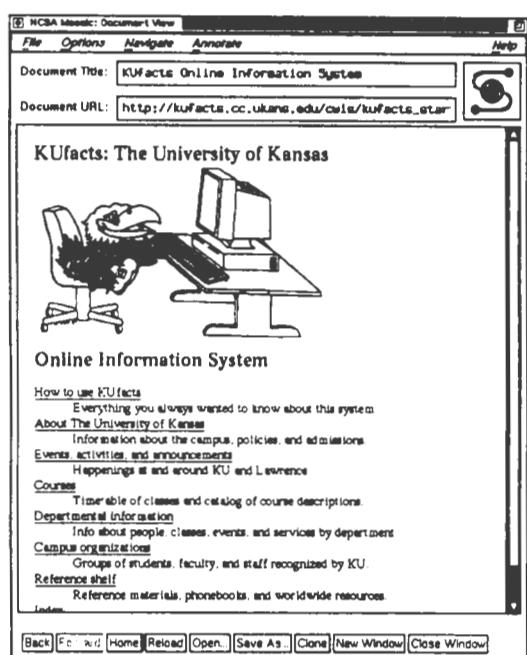


図 1

り、統計など貴重なデータも入手できる。これらの情報は、たとえメニュー上に情報源が上がっていなくとも、Mosaic の機能により、気長にクリックを繰り返していくば、求める情報にたどり着くことはできるが、メニューの編集内容の特徴を体験し、各図書館にとって最も有効なサーバを見つけておくほうが実際の利用のためには便利である。ちなみに、1994年の International W3 Conferenceにおいて、最も高い評価をうけたシステムについて、現 WHO のホームページから、行き着くことができるので、比較するのも面白いかもしれない。(図 2)



Back | F1 | End | Home | Reload | Open | Save As | Close | New Window | Close Window

図 2

2-2 相互貸借とインターネット

相互貸借におけるインターネットは、文献のベリファイに有効である。各国の OPAC を、書誌事項の確認に用いることができるほか、医学図書館にとって最も大事な用件である、新しい情報を手に入れるために UnCover を利用することもある。UnCover は、もともと CARL (Colorado Alliance of Research Libraries) に開発の端を発し、目次速報データベースおよび、ドキュメントデリバリーサービスを合わせて提供しているサービスである。目次速報サービスの検索は無料でできる。著者名、雑誌名、キーワードから、検索できるこのシステムは、カレントコンテンツに比べ早い情報が得られる。

また、現在、BLDSC (British Library Document Supply Centre)への申込みは、学術情報センターシステム経由の ARTeI2 で行っているが、このシステムでは、謝絶等の結果を得るまでにかなりの時間がかかっている。一方、インターネット経由の申込みでは、申込みの結果が画面上ですぐに得られるため、状況確認が必要な場

合には、インターネット経由でアクセスしている。

2-3 資料整理とインターネット

資料整理業務においては、インターネットを書誌確認の1つの手段として用いている。

米国国立医学図書館（National Library of Medicine, NLM）は1993年2月に NLM Locator という新しいオンライン目録システムを NLM の館内利用者に提供した（図4）。Locator とは CATLINE（単行書）（図5）、AVLINE（視聴覚資料）、SERLINE（NLM 及び他館所蔵の定期刊行物）（図6）の3つのデータベースを検索するためのインターフェースで、NLM の蔵書目録にメニュー方式によって容易にアクセスすることができる。

1993年6月にはインターネット利用者に対して Locator のインターネット版を公開し、“telnet locator.nlm.nih.gov” のコマンドの後、“locator” でログインすれば誰でも無料で locator に入ることができるようになった。

図書目録係では、洋書の目録をとる際、必要な場合はインターネット経由で CATLINE を利用している。CATLINE を検索して書誌を参照する目的は、主として件名（MeSH）や分類（NLMC）を知ることである。MeSH や NLMC は LC/MARC に記述されていることが多いが、LC/MARC のすべての書誌に付与されているわけではなく、米国以外の国による出版物などそもそも LC/MARC にない図書もある。やはり医学関係の資料が網羅的に収集され、MeSH や NLMC の付与など医学分野の検索者向けに整理されている NLM の目録が最も参考になる。

当センターでは、以前 NLM の目録は冊子体によってしか知ることができなかったが、インターネットの導入によって NLM の目録が随時検索できるようになったため、洋書の効率的な整理に非常に役立っている。

雑誌係は、新規受入雑誌を選定するために、利用者からの購入希望や創刊雑誌の広告等を参考に

している。それらの雑誌の書誌情報を得たい時に、出版社や出版国がマイナーである等の理由で、二次資料や、NACSIS-CAT の目録情報の調査だけでは十分な情報を得られない場合がある。

この種の雑誌は、国内取次店の販売カタログには掲載されていないことがほとんどで、また運よく掲載されていても、詳しい出版情報は不明の場

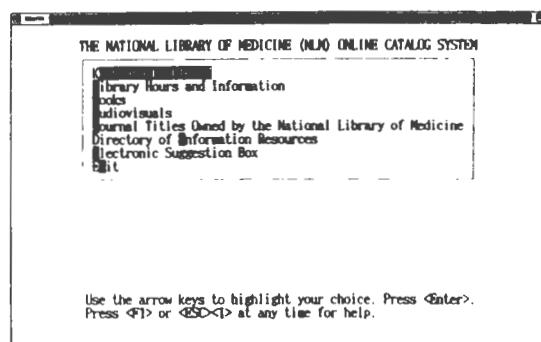


図 4

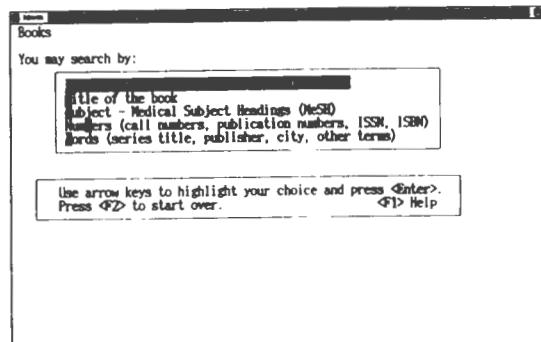


図 5

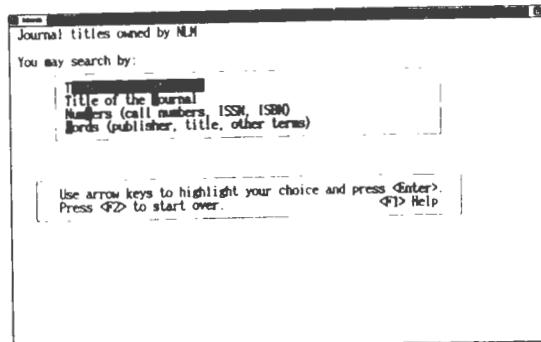


図 6

合が多い。したがって、これらの雑誌の新規受入選定を行う際、他の雑誌との比較する基準となる情報を収集することにいつも苦労することになる。

インターネットを介して利用できる NLM のオンライン目録である SERLINE が検索できるようになった今、その目録情報が新規受入雑誌の選定の有用な情報になることが度々ある。

NLM は生物・医学系の雑誌を網羅的に収集しており、その目録情報の信頼性は高い。注記等も詳細であるため、出版社の変更等も参考になる。

をおろしつつある。また、日々目にする新聞や雑誌記事においても、インターネットの記事は数限りない。そのため、教員や学生から、しばしばインターネットについての質問を受け、また、図書館での利用あるいは、研究室からの利用を求められる。残念ながら、医学部キャンパスには学内 LAN の敷設など、解決されなければならない問題も多いが、メディアセンターの職員としては、ネットワークに関する知識や、今後の図書館活動に対する調査、検討を重ねて行かなければならぬ時期に来ているといえよう。

3. おわりに

このように、インターネットは日常業務にも根

三田図書館・情報学会月例研究会

第76回（平成6年1月29日）

「大学図書館における利用指導と図書館広報について」

発表者 仁上幸治（早稲田大学図書館国内図書課チーフ）

第77回（平成6年3月19日）

「今後の図書館サービスの展開と著作権」

発表者 越塚美加、神門典子（慶應義塾大學大学院）

第78回（平成6年5月13日）

「インターネットでショッピング」

発表者 戸田慎一（東洋大学社会学部）

第79回（平成6年7月9日）

「日本のOPAC—現状と課題」

発表者 福島寿男（国立国会図書館図書部図書整理課）

これらの研究会は、非会員にも公開している。また、年刊の機関誌 Library and Information Science は、個人会費（年額 ¥3,000）、機関会費（年額 ¥5,000）を支払った会員に送付される。

学会への入会、機関誌等に関する問い合わせは、慶應義塾大学図書館・情報学科事務室（Tel. 03-3453-4511 内線3147）で受け付けている。

インター ネット

楠 本 博 之

(湘南藤沢メディアセンター)

1. インターネットとは？

インターネット（internet）とは、ネットワークの相互接続状態を指す言葉であるが、最近世間で話題になっているインターネットとは、The Internet のことを言い、TCP/IP プロトコルという通信体系に基づく世界規模の相互接続ネットワークである。

1969年に始まった ARPANET にその原点があり、元々は軍事目的のネットワーク技術の開発を行なうためのものであったが、全米の大学、研究所の研究者によっていろいろな使われ方をするようになった。当初は 56 kbps の速度の回線で全米を結ぶネットワークを構築していたが、NFSNET と呼ばれる NSF (National Science Foundation) が全米のスーパーコンピュータセンターを高速ネットワークで結ぶことを目的として構築され、米国以外とも接続するようになり、Internet の形成が進んだ。回線速度も、1.5 Mbps から最近では 45 Mbps と、高速化がはかられてきている。さらにクリントン-ゴア政権による NII (National Information Infrastructure) 構想により、Gbps (ギガビット毎秒) を越えるネットワークの構築が研究されている。

わが国では、ネットワーク研究プロジェクト WIDE による WIDE インターネット、物理学や天文学などの主として理学の研究者のための運用ネットワークである TISN、学術情報センターによる SINET といった研究ネットワークの構築が 1988 年頃から始まり、Internet への接続を行っている。1993 年頃からは商用ネットワークが立ち上がり、SPIN、IIJ、InfoWeb などの商用ネットワーク業者がサービスを開始している。

Internet では、現在 152 か国に電子メールが届

き、75 か国がリモートログインなどの実時間ベースの高機能なアプリケーションが使用できる接続を行っている¹⁾。

2. Internet 上で利用できる機能

Internet は、当初研究機関による研究のためのネットワークという性格が強かったが、今日ではさまざまな使われ方をしている。ここでは、Internet 上で利用できる機能や、展開されているサービスの一部を紹介する。

2.1. リモートログイン

いわゆる、コンピュータの遠隔地利用である。ARPANET も遠隔地のホストコンピュータへのアクセス手段の提供が主要な目的であった。その後の NFSNET も、全米のスーパーコンピュータセンターを高速ネットワークで結ぶことが目的であった。学内のキャンパス間ネットワークでも、三田、日吉、矢上、四谷、藤沢の各地区の TCP/IP プロトコル接続している計算機では相互にログインすることが可能であり、多種多様な使われ方をしている。

2.2. 電子メール・電子ニュース

今日、これだけネットワークが広く使われるようになったのは、電子メールによるところが非常に大きい。当初、ネットワークの研究開発を行なっていた研究者も、これほど電子メールが使われるようになると想像していた人はほとんどいなかった。現在では、研究者間の連絡手段として欠かせなくなっているが、これは次のような理由があげられる。

- 電話と異なり、相手がその場にいなくてもメッセージを届けられる。
- 通常の郵便と異なり、インターネット上ではほぼすぐに相手先のコンピュータに届く。
- 通信の内容が必然的に計算機上に残るので、後から参照するのに便利である。
- 多数の人に同じメッセージを同時に送るのも一人に宛てるのも同じ手間ができる。

日本では、1984年10月に慶應義塾大学、東京工業大学、東京大学の3大学を公衆回線とモ뎀を用いて、UNIXシステムに備わっていた通信プロトコルUUCPを用いて、接続がなされたのが、JUNETのはじまりである。当初は英語で書かれた電子メールだけであったが、すぐに漢字による電子メールの交換を可能にするソフトウェアが整備され、爆発的に通信量が増える結果となった。利用者に使いやすければネットワークはいくらでも使われるというのは、この当時から変わらぬ事実であり、真実である。

電子ニュースは、パソコン通信における電子会議室のようなものであるが、次のような相違点がある。

- ・パソコン通信は一つのホストを全利用者が使用しているが、ニュースシステムでは、複数の各組織のコンピュータがバケツリレー式に、ニュースの記事を中継している。
- ・パソコン通信では、投稿された記事は、全利用者がすぐに読めるが、ニュースシステムでは中継している関係で、記事が広がるのに時間がかかる。
- ・いろいろな方針をもったネットワークを記事が通過するので、場合によっては特定目的の利用（純粋な宣伝活動、商業活動等）が禁止されている。
- ・中央集権的な管理機構が存在しないことが多い。
- ・手元のコンピュータを使うため、大容量のファイルにアクセスするのが容易、また高速なアクセスが可能。

2.3. WWW

World Wide Web (WWW) は、1989年にCERN (European Laboratory for Particle Physics: 欧州原子核物理研究所) で提案された広域用の情報システムで、ハイパーテキストベースで、Internet上のさまざまな資源へのアクセス方法を提供している。HTTP (Hyper Text Transfer Protocol) というプロトコルによりこの情報の伝搬が



図1 SFCのWWWホームページ

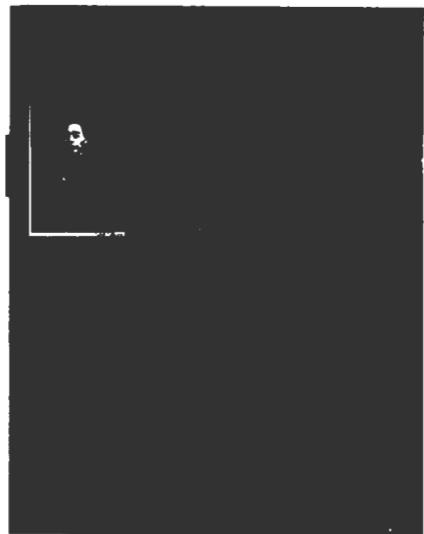


図2 理工学部のWWWホームページ

行なわれる。最近、さまざまな雑誌で見受けられる「インターネットのマルチメディアデータベースのアクセス」という修飾がなされているMosaicというソフトウェアは、NCSAで開発された

HTTP を用いて WWW のサーバにアクセスするものである。HTTP だけでなく、ほかのプロトコルを用いて Internet 上のいろいろな資源にアクセスすることが可能である。

WWW は世界中でいろいろな使われ方をしており、メーカーの製品の紹介はもとより、オンラインカタログ、大学案内まで多種多様である。米国に限らず、国内でも大学案内、入試案内を WWW を通して情報提供しているところがある。図1と図2に、湘南藤沢キャンパスの WWW のホームページ（アクセスしたときに最初に現れる画面）と、理工学部のホームページをそれぞれ示す。

2.4. 電子メールオーダー

電子メールによる物品の購入も一般的なものとなっており、筆者は洋書の購入に使うことが多い。以下に電子メールでの書籍の注文を受け付けている例を示す。

- Computer Literacy Bookshops, Inc.

筆者がよく利用しているところ、名前のとおりコンピュータ関連書籍中心。電子メールアドレスは、info@clbooks.com

- The MIT Press

電子メールアドレスは、
mitpress-orders@mit.edu

- O'Reilly & Associates, Inc.

昔から UNIX, Internet 関連の書籍の出版に力を入れているところ。

電子メールアドレスは、order@ora.com

電子ニュースシステムのニュースグループ rec.arts.books とか fj.books に情報が出ていることも多い。

書籍、特に一般向けの洋書の流通機構に一石を投じていると言っても過言ではないだろう。オフィスから電子メールを出すだけで、航空便を指定すれば、数日でオフィスに洋書が届くのである。しかも、為替レートは時価である。

また、学会によっては、国際会議の申し込み、論文集の申し込みも電子メールで受け付けている

ところもあり、学会で出している論文集のバックナンバー等を申し込むのに便利な場合もある。

2.5. 図書館（OPAC）

Internet での OPAC アクセスは、米国等では非常に一般的になっているが、日本国内でも整備されつつある。表1にその一部を示す。

いずれも、X ウィンドウシステム上の端末エミュレータ（kterm 等）から、telnet ホスト名と入力して、相手図書館のホストに接続することにより利用可能である。

表1 日本国内の Internet からアクセス可能な OPAC

図書館名	ホスト名	ユーザID
筑波大学附属図書館	anzu.cc.tsukuba.ac.jp	なし
東京大学附属図書館	library.lib.u-tokyo.ac.jp liliput.lib.u-tokyo.ac.jp	LIBRARY
東京工業大学附属図書館	topics.libra.titech.ac.jp	OPAC

3. さいごに

このように、最近一般にも注目されるようになった Internet であるが、全世界規模でのオンライン情報の共有化、一次情報あるいはそれに近い情報への直接アクセス、個人による広域への情報発信ということが、社会的に非常に大きな影響を与えるであろうし、また与えつつある。

政府発行の経済統計などで公開されているものに、コンピュータを通じて直接アクセスできれば、社会科学の講義に新しい一面をもたらすであろうし、各企業が会社情報を Internet 上で公開すれば、就職活動の参考にもなるし、財務分析等の講義・演習にも役立つであろう。

メディアセンターの研究教育における情報サービスの提供という面でも、影響は小さくない。書籍のオンライン発注もさることながら、各種データベースの種類が、今まででは単純にデータベース会社にアクセスしていたものが、一次情報に近い

ところへのアクセスが可能となることで、安価に大容量のデータに高速にアクセスできる可能性がひらけている。もっとも、今まで以上に、データベース検索の技能というものが高度に要求されるようになるので、情報サービスを提供する側の苦労は増えるかもしれない。

もっと Internet のことをよく知りたい人には、最近非常に多くの本が出版されているので参考になるであろう^{1) 2) 3)}。

参考文献

- 1) WIDE Project 編 インターネット参加の手引き 共立出版 1994.7
- 2) Ed Krol 著、村井純監訳 インターネットユーザーズガイド インターナショナル・トムソン・パブリッシング・ジャパン／オーム社 1994.5
- 3) C.Malamud 著、後藤滋樹／村上健一郎／野島久雄訳 インターネット縦横無尽 共立出版 1994.3
- 4) L.H.Landweber Version 11 Connectivity Table July 11, 1994

MEDIANET 研究会

平成 5 年度

第4回（平成 5 年 9 月 27 日）

於 三田メディアセンター）

報告者 天野善雄「研修報告の評価結果」
関口素子「アメリカ大陸の隅、このひとつの大学図書館」

第5回（平成 5 年 11 月 1 日）

於 三田メディアセンター）

報告者 吉川智江「理工学研究者からみた大学図書館の位置付け」
和田幸一「日本の大学図書館員の専門性の現状と展望」

第6回（平成 5 年 11 月 29 日）

於 三田メディアセンター）

報告者 糸賀雅児「大学図書館における料金徴収問題」
平吹佳世子「相互貸借業務における NACSIS-ILL」

第7回（平成 6 年 1 月 24 日）

於 三田メディアセンター）

報告者 白石幸男、大賀 裕「メディア

ネット情報システム関連研修計画について」

第8回（平成 6 年 3 月 14 日）

於 三田メディアセンター）

報告者 遠藤和幸「管財部業務と図書館について」

平成 6 年度

第1回（平成 6 年 5 月 23 日）

於 三田メディアセンター）

報告者 村上篤太郎「図書館サービスの点検・評価」
広田とし子「三田メディアセンター・レンスにおける点検・評価の試み」

第2回（平成 6 年 6 月 27 日）

於 三田メディアセンター）

報告者 越塚美加「図書館サービスから見た著作権法」

第3回（平成 6 年 7 月 20 日）

大日本印刷株式会社見学会

<ティールーム>

夢

辻 幸民

20**年のある一日：

- ・朝、研究室の端末をログオンすると、昨日の東京市場の終値やマクロ経済に関するデータが自動的に送信され、私のデータファイルにストックされる。もちろん、研究に必要なデータのうちストックされてないものは、データベースにアクセスすれば、たいていの公開データは入手できる。
- ・午前、昨日行った期末試験の穴埋め問題を採点するため、模範解答を入力。教室の座席にはメインフレームに接続されたノートブック型端末が設けられ、学生はこれを使って試験問題に解答する。学生の解答は、私の教育用ファイルに転送された後、数十年前から広く使われている検索機能を使って、瞬時に採点される。
- ・午後、読みたいジャーナルペーパー3本を私の研究用ファイルに出力させることを忘れ、慌てて指示を出す。試験シーズンでプリンターが混んでいるが夕方にはプリントアウトできるであろう。出版物はすべてROMで提供されているから、メインフレームの書籍管理システムを使えば、探したい文献の検索はもちろんのこと、端末を通じて文献自体を見るのもそれを複写することも容易に可能である。ただし、複写する場合は著作権料が課金されるため、うっかりその口座がゼロになって複写できない場合もある。そんなとき、手でコピーをし、事実上複写が自由勝手であった時代を懐かしく思う。
- ・計算室から、期末試験の論述問題の解答のプリントアウトが出来たとの電話があり、取りに行く。教育用ファイルに転送してもらうことも可能だが、ディスプレイを使って長時間文章を読むのはやはり骨が折れる。ペーパーもそうだが、学生が制限時間内に書きなぐった答案ではなおさらである。論述問

題の採点だけは、いつの時代も手作業にならざるをえない。数時間かけて答案を読み、論述問題の得点を入力。受験者の総得点を計算し、昔ながらに度数分布表を作って、楽しみながら「A, B, C, D」を決める。採点結果のファイルを教務部に転送し、「今年の授業はこれで終わり」と一人微笑むも、次の入試が頭をよぎる……。

「夢」というにはささやかでしょうか。そう遠くない将来に、このようなことが現実の姿になっていると考えられますから、決して「夢物語」ではありません。しかし、いつ実現するかについてはまったくわからないのもまた現実でしょう。上で述べたことは、現在でも技術的には可能でしょうし、一部実現しているところもあると思います。では「10年後は?」と想像してみたら、10年という時間ではあまり楽観的になれません。

確か10年前はコンピューター入力を穴あきカードでやっていたことを思い出します。それに比べれば、現在の使用環境は天国にいるようなものです。にもかかわらず、より便利かつ快適なシステムを追求していく努力は途切れることなく、またこれからも永久に続けられていくことになります。しかし、進歩発展のスピードは過減していくのが普通ですから、何をどう発展させていくのか、これからが難しいところだと思うのは私だけではないでしょう。現在から10年後の変化は、10年前から現在の変化に比べて表面的には小さいものになるかもしれません、メディアセンターには、より困難な問題を一つ一つ解決され、着実に前進していかれることを祈っております。常に変わらぬ熱意でもって情報システムの構築・改良を企画されているメディアセンター関係者の方々の御尽力には、ユーザーとして大いに敬意を表したいと思います。

(商学部助教授)



人にやさしいコンピュータ

ところ 真理雄

(理工学メディアセンター副所長)
(理工学部教授)

このところのパソコンの発達はようやくにしてコンピュータを使い易いものにしつつある。まずは、簡単に日本語が使えるようになった。 WINDOWSを用いたグラフィカルなインターフェースがあたりまえになり、マウスをクリックすればおおかたの仕事が済んでしまう。統合型ソフトを使えばいちいちエディタ、描画、データベースなどを別々に覚える必要もない。20数年前に筆者が大型機を使いはじめた頃とは隔世の感があり、また10年前にワークステーションを使いはじめた頃と比べても大きな違いがある。

しかしながら一方では、この頃コンピュータが本当に人にやさしくなったのであろうかと自問してしまない。いやコンピュータだけではない。いろいろな工業製品が市場に並び、人間生活に入り込んで来ている。確かに見た目もきれいで使い易くなっている。でもそれらは本当に人にやさしいと言えるのだろうか。

誰でも知っているように今日我々が言うコンピュータはデジタル式であり、2進数にその基礎を置いている。すなわち1と0の世界であり、これがちょうど真(true)と偽(false)に対応している。デジタルの世界はたいへん論理的であり、ものごとに白黒をつけたり、数を数えたりするには最適で、まさにそのために産まれて来たと言っても過言ではない。その計算法は還元主義的であり、その構造は公理主義的である。あるいは原子論的でさえある。これは正に18世紀から20世紀への近代科学の最大の特徴であり、また近代文明の発達の規範でもあった。そしてコンピュータにおいては他の技術分野に比べてより純粋な形でこれが現れていると言える。

例えば橋を作ることを考えてみよう。橋の長さは何メートルで高さは何メートル、そこをどれだけのものが通過するからどれだけの荷重がかか

る。スパンをどれくらいにして材料を何にすれば自重がこれだけになり、だからその結果全体がこうなる。このための部材はどれほどで、それを作るにはこうして、運ぶにはどうして、そして組み立てるにはどうして、といった具合である。ここでは設計から組立への各段階で物理的な対象を現実世界との関係の中で議論し、作業が進んでいく。

一方、コンピュータに給与計算をさせる場合を考えよう。まず会社組織の構成を考え、給与算定のルールを書き出し、これを計算するためのアルゴリズムを与える。計算のアルゴリズムは通常ルールに従って部品化され、また階層化されて構成される。しかしながら一旦組織モデルが作成され、ルールが書き出されると、プログラムの部品間あるいは階層間は完全に論理的であり、通常最後の答が出るまで(若しくは振り込まれた給与を確認するまで)、現実世界と触れ合うことは無い。これがコンピュータは汎用シミュレーション装置であるといわれる所以であり、またその還元主義的、公理主義的な純粋さの理由である。

しかしながら、コンピュータがこれだけ人間生活に入り込み、常に人間とインターフェースし、しかもかなり重要な役割を担うようになってきた時、論理的であるだけで良いのかという疑問にぶつかる。

人間においては論理的思考は左側の脳で行われ、パタン的な思考は右脳で行われると言われている。コンピュータは左脳的であり、パタン的な思考はあまり得意ではないと言われてきた。そのため、脳の構造に多少とも近付けた形を持つニューラルネットやその他パタン抽出のための並列計算アルゴリズムなどが考案されてきた。また、二者択一的な論理から、より連続的な値を取ることを可能としたファジー論理なども考案されて実用化が進み、コンピュータの応用分野を拡げるとともにその使い易さにも貢献してきた。

論理的な思考とパタン的な思考の両方を兼ね備えたコンピュータが完成すればコンピュータは人にやさしくなるであろうか。いや、そうではなかろう。左脳、右脳はいわゆる新しい脳と呼ばれるところで、類人猿以降の種に特徴的な部分であ

る。これに対して古い脳と呼ばれるところがある。ここは生命現象のもっと基本的なところを制御する部分で、下等な動物はこの部分しか持たない。また、古い脳は我々の情動にも通じるところである。すなわち、恐い思いをすれば冷や汗が出、興奮すれば脈拍が上昇し、うまいものを喰えば幸運になり、親しい人と語らえば心平靜となる。そういうことを司る部分が古い脳である。

人と人とがつき合うとき、いや、もっと一般化して、動物同士がコミュニケーションをするとき、最初に行なうことは相手を個としてとらえ、そして相手が自分に対して危害を加える対象ではないことを確認することであろう。いや、これがコミュニケーションの全てであるとも言えるかも知れない。しかしコンピュータが人に接するとき、コンピュータは人を個としてとらえることもないし、相手が危害を加えるかどうかなどとは考えもしない。また、コンピュータを使う人間の方だって似たりよったりである。人間とコンピュータの関係はちょうど我々と道具の関係のようなものだ。普通は包丁やのこぎりを見ても危険を感じないが、血相を変えた人がそんなものを持っていたら逃げ出してしまう。

道具としてコンピュータを見れば、右脳、左脳という新しい脳を持ったおりこうなコンピュータはひとつの完成の域に達しつつあると言えるだろう。しかしながら人間ははずうずうしいもので、一方ではより使い易く、多少の間違いを許してくれ、あやしければ聞き直し、更には一を言えば十を知るようなコンピュータをも欲している。こうなってくると、コンピュータはもっと我々を知っている必要がある。すなわち、コンピュータはその中に入間をモデルとして持たなければならなくなる。そして人間の思考だけでなく、情動をも理解する必要が出てくる。コンピュータに向かって「くそ、頭に来たな、あいつをやっつけてしまえ」なんてついつい言ってしまった時、コンピュータが本当にそいつをやっつけに行ってしまったら困るのである。コンピュータはここでは、「そうだな、あいつ頭に来るな。でもまあ少し頭を冷やそうや」と言ってくれなければならないのである。より自分の言いたいことを分かってくれるコン

ピュータはいわゆる友人としてのコンピュータであり、たぶん古い脳も持った、より人間に近いものになるであろう。

このようなことは人間とコンピュータの関係だけでなく、コンピュータとコンピュータとの関係としても起こりつつある。これまでコンピュータによる計算はひとつのコンピュータによって行われて来た。ところが近年のネットワークの発達は、ひとつの仕事をより適した複数の計算機の共同作業として行なう方向へと向かわせている。一方、コンピュータは日進月歩し、古いコンピュータは新しいものへと置きかわる。新しいソフトウェアが開発され、より良いサービスが得られるようになる。新しい情報が提供され、より有利に仕事を行えるようになる。広域に分散した環境では、これらの変化を全て事前に把握することはできない。するとひとつの仕事を行なうためのチームは固定されたものではなくなり、相互により適した相手をつれて選びながら仕事をしていくようになる。もちろんひとつのコンピュータあるいはソフトウェアは広く多数の顧客を相手とすることになる。ここにコンピュータあるいはその上で動く個々のソフトウェアが個として認識される必要が生じ、そこで危害だと効用だとが論ぜられるようになるわけである。近年このようなソフトウェアの単位はエージェントと呼ばれることが多い。上述の人間と対話するソフトウェアも一種のエージェントであると考えることができ、特にインタフェースエージェントと呼ぶ。このような個としてのコンピュータあるいはソフトウェアは必ずしも人間のようになるとは限らないが、ある程度生物的になってくると言っても良かろう。ここでは「生き延びること」や「被害を最少にすること」が基本原則であり、ここでもやはり古い脳に対応した機能が必要となる。

コンピュータがより人間に近くなることへの疑問あるいは困惑は随所に見ることができる。この疑問あるいは困惑を要約すれば、そのようなコンピュータはいずれ愛を語り、子孫を造り、いずれは人間を駆逐してしまうであろうという、SFの世界にも似た議論である。これはあながち否定することもできない正しい見方である。しかしなが

らそれではコンピュータは今まで良いかと言うと決してこれに満足できるわけではないのであるから、良かれ悪しかれコンピュータがより人間に近付いていくことを阻止できないであろう。これまで頻繁に議論された「科学と人間」論とも相通するところであり、コンピュータと人間の共存を図らなければならないところである。

数十年前に化学および物理学の分野で芽生え、このところ活気を帯びているいわゆる複雑系の考え方、常にエネルギーが注入される系における非可逆的な振舞を、主に非線形な方程式系をもとに示そうとする学問体系である。そこでは単純な振舞がくり返し行われることにより、あるいは複数の単純な振舞が複合することにより、全体として極めて複雑な、あるいは逆に極めて統一のとれた挙動を観察できることを示し、科学技術における新たな方法論を創出している。これはちょうど分散複合システムにおける個々と全体の振舞に関

連し、また一方では生命現象そのものや進化の基礎的な理論としての期待も大きい。更にはアナログ系の情報処理とデジタル系の情報処理の橋渡しとなる可能性さえもある。今後のコンピュータ技術を、またコンピュータと人間との関係を、このような大きな流れの中でとらえていく必要があると思う。

話は変わるが、筆者は平成5年10月より理工学メディアセンター副所長を拝命している。ここ2～3年は遅ればせながら塾の情報化のための大きな変革がなされると聞いている。その中核は超高速ネットワーク技術を基礎に置いたマルチメディア応用による教育、研究の活性化やグローバル化、更には事務処理の効率化である。塾の情報化、マルチメディア化を科学技術に裏打ちされ、しかも人へのやさしさを忘れない形で実現するために微力ながらお役に立てればと考えている。

小展示ニュース 1

<医学メディアセンター>

1. 古医書シリーズ
(於 医学メディアセンター展示ケース)
1.1. 「医心方」 1993. 6. 1～1993. 7. 31
1.2. 語学 オランダ語からの推移
1993. 9. 1～1993. 10. 31
1.3. 「解剖存真図」複製
1993. 11. 1～1994. 3. 31
1.4. 「古医書目録」改訂版
富士川本の中から「蘭学事始め」
石黒文庫紹介「石黒忠應」
集成本の中から「麻薬考」「圖經」
1994. 5. 13～1994. 5. 31
1.5. 華岡青州 1994. 7. 1～1994. 7. 31
2. 新年祝賀会特別展示
(於 新棟11階会議室前) 1994. 1. 5
杉田玄白画筆「百鶴図」
杉田玄白遺墨「醫事不如自然」
慶應義塾大学附属医学専門文史 1944～1952
「三鷹」創刊号 1947. 7
卒業記念写真帖
(36～50回生の中、所蔵の36、44～50回生の写真帖)

インタラクティブ・マルチメディア・ データベースをめざして

鶴野公郎

(湘南藤沢メディアセンター副所長)
(政策・メディア研究科教授)

SFCにおけるメディアセンターは発足5年目にはいり教育研究の中心的存在として定着したといえる。共通のインフラストラクチャーとしてUNIXをOSとするネットワークを学内にはりめぐらすとともにインターネットを介して世界と結び、その上でデータベースとマルチメディアを展開することは、コンピュータ系であると政策系あるいは自然言語系であるとを問わず、当然のこととして受け入れられている。メディアセンターのもつ機能はカリキュラムにも直接反映しており、学部の1年生から大学院生までが、ネットワーク上で、日夜、知的作業に没頭している。ネットワーク環境のもとでは、各自がそれぞれ関心のあるテーマを展開させることができ、そのために自発的な作業が活発化することが見て取れる。世界最新の知的資産に直接アクセスできることも学生にとって大きなインセンティブである。

図書館、コンピュータセンター、それにマルチメディア機能をあわせもつことは、SFC発足当時はまさに「云うは易し行うは難し」の典型とも思われた。図書館は印刷文化とともに永い歴史をもち、慶應のみならずどこの大学でも学術の中心であり、収書や図書検索などのテクノロジーが確立している。コンピュータセンターは大型コンピュータを擁して専門のエンジニアのみが立ち入りをゆるされる場所として、また巨額の費用を使う権限を有する機関として、どこの大学でも20世紀の神殿の如くであったといっても過言ではあるまい。UNIXも夢の世界を約束しつつ1980年代に登場し、一部のコンピュータ専門家を魅了したものの、その使い勝手の悪さや従来のシステム上のアプリケーションソフトの移行が遅々として進まないことなど、ユーザ泣かせのしろものであっ

た。また、マルチメディアは絵画や映画、音楽など、人類の歴史をいろどる芸術の分野に、コンピュータテクノロジーを持ち込もうとするもので、その芸術性に疑わしいものがあるだけでなく、高価な機器やAVホールを要求する、ブラックホールとも思えた。

メディアセンター機能の定着と発展のためには、テクノロジー面での制約と制度面での制約をのりこえる必要があった。テクノロジーに関してはもっぱらコンピュータの専門家に任せざるをえないと考えられているが、実は専門家といえども特定分野得意とするのが常であり、システム構築の専門家というのは大学の研究環境の中からは育ちにくい。しかし、SFCでは、日本には珍しいタイプの人材を確保できたことに加え、学部設立時、大学院設立時、学部の設備のリプレース時、と5年の間に既に3回、大規模ネットワークの構築をおこない、かなりの経験をつむことができた。この間、データベースやマルチメディアの分野の要求に直面し、カリキュラムへの組み込みに努力し、また数千人のコミュニティーのニーズに対応することで、実力をあげてきたといえよう。

現在、SFCでは通産省の予算により情報処理振興事業協会(IPA)が実施する「新産業創造データベースセンター」「教育ソフト開発・利用促進センター」「パイロット電子図書館」の3事業に協力している。これらの機能をあわせもつ「情報基盤センター(仮称)」がキャンパスの一角に設置されることになっている。これはIPAの施設であって塾のものではないが、それぞれの機能とこれを支えるインフラストラクチャーの構築はSFCの実績があつてはじめて可能になったといっても過言ではないだろう。

しかし、メディアセンターの発展は緒についたばかりである。ネットワーク、データベース、マルチメディアを統合したシステムは定着したといってよい。残された課題が多い。とりわけ、特に多くの知的資産をかかえる、いわゆる「文系」あるいは「書斎型」のユーザとの架橋に成功するか否かがカギである。いかにネットワークが完備しても、その上に知的資産が移設され、さらに新

しい知的活動がネットワーク上でおこなわれるようにならなければ、中身は空虚である。

知的資産をデータベースといいかえることができる。現在のデータベースのイメージは、図書や新聞記事を始めとする情報をキーワードをもとに検索するもので、多くは公衆回線を利用した、2400 bps 程度の低速のサービスである。統計のデータベースも提供されているが、数値の更新などは頻繁におこなわれるものの、変数リストなどは印刷物のコード表を利用するといった形態をとっていることがいまだに一般的である。

日米のデータベースを比較すると、データベース売上高でみると日本はアメリカの 6 分の 1、パスワード数では 9 分の 1、プロデューサ数では 11 分の 1 にとどまる。研究に利用されるインハウスのデータベースについていくつかの調査例をみても、独自の構築例はきわめて限られている。教育への利用に関しては、日本の大学では情報処理教育の一環としておこなわれていることが殆どであり、専門教育とのリンクはとられていない。

こうした状況はデータベースのポテンシャルを十分生かしているとはいがたい。今日のデータベースは、書誌情報などのファクトは当然のこととして、フルテキスト、個票のある統計、集計された統計、小地域情報や地理情報システム (GIS)、映像や音像を含むマルチメディア情報に及んでいる。統計に関しては、データベースによってマイクロとマクロのリンクを行っている国が増えている。地球の温暖化などの環境問題などについても、小地域情報とグローバルな情報がリンクして用いられている。さらに、モデル・シミュレーション、ビジネスゲームなど、インターネットを利用が行われるようになっている。絵巻物、古文書、地図などもマルチメディア・データベースの得意分野である。都市計画や景観などについても同様である。

このような多様な情報が現在ではデジタル情報として同一のテクノロジーでデータベースとして

ネットワーク上に展開可能なのである。これをインターネット・マルチメディア・データベースとよぶことができよう。

さらには、グローバルなネットワークを介してデータベースの相互利用やモデルの共同利用もおこなわれている。現在の先端的なデータベースは相手に料金を払うのではなくて相互利用が原則であり、相手のデータを利用するためには自ら情報発信が必要である。

しかし、いわゆる「文系」のユーザにとってはこうした情報環境への適応は容易ではない。書斎というテクノロジーからネットワークとデータベースの世界へシフトすることは、大転換である。転換に成功すれば「知的生産力」は飛躍的に高まるかもしれないが、この転換の期間中、たとえば 3 年ないし 5 年は成果が期待できない。若手の研究者はどうかというと、テクノロジーの面での抵抗はほとんど感じないであろうが、採用や昇進に必要な業績としてはいまだに論文が対象であり、データベースやシステム構築は評価される機会がないとなると、インセンティブは働かないであろう。これは先に述べた制度面での制約の一つの例である。SFC のさらなる発展のためには、こうした制約は自ら取り払う必要がある。

メディアセンターに期待される役割は、いまや「文系」の知的資産のデータベース化である。それによってはじめて約束された「知のメディアの転換」が現実のものとなる。現在のところ、メディアセンターにはこうした開発機能が付与されていない。人的にも資金的にも転換は研究室単位の努力に期待するのみである。しかしこれでは大学にとって最も貴重な知的資産を十分に活用することができない。研究と並行してそのツールとしてデータベース構築がおこなわれ、それがコースウェアとして教育に用いられるような仕掛けが必要なのであり、メディアセンターをおいてその機能を果たせるところはない。

<スタッフルーム>

マルチメディアって???

せき もと ゆき てる
関 本 幸 輝

先日、NHK のニュースを聞いていたら「都会と過疎地域の学校をマルチメディアで結んで云々」というニュースが流れていました。最近、マルチメディアという言葉がトレンド的な言葉として、もてはやされています。私は7月にある企業のマルチメディアセミナーというのに出かけ、そこでその企業のマルチメディアへの取り組みについての説明と、マルチメディア機器のデモンストレーションを見てきました。セミナーの最後のアンケートの質問の中に、マルチメディアを理解できたかどうかという質問がありました。皆さんはマルチメディアという言葉を理解されていますか。マルチメディアという言葉を辞書をひいて訳してみると、multi というのは「多い、多様」の意味の結合語で、media は「媒介(物)、媒体」とか「方法、環境」という意味の名詞の medium の複数形ということです。ですからマルチメデノアというのは、直訳すると多媒体とか多様環境とかということになります。現在、マルチメディアという言葉を聞いて一般に連想するものといえば、コンピュータを少しでも知っている方なら CD-ROM をあげる人が多いのではないかでしょうか。

私の回りでマルチメディアの研究をしている方に聞いたところ、マルチメディアというのは、複数の媒体があって、それを処理(加工、編集、検索等)すること。具体的にいって、従来からのコンピュータのデータである文字データやバイナリデータに加えて、静止画や動画、音声等のデータを複数同時に処理することだそうです。

画像や音声をコンピュータで処理しようとする場合、これらをコンピュータの中に入れたり出したり(見せたり)するための装置が必要であり、加えてこれらを加工しようとするとコンピュータの高い処

理能力が必要です。特に動画の場合はコンピュータのデータとして保存しようとすると大きなデータになるので、沢山のデータが入る保存装置が必要になります。旧来のコンピュータでは、画像や音声を扱う入出力装置が装備されていなかったり、処理能力が不足していたり、データの保存装置の容量が小さかったりして画像や音声を処理することは難しかったのですが、近年のコンピュータの発達によりこれらを同時に高速に処理することが可能になってきました。また、動画や音声のように時間的に連続なデータ(英語で continuous media というそうです)を処理する技術が確立されてきて、(例えば、音声が途切れ途切れになったり、画像と音声が合っていないなど)そういう意味でもコンピュータの処理能力は以前より格段に進歩し、多様(multi)な媒体(media)を一つの装置(コンピュータ)で同時に扱えるようになってきています。例えば、ビデオテープから記録してあるテレビの番組を見るように、CD-ROMを入れて絵と音が鑑賞でき、加工できるコンピュータというのはマルチメディアの処理のできるコンピュータということになるわけで、一般にこのようなコンピュータをマルチメディアコンピュータと呼んでいるようです。では、ビデオ装置はマルチメディアの処理ができるかというと、ビデオ装置は絵や音の保存はできるけれど加工はできませんし、文字データ等は扱えないでのマルチメディア処理はできないことになるわけです。

この文の一番始めに書いた NHK のニュースの「マルチメディアで結び」というくだりは、「マルチメディア(の通信ができる)処理装置(ネットワーク)で結び」とするのが本当は正しいようです。マルチメディアの反対語は、敢えていうとシングルメディア(single-medium)になるようです。日本語で一般的に使われているマルチメディアという言葉は、実際には本来の意味だけでなく、意味を膨らませていることが多いので、新聞や雑誌、テレビ等を見ているとなんとなくは解っても、言葉では説明できない方が多いのではないでしょうか。(実は、私もその一人だったのですが) 少しでもお解りいただけましたか。

(理工学メディアセンター係主任)

平成5（1993）年4月に研究・教育情報センターと大学計算センターを統合した新しい組織、メディアネットがスタートした。

研究・教育情報センターは昭和45（1970）年4月、三田情報センターを皮切りに資料の統合・有効利用を目的として発足した組織（昭和46年に医学、47年に日吉、理工学の各地区情報センター、平成2年に湘南藤沢メディアセンターが発足）であり、大学計算センターは情報科学研究所を前身に昭和54（1979）年10月に発足した組織である。

本稿ではメディアネットに至るまでのそれぞれの歩みをグラフによって振り返ってみることにした。

グラフで見る情報センターの23年

酒井 明夫

（三田メディアセンター課長代理）

1. はじめに

情報センターの活動を示す統計資料は、機関誌「KULIC」2号から本誌創刊号までの巻末に年次統計要覧として掲載されている。組織の成長とともに統計項目も追加され、最終のフォーマットに至っている¹⁾。データは各地区センターで年度始めに作成される「標準統計」をもとに本部がまとめたものである（「標準統計」は各業務担当で集計した、より詳細なデータをもとに作成される）。「標準統計」もしくは現場のデータを分析すれば各地区センターにおける時の流れがより細かく浮き彫りにされるであろうが、ここでは組織全体の軌跡を概観するに留め、掲載したグラフは要覧から得られるデータに限った。

データについて考慮すべき点は、同じ項目であっても地区による数値の単純比較はできないことである。すなわち予算規模やサービスの対象・目的が異なれば、数値の意味するものは各地区セ

ンターにおいて違ってくる。また比較といえば、ここでは同時代の他大学の動きはどうであったかという調査はしていないので、それに関しては文部省の「大学図書館実態調査結果報告」等を参照されたい。

なお、以下の説明では三田情報センターを三田、日吉情報センターを日吉、医学情報センターを四谷、理工学情報センターを矢上、湘南藤沢メディアセンターを藤沢と地区名で示し、年度の表現は西暦とした。グラフの横軸の起点はデータの記載が始まった年度、もしくはデータとして妥当と思われる年度からとした。

2. 図書予算

図1は1971年度予算を100とした場合の伸びを示したものである。75年度から85年度の約10年間の伸びが各地区とも顕著であり、組織の成長期ともいえる。85年度の時点で三田697、日吉875、四谷866、矢上1295に達している。矢上の伸びが全体に大きいのは、この間の数理科学科（1974年）、物理学科、化学科（1981年）の新設、大学院3専攻の増設（1989年）と関係している。新設、増設の都度に計上された特別予算はグラフに含まれていないが、特別予算を補足する分が通常予算として計上されているためである。

図2は図書予算の総額の推移である。71年度の総額は約1億2,900万、93年度（メディアネット初年度）は藤沢を合わせて約14億600万となっている。

3. 年間受入れ

絶対数が大きい三田の単行本の年間受入れをグラフ化したのが図3と図4である。

図3は洋書の年間受入れ数の推移である。参考までに毎年10月1日のドルに対する円相場の推移を点線で示した（センター発足の翌1971年8月、アメリカがドルの金交換制を停止したいわゆるドル・ショックによって主要国は為替を変動相場制へと移行していく）。受入れ数がピークに達する86年度までは起伏がある程度符合するが、87年度以降は継続する円高とは反対に受入れ数は減少している。86年度に受入れ数が突出しているのは、

大きなコレクションものを3点受入れていることによる。また、その後の減少は価格帯の高い図書の購入（稀観本など）にも起因していると推測されるが、要覧のデータからはわからない。

図4は和書の年間受入れ数の推移であるが、出版年鑑の統計によれば、この間の国内新刊書籍の平均単価（点線）は1970年を100（1,275円）とすると、オイル・ショックのあった73年11月の翌74年には180、92年は243（3,099円）に達している。年間受入れ数は概ね平均単価の動きに連動（グラフは反発）するように上下している。

洋書、和書ともグラフは寄贈本を含んでいる。購入図書の点数や価格帯ごとの受入れ数などによって補正をすれば、時勢との関連がもう少しはっきりしてこよう。

4. 所蔵累計

情報センターの全蔵書数は藤沢も含めて23年間でおよそ3倍の299万冊に達している（図5）。各センターの伸び率は1971年度を100（70年度はデータに一部不明な点があるので）とした場合、92年度は三田252、日吉340、四谷222、矢上399となっている。矢上の伸びは先にふれた学科の新設や大学院の増設の他に、JICSTから6万冊におよぶ大量の雑誌の寄贈を受けたことによる。

資料の増加は大学図書館にとって望ましいことであるが、各地区的書庫の収容能力は限界に達しており、三田と四谷は蔵書の一部を本年10月から運用開始の山中資料センターに移送している。利用面での影響とそれに応えるサービス体制が今後注目される。

5. 逐次刊行物：タイトル数

逐次刊行物のカントルタイトル数の伸びは1976年度を100とすると、92年度は三田180、日吉212、四谷172、矢上137となり、矢上の伸び率は予算や所蔵累計のそれとは反対に一番低い（図6）。同じような予算額、予算構成を持つ四谷と比較しても開きがあるが、理工系外国雑誌の平均価格が医学よりも高いために、新規タイトルが思うように増やせないというのも一因であろう。

四谷と矢上についてはとりわけリニューアルの

対象となる外国雑誌のタイトル数と予算がその年度の他の図書館資料の購入や利用者側の満足度を大きく左右するが、要覧のデータ項目からはわからない。

図にはないが、ノンカレントのタイトル数について顕著だったのはJICSTからの寄贈（72年発行までの雑誌）を受けた矢上であり、84年度の統計では三田を凌ぐ7,360タイトルに及んでいる。

6. 館外貸出

三田では1982年に、日吉では1985年に新館がオープンし、開館時間も延長された。利用環境の改善（アメニティー）、開館時間の延長が及ぼす影響を図7における三田、日吉のグラフに見ることができる。81年度を100とすると82年度は三田151、日吉137、85年度は三田188、日吉185、92年度は三田240、日吉284となる。日吉では新館ができる3年前の82年からパソコンによる貸出の機械化を実施していたが、グラフの伸びはその効果と思われる。

四谷では91年12月にKOSMOSが本稼働を開始、グラフではわかりにくいか貸出数は増加している。矢上では88年4月にCIRSYSが導入されて貸出の機械化が始まったが、その年度に数が減少したのは貸出規則やカウントの仕方に変更があったためである。貸出数はその後増加を続けている。

7. 相互貸借

① 貸し（依頼をうけた）について

絶対数では全件数の大半を矢上と四谷で占めるが（92年度の全件数46,432の割合は矢上64%、四谷28%、三田7%、日吉・藤沢1%）、伸びという点では三田、日吉の変化が著しい（図8）。75年度を100とすると三田は81年度215、82年度は375、その後も増加を続け92年度は926に達している。一方、日吉は84年度267、85年度は630、92年度1,100と上下の変動はあるが増加の傾向を示している。

② 借り（依頼した）について

借りの件数についても四谷と矢上は変動が少ない。地区別の割合を92年度の全件数5,167でみると

と、四谷38%，矢上29%，三田24%，日吉6%，藤沢3%となる。伸びについては借り同様に三田と日吉の変化が大きい（図9）。74年度を100とすると三田は81年度145、82年度は216、その後は86年度の452をピークに下降する傾向となる。日吉は起伏が激しく、84年度211、85年度は800と突出しているが、その後は上下しながらも増加傾向にある（92年度は617）。

貸し・借りとも三田と日吉では新館を機に件数が増加するが、先の館外貸出を含め、施設改善に伴うサービス体制の変化が少なからず影響を与えてることがわかる。しかしながら相互貸借は対外部との協力関係であるために、グラフの数字はそれぞれの時点においてもっと複雑な背景を孕んでいる。例えば各大学の所蔵状況の変化、自然科学系の雑誌を対象とした国立大学拠点図書館の設置、学術情報センターへの図書の登録、国立大学の料金後納制の開始、NACSIS-ILLへの参加、検索媒体の変化（例えば2次資料のCD-ROM化）などが複合的に作用している。

早慶ILLは86年度から本格的に開始したが、その件数は88年度から参考データとして要覧に載っている。92年度までの5年間で慶應の借りの総数は777件から836件と大きな変化はないが、貸しの総数は647件から2.6倍の1,726件に伸びている。地区別にみると三田では貸し・借りとも、日吉では借りが全体の2割以上を占めている。四谷では借りはほとんどないが、貸しのほうは所沢キャンパス（人間科学部）や理工学部からの依頼が多く、しかも毎年増加している。一方、矢上では当初から借りにおける依存度が高かったが、貸しの件数も増えづけ、92年度は貸しが借りを上回っている。

8. レファレンス

“レファレンス・サービスの利用統計の意義に対する疑問は、根本的には、レファレンス・サービスの性質からきていると思う。レファレンス・サービスの本質は人的な援助にあり、「もの」の受け渡しのような計量可能な部分はあくまでも付随的なものにすぎない”と田村がいうように²⁾レファレンスの統計から正確に事実を読み取ること

は難しい。本来は件数よりも内容の評価が問われるサービスである。

統計のとりかたについては項目の区分が妥当かという問題もあるうし、担当者によるこれらの区分の解釈の相違（例えば85年度まで2,578件あった四谷の「その他」欄は86年度には25件になっている）や、繁忙時での記入忘れも多々あろう。ここで考慮すべきは、むしろ年間数千から数万件にも及ぶ質問の後処理である。回答のノウハウが担当者の経験として蓄積されることも大事だが、回答の解析がその後のサービス体制や場合によっては施設の改善に反映されること、参考となる質問が部内研修用の資料として累積されていくことが望ましい。問題は現実の職場にそれだけの余裕をどう見いだすかである。

図10～11は三田と日吉の各項目ごとの件数の推移である。三田では文献所在調査が、日吉では新館がオープンした85年度以降、利用指導の件数が増加している。

9. これからの統計

なぜ統計をとるのか。旧くは統一された用語と様式で実態を報告し、それにより図書館相互の比較を可能にすることとされてきたが、統計は“本来、図書館を評価し、それに基づいて改善計画をたてるため”³⁾にある。評価という点についてはパフォーマンス尺度あるいはパフォーマンス測定という言葉をよく耳にする。この尺度は主にサービス部門の測定に重点をおき、業務統計のような報告よりも評価・計画に用いるものである。歴史的には1970年代に遡るが、大学図書館については84年に発表されている。また最近では90年にALAから測定法のマニュアルが出版された⁴⁾。パフォーマンス尺度が大学図書館には期待されるほど定着しないのではないかという指摘⁵⁾もあるが、18才人口の減少を抱えた今後の大学運営や図書館経費の費用対効果を考えると関心を持たざるをえない時期がきている。

情報センターでは平成4（1992）年、標準統計委員会が設けられ、メディアネット発足後は標準統計作成ワーキンググループとして常設の部会となった。両方の会の初回の席上、本部の溢川事務

長から次のような要請があった。それは大学設置基準の大綱化に伴い、その趣旨を実現するためのキーワードとなつた自己点検・自己評価に役立つ統計を考えてほしい旨の話であった。現在、グループは「標準統計」の新フォーマットの検討を終了し、今年度からは自己点検・自己評価につながる統計を考えていく予定である。自己点検・自己評価のためににはこれまでの枠にとらわれない、新しい手法によるデータの収集・分析が必要となる。その際、機械によるデータの集計が有効な方法となろう。入力部分では単行書・雑誌・非図書のすべてが機械登録されると、きわめて正確な所蔵累計数やタイトル数（および付随する分類・件名）、受入・整理記録がわかる。出力部分については館外貸出やOPAC（トランザクション・ログの分析など）に関するいろいろな角度からのデータが得られる。図書館システムKOSMOS（Keio University System of Multimedia Online Services）が完成度を高めていくなかで、評価・運営に役立つ統計処理の方法も広がるであろう。

統計から得られる数値はあくまでも一つの指標にすぎない。しかも単一の側面から組織の活動を

判断することは危険である。正確なデータを基に複数の側面から総合的に評価して始めて次の計画が立てられる。健康診断の後にもらう検査数値の標準域から自分の健康の度合いがある程度わかるように、個々のセンターの特色に応じたさまざまな基準が得られるようなきめの細かい統計作りが期待される。

注・参考文献

- 1) 一時的にしか掲載されなかった項目として製本費、開館時間（昭和45年度）、書庫スペース（昭和49年度）、職員数（昭和62～63年度）がある。
- 2) 田村俊作“レファレンス・サービスに統計は必要か” 現代の図書館 Vol.31, No.1, p.50-56 (1993. 3)
- 3) 糸賀雅児“図書館統計は何のためにあるのか” 図書館雑誌 Vol.82, No.6, p.340-343 (1988. 6)
- 4) Van House, Nancy A. et al. Measuring academic library performance: a practical approach. Chicago, American Library Association, 1990. 182p.
- 5) 上田修一“大学図書館のパフォーマンス尺度” 大学図書館研究 No.38, p.1-7 (1991. 10)

小展示ニュース 2

<日吉メディアセンター>

平成5年

11月29日～12月4日
印刷技術の移り変わり

平成6年

4月8日～4月30日
福沢諭吉を味わう
5月12日～5月31日
日吉キャンパス周辺の自然（写真）
6月6日～6月30日
学問のすすめ

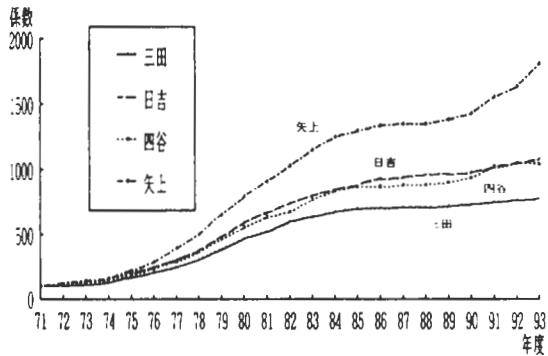


図1 予算の伸び

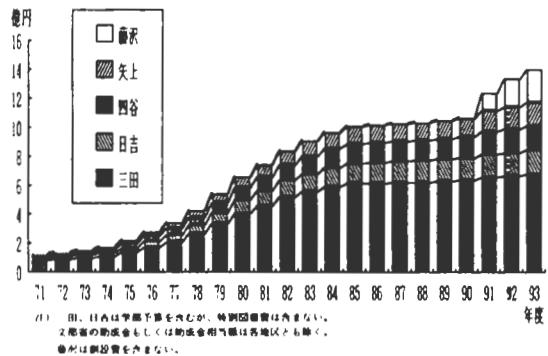


図2 図書予算

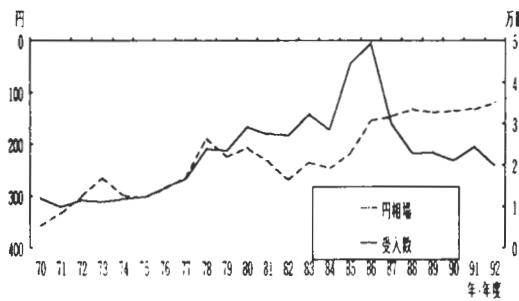


図3 洋書の年間受入数（三田）と円相場

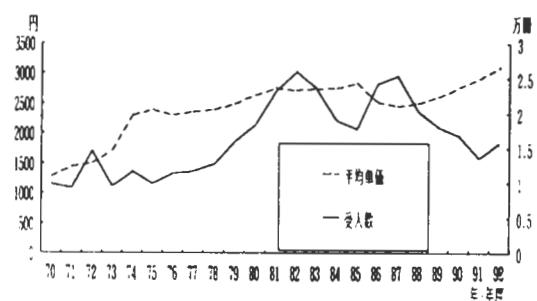


図4 和書の年間受入数（三田）と新刊書籍平均単価

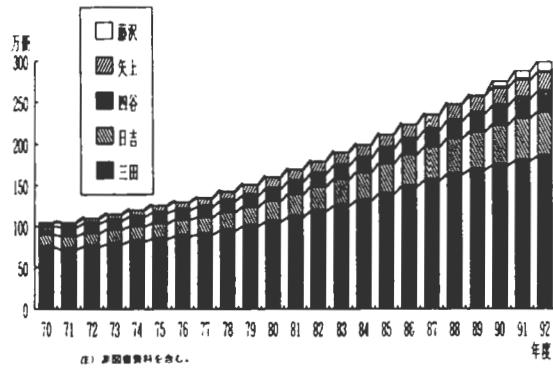


図5 所蔵冊数累計

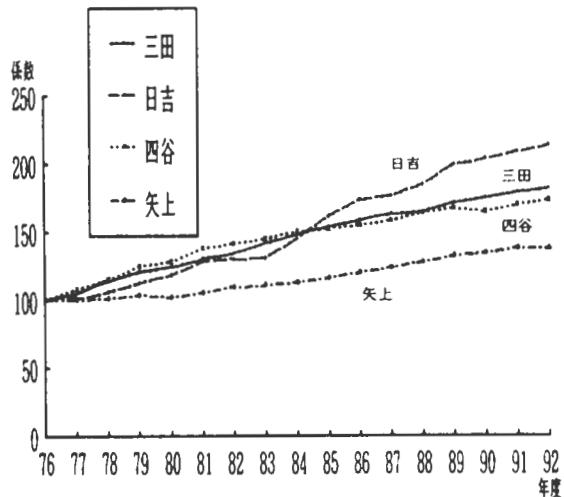


図6 カレントタイトル数の伸び

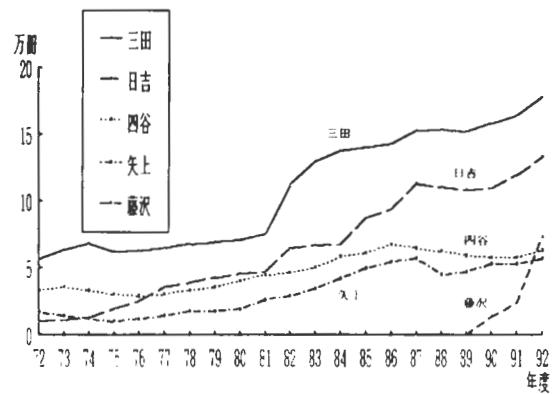


図7 館外貸出

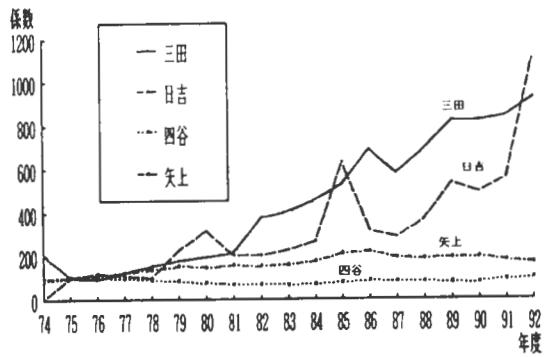


図8 相互貸借（貸し）の伸び

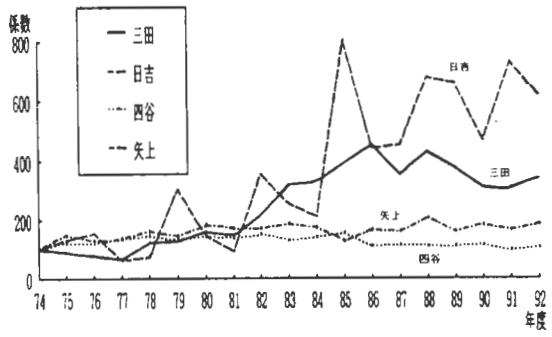


図9 相互貸借（借り）の伸び

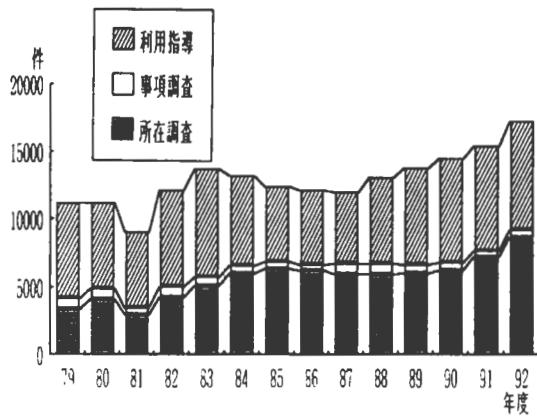


図10 レファレンス・サービス（三田）

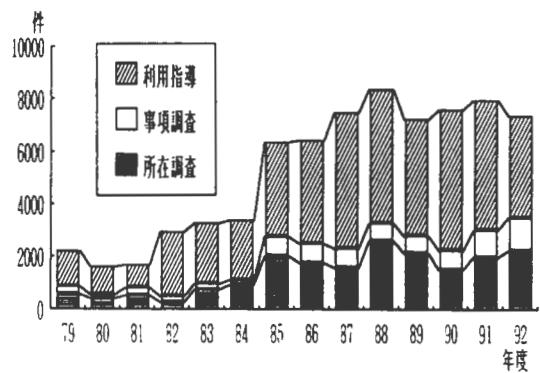


図11 レファレンス・サービス（日吉）

グラフで見る計算センターの10年

しら いし ゆき お
白 石 幸 男

(日吉メディアセンター
情報システムサービス担当課長)

1. はじめに

メディアネットが発足して2年目である。メディアネット・メディアセンターは、図書・情報資源・コンピュータ・ネットワークを、研究・教育を中心として学内すべての分野にサービスしている。このなかでもコンピュータ・ネットワークその他の情報資源を取り扱う情報システムサービス部門は、旧大学計算センターが行っていたサービスを整理しつつ、より広く新しい分野についてのサービスを目指している。

ここでは、旧大学計算センターの歴史を振り返り、改組以前の10年間の統計グラフ等も見ながら、コンピュータ利用状況とその背景について考察し、メディアネット情報システムサービス部門の今後の展開のための参考としたい。

2. コンピュータ利用様式の変化

1979年当時、パンチカードをコンピュータに読み込ませると、カードを送る連続音が訳もなく心地よく感じられた。妙に乾いたしかし安定感のある響であった。ただしそれも他人の操作で聞こえてくる時は別でうるさかった。自分のものであってもプリンターの打ち出し音は大きい。総じてコンピュータの入出力はうるさかった。

現在、ホストコンピュータ利用者は研究室、職場、パソコン室さらに自宅などからネットワークを通してホストコンピュータにアクセスする。処理結果も、内容を画面で確認してから必要であればセンターの高速レーザプリンタに送るか、自分の端末パソコンに取り込み必要な部分のみ打ち出して無駄な用紙を出さないようにする。処理は静かに終了する。これはパソコン等の普及と、ネットワーク整備の結果と言えよう。

3. コンピュータシステムの発展

1979年10月に大学計算センターが発足した。この年の夏、大学のメインフレームコンピュータは、UNIVAC 1106 システムから FACOM M-180 II AD システムに変更された。矢上工学部、四谷医学部にはミニコンピュータが設置され、それぞれ日吉ホストコンピュータの遠隔ジョブ入力システムを構成した。また、M-180 II AD システムは、前年に三田に導入された FACOM M-160 システムとキャンパス間接続されており、これらは当時の大学システムとしてはかなりハイレベルのものであった。ただし、処理形態はパンチカードによるバッチ処理が主体であった。

その後1986年から、特にハードの拡充・整備を中心とした計算センター充実のための基本3カ年計画が遂行され、三田、日吉・矢上地区的ネットワーク敷設もこの中で行われた。引き続き、質的充実・向上、利用しやすさを改善するための第2次3カ年計画が実施され、データ・プログラム等のインターフェースソフトもこの中で開発された。

この間三田ホストコンピュータはM-360、M-760/8、M-770/10と拡張され、日吉もM-380R、M-380、M-780/10とVP-50Eの併設と、これも拡張を続けた。

現在メディアネットの計算室システム構成は、三田にFACOM M-1700/10、パソコン約200台(全てTSS端末として利用可能)、その他サーバ用も含めてワークステーションが10数台(この夏導入予定)であり、日吉にはFACOM M-1600/10、スーパーコンピュータ VPX 220/10、パソコンは教室等に約310台、その他ワークステーション3台が設置されている。矢上には全塾的なネットワークサーバもあり、四谷にもパソコン約20台が一般に公開されている。日吉には、全塾図書館システム:KOSMOSを稼働するM-1900/10も併設されている。単純にホストコンピュータのCPU能力の比較では、1983年の日吉を1とすれば、現行の三田が13、日吉が4、さらに当時は設置されておらず、現在日吉に併設されているスーパーコンピュータの汎用計算能力だけでも15(これとは別に本来の長時間計算処理のためにベクトル演算

機能が働く)となっている。これらの塾の情報システムの性能向上には目をみはるものがあり、さらに、コンピュータの計算能力以外の情報蓄積・情報加工・情報交換能力の利用のための磁気ディスク・テープ装置等の周辺装置の充実、ネットワークの伸展・拡充ぶりはめざましい。

4. コンピュータの利用状況

(1) 利用登録課題数

ホストコンピュータを利用するためには課題番号を登録する。利用課題は利用希望者の申請および実習利用授業の要請により登録される。利用有効期限は、学生・大学院生は卒業までとなっている。なお、授業・実習のための課題登録数は、授業でホストコンピュータを利用しているかどうかを表わすものと見ていただきたい。

ホストコンピュータの三田・日吉の利用登録課題数の推移は図1、図2の通りである。利用登録は授業等で教職員が利用する場合の「教職員教育」それ以外の利用を「教職員研究」と称し、その他事務職員が業務の関連で利用する場合の「職員事務」、さらに学生の利用を「学生・生徒」といった具合に便宜的に分けて管理している。一度登録すれば退職まで抹消されない教職員は別として、申請による学生・生徒の登録数は一般的に各年の利用状況をよく反映する。全般的に三田では横這い、日吉では減少となっている。これは特に学生・生徒の場合について表われている。授業・実習では有料の設置講座で受講申込者を自動的に利用登録されるため、登録課題数としては1992年まではそれほど変わりはない。三田では教職員研究と事務の本部機能の多い職員業務の分野で利用登録数が毎年伸びている。

(2) ジョブ処理件数

ジョブ処理件数は投入されたジョブ数および端末につながった回数の累計である。利用内容を類推することは出来ないものの、ホストコンピュータにアクセスしようとする意思・必要の度合いを大まかにつかむことができる。図3、図4は10年間の処理件数の推移である。利用者層ごとに推移の特徴がはっきりと現れていて面白い。

三田では職員業務の利用が1983年ころから毎年

増加し、1989年ころからはむしろ減少している。これはちょうど事務部門の業務機械化とその開発が一段落しているという実際の進行を表しているようである。1984年に統計パッケージ SAS が導入され、その後教職員研究と学生・生徒の処理件数が大幅に増加した。三田計算室が大学院校舎に移転したのは1985年であったが、1987年に学生・生徒のジョブ処理件数がまた増加する。これは、前年1986年とこの年1987年に大学院校舎2階のパソコン室がオープンされ三田の学生利用端末が飛躍的に増加した結果であろう。

日吉では、職員業務を除けばすべてジョブ処理件数は減少を示している。特に、授業・実習の場合は減少が激しく、授業・実習でのホストコンピュータ利用が取り止められていることがわかる。日吉のパソコン室がオープンした1989年からははっきりと減っている。これは、ダウンサイジング、つまりプログラム言語等はパソコン上で処理するようになっていったためであろう。ただし、授業・実習以外の利用では、後述するように利用 CPU 時間は大きく伸びて、ホストコンピュータ利用ジョブの大型化が見られるようになる。

(3) CPU 利用時間

CPU 利用時間についてのグラフは図5、6である。ただしホストコンピュータはリプレースのたびに処理能力が向上するため、表面上 CPU 利用時間が減少するよう見えてしまう。そこでこれについて、1983年度のコンピュータ性能に換算した場合、実質的にどの程度 CPU 計算量が増加したかを表わすグラフ図7、8も掲載する。

三田では1984年の SAS 導入、また1987年の日経 NEEDS 経済データ導入などにより、教職員研究および学生・生徒の CPU 利用は大幅に伸びている。ただしこれも1988年ころから実質的に横這いとなり、パソコンの能力が飛躍的に向上する1991年からは、むしろ減少の傾向を示す。これは、ホストコンピュータでの計算の一部がパソコン上で行われ始めたものと考えてよいと思う。

日吉では1987年から教職員研究と学生・生徒の利用が大きく増える。これはこの年に日吉・矢上間 LAN が敷設され、矢上の研究室からホストコ

ンピュータに直接アクセスできるようになったこと、この年に計算機利用料金の全面改定がなされ利用料金が大幅に低廉化されたことなどが原因であろう。この傾向は1991年まで継続している。しかし1992年は利用が大きく減少している。ただしこれは、本グラフにはでてこないが、1992年導入のスーパーコンピュータ VPX 220/10 が長時間計算処理を行っているためである。VPX 220/10 の CPU 利用グラフは本統計では割愛させていただく。なお同時に最近の高性能ワークステーションに処理が分散し始めていることも指摘する必要があるかも知れない。

(4) 最近の利用状況

最近のホストコンピュータの稼働状況をみると、これまでのようにジョブ件数も多くなく、処理 CPU 時間も増加していない。これには何点かの理由が考えられる。

まず、安価になったパソコン、ワークステーションが個人や研究室にあふれしており、数年前までのようにはホストコンピュータで最初から最後まで処理することはなくなってきたこと。むしろすべて自分の使い慣れたパソコン・ワークステーションで処理を済ませてしまうようになってきていること。

次にホストコンピュータの便利さ（ソフトの多様さ、データベースとのリンクの容易さ等）に魅力を感じていても、計算料金面から利用を差し控える場合があること。なかには毎日課金されるデータ・プログラムの保管料金のために、データを自分のパソコン等に引き上げる、またホストコンピュータに戻す等の計算準備作業が面倒と感じて利用そのものをやめてしまう等の事例もある。これらは計算センターの課金が利用者に与えるプレッシャーと言えるかもしれない。

現在、計算のためだけにホストコンピュータを利用するというニーズはもはやなくなってしまっており、いまやホストコンピュータは、データベースシステムの利用、特別なアプリケーション

プログラムの実行、機密保護環境の利用等その特性を活かしたサービスのためのコンピュータエンジンになったと考えてよいのではないかと思われる。

5. 今後のコンピュータシステムとネットワーク

最近のコンピュータ利用形態は多様である。従来からの長時間 CPU ジョブもあれば、データベースの作成・検索・更新等がある。また例えば経済データを統計パッケージプログラムで処理するものもあるし、ネットワークにより他地区・他大学および世界の各地との情報交換を行うことも一般的となっている。

言葉を変えれば、利用者が望む時、コンピュータシステムは自分に必要な機能を果たすものであれば、物理的な大小は意味はなく、サービス機能がはっきりしていること、何時でも利用できること、どこからでも利用できること、無料であることを満足すればよい時代になってきていると言えそうだ。

コンピュータはネットワークがあつてより有用である。また、既に情報システムの基盤はネットワークである。ネットワーク上で上記の様々なサービスに自由にアクセスできるようにすること、インターネット上で自由に情報交換を行える環境を構築することを全般的に急がなくてはならない。同時に、これらのネットワーク・コンピュータを利用するための料金も、低廉化を急がなくてはならないだろう。

アプリケーションの面からはデータベース作成支援サービス、データ分析のためのシステムサービス、情報伝達のためのマルチメディア化支援サービス等をメディアネット・メディアセンターが進展させるべき当面の課題であり、情報システムサービスはますます多様化を強めてくるが、これらの実現のために一層努力を続けたい。

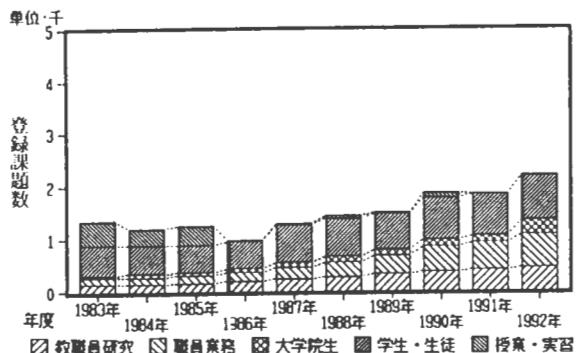


図1 登録課題数の推移（三田ホスト）

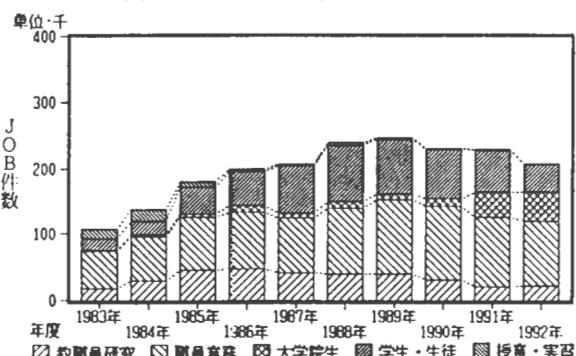


図3 JOB件数の推移（三田ホスト）

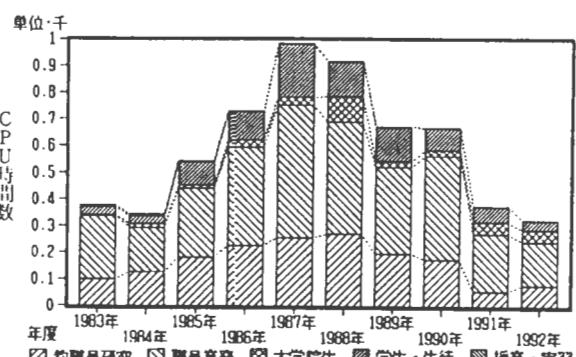


図5 CPU時間数の推移（三田ホスト）

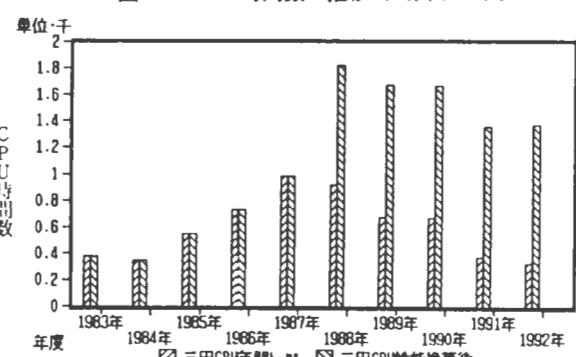


図7 三田CPU時間数推移（性能換算表示）

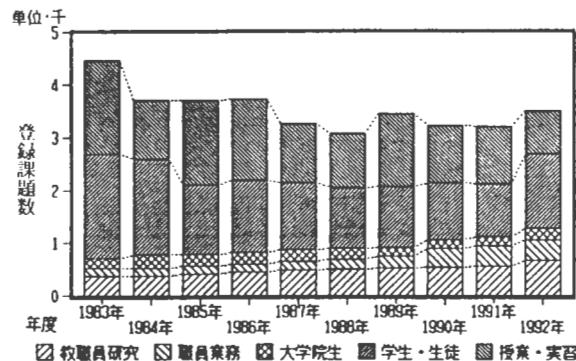


図2 登録課題数の推移（日吉ホスト）

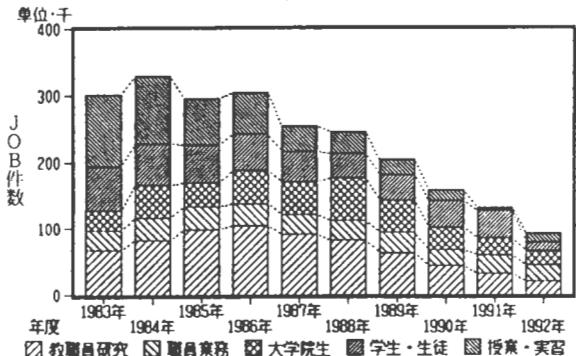


図4 JOB件数の推移（日吉ホスト）

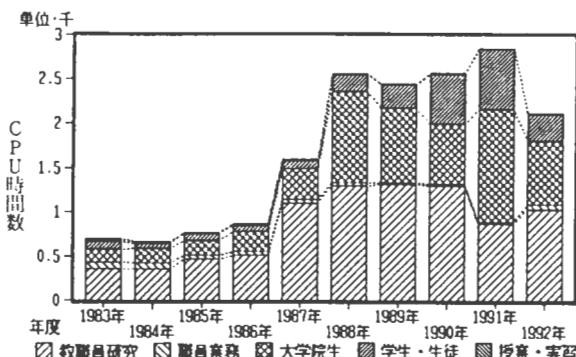


図6 CPU時間数の推移（日吉ホスト）

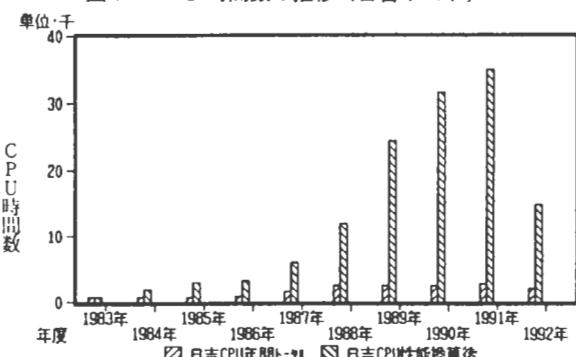


図8 日吉CPU時間数推移（性能換算表示）

湘南藤沢メディアセンターにおける AV 環境の現状と課題

むら かみ とくたろう
村 上 篤太郎

(湘南藤沢メディアセンター係主任)

1. はじめに

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（以下、SFC）は、総合政策学部と環境情報学部の2学部が1990年に創設されて以来、5年目を迎えた。また1994年4月には、政策・メディア研究科修士課程の大学院もスタートした。SFCでは問題発見・問題解決能力の育成に重点を置いており、文字化されたレポートだけが学生の提出課題のすべてではなく、ビデオなどの提出課題も多い。また学生が主体となって各種行事に用いるプレゼンテーション用ビデオを制作する場合も多い。そのため学生のビデオ制作に対する関心と、そのためのリテラシーは高いといえる。そこで本稿では、メディア環境を一つのテーマとするSFCにおいて、ビデオが積極的に活用されつつある傾向を踏まえて、主として湘南藤沢メディアセンター（以下、メディアセンター）におけるAV環境の中でもビデオを中心に関開する。

2. AV環境のコンセプト

2.1 「映像」による思考

「映像」「音響」を操作することで得られる思考過程は、「文字」で得られる思考過程と同様に重要なものである。つまり、ワークステーションなどのコンピュータを教育、研究の道具と考えるのと同様に、ビデオも教育、研究の道具と考えることができる。ただし、そのように考えた場合に、次のような二つのことに注意する必要がある。一つは、思考としてのビデオは個人的なものであるため、利用者満足度を高めるためには、出来る限り数多くの機器環境を揃えて、いつでも利用できる体制でなければならないということである。これは図書や雑誌とは異なり、ビデオは機器に依存してはじめて視聴が可能となるからであ

る。もう一つは、ビデオが画質によって見た印象を大きく左右することから、制作者とは異なる解釈の可能性があるということである。すなわち出来る限り高品質のビデオが制作できる機器も必要としているということである。これらの二点を考慮してメディアセンター AV環境を、費用、場所などの問題を絡めて利用者にとって最低限必要な機器構成で考えなければならない。

2.2 オフライン編集とオンライン編集

放送業界の現場作業においては、その準備にあたる作業を「オフライン」と呼んでいる。通常、作品はオフラインによる作業で十分な推敲が行われた後に、高画質の機能を持った機器を使って「オンライン」の編集作業が行われる。オフライン編集の段階では、オンライン編集をするイメージを持つことが必要であり、そのためには「タイムコード」と呼ばれるビデオテープのアドレスを指定するコードを用いて、映像を再構成するという編集思考形態が求められる。そのことは、ビデオテープに収録された各映像にタイムコードが付与され、出来上がりのシナリオにあわせて場面とタイムコードをワークシートに記入するなどの作業をすることである。その結果、出来上がりを意識しながら編集する習慣が身につき、素材撮影の際にも結果を意識しながら撮影できるようになるため、効率も良く品質も高くなるのである。

メディアセンターの場合に置き換えると、1階オープンエリアにおけるオフライン編集段階で内容が十分に推敲された後に、必要に応じて地下編集室におけるオンライン編集として、放送規格を満たし、高画質な機器、コンピュータとのリンク、あらゆるメディアからの入出力ができるように位置づけをしている。また、オフライン編集をする前提として、さまざまな素材を撮影するビデオカメラもメディアセンターに必要である。これらのビデオカメラも利用者がいつでも使えるようになる限り数多く揃えなければならない。

3. AV環境の現状

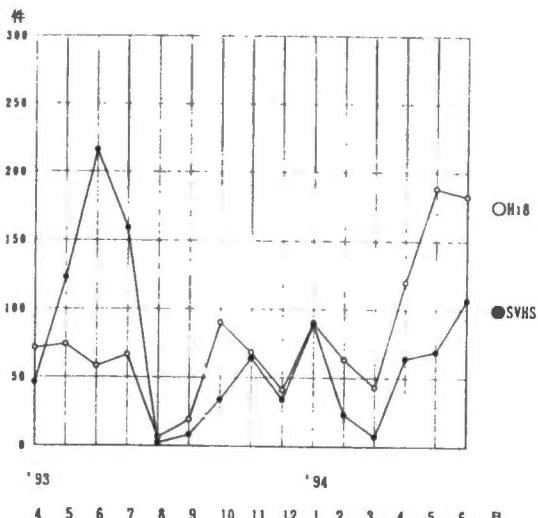
前章で述べたコンセプトに基づいて、年々拡充しつつあるメディアセンター AV環境について

現状を報告する。

3.1 ビデオカメラ

メディアセンターでは、利用者が素材を撮影するビデオカメラの当日貸出を実施している。返却時間は閉館30分前までであり、授業期間中の平日ならば22時30分までである。ただし、授業等で利用するということで教員のサインがある場合は、3泊4日まで認めている。貸出は、ビデオカメラ、充電器、充電ユニット、バッテリー、ピンコードをキャリングバックに入れた一式という形で運用している。従って、貸出の際には、利用者の目の前でこれらの機器をすべて出して不具合がないかどうかを利用者と共にチェックしてから渡し、返却の際にも同様な作業をすることによって保守管理をしている。現在、8ミリビデオカメラが18台、SVHSビデオカメラが20台で運用している。ただし、AV環境全体がゆるやかにデジタル化に進展している関係もあって、最近では圧倒的に8ミリビデオカメラの利用度が多く、今年度10台新規導入したにもかかわらず常時回転しているような状況を呈している（図1を参照）。

その他、ビデオカメラに伴って三脚、予備としてのバッテリー、ビデオライト、ビデオマイクなどの機器も貸出している。



第1図 Hi8ビデオカメラとSVHSビデオカメラ
の貸出件数

3.2 オープンエリア（オンライン環境）

メディアセンター1階の利用者入口の真正面にオープンエリアという場所があり、その一番手前付近がAVラウンジと呼ばれるエリアである。そこにはAVにおけるオンライン編集支援のため、個人用の視聴・編集設備をAVブースとして利用者に提供している。構成はさまざまな組み合わせを成しており、その要素としてはHi8ビデオデッキ、VHSビデオデッキ、U-Maticレコーダー、ミキサー、モニターTV、カセットテープレコーダー、マルチディスク、タイトラー、ラジカセ、などである。現在、全部で44ブース設置されているが、そのうちHi8ビデオデッキについていえば、15台設置されている。これらのAVブースは、空いていれば自由に使って良く、予約制もない。音声を聞く場合は、受付カウンターでIDカードと引き換えにヘッドフォンを借りて、各自で聞く体制をとっている。

学生によるAVブースの利用は、次のような二つの場合が主である。一つはビデオによるレポート制作、あるいは行事用の上映ビデオ制作である。これは、主としてビデオカメラを借りて、収集してきた素材を編集するためである。レポート制作などは、授業の関係で締切日が近づくにつれ、メディアセンター開館前から学生が並んでおり、開館と同時にAVブースがすぐに埋まってしまうという状況を呈している。もう一つは、メディアセンター所蔵のビデオテープやCD等の再生による視聴である。



オープンエリア

3.3 編集室（オンライン環境）

メディアセンターの地下には、映像スタジオ、編集室、音響スタジオの3つの部屋が用意されている。映像スタジオは主として撮影を行う部屋であり、編集室は主としてビデオ編集を行う部屋であり、音響スタジオは MA（マスター・オーディオ）録音・編集兼用の部屋である。これらの部屋の環境は、有機的に結びつくようとする主旨である。ただし、現時点では音響スタジオは、まだ何も機材が用意されていなかったり本来の機能は発揮していない状況である。したがって、ここでは編集室を中心と話を進める。

現在、編集室には高機能編集機としてベータカム VTR、ビデオスイッチャー、ミキサー、さらにはこれらが AMIGA（アメリカ・コモドール社のパーソナルコンピュータ）と接続して、高品質の画像、音声などと効率の良い編集が行えるディジタル系サービスの環境を提供している。このほか AMIGA には SONY NEWS ワークステーションと Macintosh とが各1台ずつ接続されており、1994年には2台以上の再生ビデオデッキを利用した編集方法を実施できる A/B ロール編集機やモニターを完備し、さらにシリコン・グラフィック社のワークステーションである Indigo² を数台設置し、ディジタルビデオ編集の充実に向けて展開している。

これらのコンピュータ上で実現されるディジタルビデオ編集は、今までのアナログビデオ編集とは異なり、編集・ダビング時におけるソースをコピーしても画質の劣化は起こらないというメリットがある。また、ランダムアクセス可能な記憶媒体の特質を生かすことも可能である。さらにはこれらのソースは、ネットワークを介して共有したり、遠隔地での編集をも可能にする。

この編集室の利用は、現在のところ限定されている。これは、これらの機器を利用するにはコントローラの操作方法を中心に、高画質のベータカムの編集基礎、スイッチャを使用した複雑なビデオエフェクト処理などの比較的複雑な操作の知識を必要とするからである。そのため、現在メディアセンター AV 機器の利用方法を中心とした内容である「AV ガイド」（仮称）の編集作業を、

学生を中心として進めている。それが刊行された段階で、利用講習会を開催し、より多くの利用者に利用されるように展開する予定である。それまでは、一部のユーザが中心となって利用している状況である。



編集室

4. AV サービスの内容と支援体制

AV サービスを担当するスタッフは、兼任を含めて専任職員2名、委託職員2名、その他学生アルバイトによる AV コンサルタント9名から成り立っている。これらのメンバーで次に述べるような AV サービスを提供している。

まず最初はカウンター業務である。これは利用者と直接コミュニケーションをする最前線のサービス・ポイントである。授業期間中の平日は、午後11時までという開館時間中において、少なくとも学生の AV コンサルタントを含めて1名はカウンターに担当者が在席するようにシフトを組んでいる。カウンターでの業務内容は、ビデオカメラ等の貸出、返却はじめ、素材撮影からオンライン編集に至るまでの利用者からの問い合わせへの対応である。いわゆる AV 環境における貸出、レンタル・サービスである。

次に利用者教育が挙げられる。これは主として事前に編集室におけるオンライン編集に対する利用方法についての説明依頼がある場合などの対応である。

また公式行事や事前に依頼された催しに対する撮影を担当し、その後編集して1つのビデオ作品を記録として制作することである。あるいは、公

式行事などで上映する映像、音響の制作などがある。

5. 今後の課題

すでに前述したようなコンセプトに基づくメディアセンター AV サービス活動を展開するためには、まだまだ解決すべき課題は多い。それらを大別すれば人材、場所、コンピュータとの融合である。

5.1 人材育成と人材確保

AV を担当する専任職員の人材育成が急務である。AV 業務は、従来の図書館司書という範疇では収まらない領域であり、AV ライブラリアンの養成が必要である。また、専任職員の人数増が簡単には認められない状況であるため、委託職員等を含めた人材の確保が今後のサービス展開に対して大きな影響を与えるものである。同様にカウンター業務におけるコンサルタントにかかる比重も大きく、ビデオカメラの貸出件数などの増加に伴い、コンサルタント枠の拡充に向けて検討する時期にきている。

5.2 機器設置場所の確保

これはメディアセンターの物理的空間の問題である。ビデオ機器などを導入すればするほど設置場所は益々窮屈になっていく。現在ではデッドスペースの再利用などもしているが、ブースの場所によっては外からの太陽光線を直接受けてしまうなど、利用者にとって利用しづらい問題も発生している。今後さらにメディアセンター内における配置の再編成を含めて、利用度の低い機器を少数にするなど検討しなければならない問題である。

5.3 コンピュータとの融合

AV 環境の発展は、コンピュータとの融合なくしてはありえない。コンピュータ上でディジタル編集すれば、何度コピーしても画質が悪くなることもなく、またネットワークを介して遠隔地からディジタル編集した作品を共有できるメリットもある。ただこれらを実現するには、収集した情報

をハードディスクに蓄積したり、あるいはディジタル編集して作られた作品をコンピュータから転送を可能にする必要がある。そこで、1 階オープンエリアにおけるオンライン編集段階から、徐々にではあるが編集室におけるオンライン編集に結びつけていく必要がある。このため次年度に向けて、オープンエリアや AV カウンターに Macintosh を導入して、デジタル化へのきっかけとしてビデオへのタイトラーによる文字入力の代替をさせることを目的に検討している最中である。

また、研究教育を支援するメディアセンターとしては、授業との連携をさらに深める必要がある。例えば、授業などをビデオ撮影して記録化し、あるいは各授業で作られた作品などをメディアセンターで収集し、それらを素材とした AV データベース構築を検討する必要があると思われる。

6. おわりに

従来の図書館における AV サービスは、ビデオテープや CD 等を収集し、それらの再生を中心とした、いわば視聴覚サービスであったが、メディアセンターにおけるそれは、コンセプトを異にするものである。狭義の AV が放送・通信の一部分を占めているならば、広義の AV は、放送・通信にコンピュータ、さらには出版・印刷をも含んだ領域へと拡大しつつある。そこには各々のメディアが、その固有の機能を維持しつつ他メディアとの接点を探らなければならない現実があり、おそらくメディアに関する利権が相互に絡んできているものと思われる。ここに営利組織でない、非営利組織として、且つ研究教育機関としてのメディアセンターのコンセプトの意義があり、AV は今後ともより重要なサービスとなっていくことだろう。

なお、本稿に掲載されている写真は、ディジタルスチルカメラの Quick Take 100 を使って撮影し、Macintosh から出力したものである。

<ティールーム>

キャッチフレーズ

ふく やま きん し
福 山 欣 司

慶應大学には5つのキャンパスがある。建物はもちろん通う学生や担っている役割が異なるので、どのキャンパスにも独自のイメージや雰囲気がある。北られるのを覚悟で、それぞれのキャンパスをキャッチフレーズで表すとしたら、さしつけ伝統の三田、権威の信濃町、近未来の藤沢湘南、先端技術の矢上、といったところか。では日吉キャンパスにも是非キャッチフレーズをと言われたら、あなたなら何とつけるであろうか。

今年の春、日吉キャンパスマップというA2版の地図が学内で配付され、企画段階からすべて教職員の手作りという点で注目を集めた。この地図を開くと、駅によりかたまる校舎とは対象的に全体に広がる圧倒的な緑のスペースが目につく。さらに裏面には右半分を使って日吉の自然が紹介されている。実はこの地図は義塾が公式に日吉キャンパスの自然を紹介した初めての地図としても画期的であった。

多くの学生にとって日吉は三田や信濃町への通過点に過ぎず、日吉キャンパスに対する帰属意識や関心は低い。キャンパス内に広がる森について尋ねても、大半の学生はその存在すら知らない。学生から日吉の森を見えなくしているのは、校舎の配置によるところも大きいが、その存在を意識的には公表してこなかった点にあるのではないだろうか。

渋谷と横浜の中間という立地条件にもかかわらず、日吉キャンパスは、雑木林を中心とした20ha近い緑濃い森を持っている。この日吉の森には、都心から姿を消つつあるいくつかの貴重種を含め、1200種を優に越える動植物が賑やかに暮らしている。地球環境問題が21世紀の中心課題となり、大学でもそれらの問題に適切に対処できる人材の育成が急務に成りつつある今日、日吉キャンパスの自然を知る一部の教員は、機会ある毎にその自然の貴重さ

と環境教育の実施場所としての有用性を説いてきた。その内の一人である岸由二は、近著「リバーネーム」(リトル・モア社)の中で、大地や生きものの世界と適切に交流できる能力を身に付けなければ、どんな環境教育を施しても環境危機の克服にはつながらないと述べている。

日吉の森を学生と歩きながら思う。芽吹いたばかりのコナラ林をすり抜ける風の心地良さやモミジイチゴの実の甘酸っぱさを体感し、クヌギ酒場に集まるカブトムシやクワガタムシに喜び、キツツキやタヌキが子育てをしている現場に出会えれば、彼らの中に日吉の自然や日吉キャンパスへの帰属感も芽生えるのではないだろうか。そして日吉の自然を起点に自分達の住む地域の景観や生きものの賑わいを理解する能力を身に付け、数字だけに踊らされない地上に足のついた議論ができる学生が育ってくれるかも知れない。

今度、記念館の右脇のテラスへ出かけてもらいたい。そこから見えるのは、緑のパノラマである。しかも見えているほぼすべてが日吉キャンパスであるといわれたら、あなたの持つ日吉のイメージは劇的に変わることだろう。キャンパスの中で暮らす無数の動物や植物たちがアリティを持って想像できるようになるにちがいない。そして帰り道には、守衛室の横の案内図を改めて眺めて欲しい。その地図が逆さになって芝刈り機を押している緑色の子犬のような不思議な生きものに見えてきたら、もうあなたは一生日吉キャンパスの姿をその自然とともに忘れる事はないだろう。

さて最初の問いかけに戻ろう。もし私がキャッチフレーズを付ける栄誉を与えられたなら、迷うことなく「生きものの賑わう日吉」とするだろう。およそ大学のキャンパスのキャッチフレーズには不似合いではあるが、動物や植物が生き生きと暮らせるキャンパスの未来は明るいに違いない。もちろん、この「生きもの」の中にはあなたも私も含まれているのです。

(経済学部助手)

イギリス図書館研修報告

関　秀　行

(三田メディアセンター係主任)

1. イギリス行きの経緯

慶應義塾図書館はこれまで数人のライブラリアンを海外研修の一環でアメリカに派遣してきた。私もその例に習い、アメリカの大学図書館での研修を計画しようとしていた。その矢先にイギリスから一通の手紙が届いた。ケンブリッジ大学図書館日本部門のライブラリアン、小山騰氏からの、あるプロジェクトの援助のために日本のライブラリアンを数ヵ月間派遣してもらえないか、という申し入れである。

そのプロジェクトとは、日本の学術情報センター総合目録システム（以下、NACSIS-CAT）を使って、イギリス国内に散在する日本語資料の総合目録データベースを作るというものであった。あくまでも当人の研修が第一であるという慶應側の意図をイギリス側が了解しており、プロジェクトを手伝うかたわら、各図書館における研修についてサポートすると言及していたこと、また、私のそれまでの仕事が NACSIS-CAT と無縁ではなかったこともあり、「試み」的な要素を覚悟しつつ、半年間の計画でイギリスを訪れるようになった。

2. 研修日程

私が渡英した時点で総合目録プロジェクトに参加していた5つの図書館を回ることになった。ケンブリッジ大学に3週間、オックスフォード大学に5週間、シェフィールド大学に5週間、スコットランドのスターリング大学に2週間、ブリティッシュライブラリーに5週間である。各図書館における滞在期間はプロジェクト援助の必要な度合に依っている。

3. イギリス図書館めぐり

イギリスで訪れた各図書館について、印象に

残っていることを雑感として綴ってみたい。

A. ケンブリッジ

ケンブリッジ大学図書館を言葉で説明してみると……「美しい中世の街並みの中にあって、少々異質な感のある、そびえ立つという表現がぴったりの外観。500万冊を越える開架式の蔵書。おそらく長い歴史そのままの、『人』による入退館のチェック。一冊50cm四方はあろうかと思われる巨大な冊子体目録の列が壁際に居並ぶ部屋に置かれた、10数台のOPAC端末。そして館内のカフェテリア。」……と言った感じである。多くの不安と期待を胸にケンブリッジの地に降り立った私にとって、初めての海外の図書館経験となったこの図書館には今でも思い入れが深い。



ケンブリッジ大学図書館

B. オックスフォード

海外生活にも慣れ始め、また5週間という比較的長い期間の滞在、しかも大学の施設内に宿泊という条件もあって、オックスフォードでの研修はイギリス滞在中最も充実したものとなった。

意外に（良い意味で）普通の大学図書館であったケンブリッジに比べて、蔵書規模こそ同等なのも、オックスフォード大学のメインライブライアリーであるボドリアン図書館は普通の大学図書館にはない特徴を多く持っている。その中でもボドリアン図書館の性格を最もよく表すのは、大学図書館でありながら図書の貸出を一切認めていないことであろう。しかも、本館では一部の参考図書を除いてすべて閉架式である。したがって利用者は、目録に頼り、本を出納してもらい、館内で閲覧するのみである。委託コピーは可能だが、それ

が本の劣化につながると判断される場合は拒否される。この方針に賛否両論はあろうが、同じ大学図書館でありながら果たすべき役割がこうも違うものかと逆に感嘆してしまう。

C. シェフィールド

シェフィールド大学はイギリスにおける日本研究の総本山と言われており、小さいながらも東アジア研究図書館が独立している。イギリスの納本図書館になっているようなケンブリッジやオックスフォードとは違い、シェフィールドはその規模、雰囲気において日本の大学図書館に近いイメージで捉えることができる。おりしも学期末試験が近い時期とあって図書館も学生でごったがえしており、生きた大学図書館を体感するよい機会となった。

D. スターリング

今回訪れた中ではスターリングは最もこじんまりした図書館であったが、電子技術の導入についてイギリス国内では最も進んだ大学図書館の一つと言ってよいと思う。アメリカナイズされた大学の代表格として国内で注目を集めており、図書館もコンピュータセンターとサービスの融合を目指している。



スターリング大学キャンパス

E. ブリティッシュライブラリー (BL)

BLは今大きな変革期にあると言える。一口にBLと言っても、その組織は複雑多岐である。大英博物館内にある有名な閲覧室はもちろんBLの一部ではあるが、大部分は主題や機能ごとにロンドン中に散在している。最近では、ドキュメントサプライセンター (DSC) と同じ建物にテクニカ

ルサービスなども機能を移行しつつある (DSCがあるボストンスパという町は、ロンドンからヨークまで特急電車で2時間、さらにお抱えハイヤーで30分間以上も田舎道をかっ飛ばしてやっと到着、周りには畠以外何もない、というところでもない所にある)。また、ロンドン内に新しい図書館を建築中で、完成予定の1996年には、多くの機能がここに集約されることになっている。

4. イギリスの図書館における電子技術の導入

電子技術の導入の状況は、訪れた図書館で必ず見聞しようと試みたことの一つである。大雑把な言い方だが、この点についてイギリスは確実に日本より進んでいる。

業務の機械化については、パッケージソフトを自館用に変更を加えて使うのが主流である。私が見た限り、LIBERTAS, BLCMP, DYNIX, GEAC の4つのシステムが主流で、その他オックスフォードが採用している DOBIS/LIBIS やケンブリッジの独自開発システム CATS などがある。

ネットワークの利用に関しては、JANET (Joint Academic Network) というイギリス全土をカバーするネットワークの存在によって、いくつかの図書館では利用者用端末から国内の他の大学図書館の OPAC や様々なデータベースにアクセスできる。しかもワークステーションなどの専門的な操作を必要とせず、パソコン上でメニューに従って番号を選んでいけば望みのデータベースに接続してしまう。また、日本の現場で切実に望まれている、CD-ROM を個々のパソコンごとではなくサーバーを使ってネットワーク上で利用する、という形態はイギリスでは当たり前となっている。

「電子技術の発展に図書館がどう対応するか」という問題については、私の滞在中に全国レベルのレポートが出されるなど、イギリスにおいても大きな関心事である。現時点で日本の環境より進んだものを持ちながら、なおこのような議論が展開されるのは羨ましい限りである。

5. 研修を終えて

当初は5つもの図書館を転々とすることに関し

て、広く浅い見間に終始してしまうのではないかという不安が大きかった。しかし終わって見れば、イギリスという一つの国の図書館界を見渡す機会となったことは事実である。また NACSIS プロジェクトそのものは当面の研修課題ではなかったものの、プロジェクトは私にとって非常に興味深いものであり、当事者である日本担当ライブラリアンの人達と過ごした時間は最も有意義なものとなった。プロジェクトの今後の進展を期待すると共に、このプロジェクトが日本と比較的な

じみの薄いイギリス図書館界との交流のきっかけになり得るものであることを言及しておきたい。

6. おわりに

5つの図書館を万遍なく伝えようとしたため、紙面の都合上肝心のところが単なる紀行文になってしまった。イギリスの図書館について自分なりに蓄えた知識は別の機会に伝えられればと思っている。

小展示ニュース 3

<三田メディアセンター>

平成 5 年

8月30日～10月7日

学徒出陣五十周年記念塾生たちの「学徒出陣」展

11月1日～11月6日

梅田晴夫展一万年筆コレクション受贈記念

11月10日～12月20日

女性参政権百周年とニュージーランド—女性参政権1周年記念小展示

平成 6 年

1月17日～1月28日

生誕百年記念西脇順三郎展

2月7日～4月8日

反骨の作家野口富士男展

4月11日～5月14日

平成五年度新収貴観書展

5月23日～6月4日

キリストの世紀展

6月6日～6月14日

小川国夫展：「アポロンの島」から「悲しみの港」まで

6月15日～6月22日

目録から見る洋書の歴史

6月23日～6月30日

小川国夫展：「アポロンの島」から「悲しみの港」まで

7月4日～7月21日

紙のない文明展

7月23日

高校教科書に見るクラシックス展：大学説明会開催記念

電子情報社会のなかの『図書館』へ

——数学の研究と
メディアセンターとの関わりから——

まえ だ よし あき
前 田 吉 昭

(理工学部教授)

私の研究分野は数学、特に幾何学です。世の中の動きに一番疎い『數学者』でさえ情報社会に対応をせざるを得ないのでしょう。情報は電話回線でアナログ信号を送っていたものが現在では光ファイバーを用いてデジタル信号で送ることにより数万倍の情報量を高速に提供できるようです。私が研究を始めてから今までに情報を得る方法も大きく様変わりしてきました。自分の研究のなかで利用してきた情報サービスについて御紹介してみたいと思います。

1. アナログの『図書館』

大学にはシンボルといえる建物がいくつもあります、『図書館』というのはその一つでしょう。私達も自分の仕事を通じて『図書館』の御世話をなっている次第です。慶應義塾では各キャンパスに置かれた図書館が実質的な利用者のニーズに応えるべくその役割を負っているわけです。

私達は色々な大学を訪れることが多く、また仕事のために大学図書館をよく利用するのですが、古めかしく威厳のある図書館もあり、近代的に整備された図書館もある、といったように大学によりさまざまです。建物だけではなく、蔵書のなかにもそれぞれの大学の個性が表されています。

図書館の使命は色々あるでしょうが、私達が一番に望むのはその『空間』です。学生や、先生達が資料を読んだり、原稿を書いたりするための雰囲気のある空間を提供してくれる場所としての役割です。

2. アナログの『研究ネットワーク』

大学院に入ってから、一応研究者のまねごとの様な生活をしました。雑誌から論文をコピーして

セミナーのなかでそれを解説するわけです。まだ『コピー』の機械たるもののが貴重品でした。『ゼロックス』の機械が一台燐然と置いてあり、これは『教員専用』という張り紙がされていました。今では学生がなんのためらいもなくノート等をコピーしている姿をみかけますが、この頃は『ゼロックスコピー』に憧れさえ感じた時代です。良い機械でコピーをとればどんな難しい論文だって読める気さえしたのです。

セミナーの後などよく研究室で、雑談の話題となるのが先生方がいかに外国の資料を手に入れるのに苦労をしたかということでした。戦後生活も苦しい時代に『研究』を続けることはそれだけで大変であったわけですが、何よりも、研究情報を得るのは至難であったのです。外国の雑誌はまだ稀少であり、洋書は高価であったでしょう。いろいろな図書館を訪ねては、文献を入手したわけです。『コピー』の機械すら無かったので、図書館の資料をノートに書き写したのです。輪講用の資料を作成する際にはタイプライターに何枚ものカーボン用紙を入れてタイプしたそうです。そんな話を聞くと自分の手元に資料を持てるのは恵まれていたのでしょう。

数学の研究のために入手しなければならない情報は他の研究分野と比較してもそれ程多いとは思いませんが、関連した研究者の最新の情報は正確にしかも早く手にしたいというのは同じです。我々の研究分野では必ずしも結果だけが知りたいわけではなく、どの様な論理や計算により得られたかも大切です。どちらかというと自分自身で考えることが基本であり、その意味からいえば、多くの情報に振り回されてはいけない部分もあります。

3. デジタル時代の『研究ネットワーク』

我々が研究を始めた頃にはそれ程多くの情報量を必ずしも必要としなかったともいえるし、入手出来る情報だけ研究をやってきたともいえるかもしれません。世の趨勢で所謂情報システムへの対応をせざるを得なくなっているのも事実です。

現在、私が利用しているものは電子メールによる研究者との交流が一番です。一つはパーソナル

な形で親しい研究者と研究情報の交換、プレプリントの入手等です。いまや電子メールを通じて共同研究さえ行う事もあります。もう一つは、欧米の研究所からの情報を入手することです。研究所に滞在していた研究者達の成果の報告、シンポジウムの計画や案内を得ることです。オーストリアのシュレディンガー研究所や、イギリスのニュートン研究所、ウォーリック大学数学研究所等が私が定期的に情報を受けている機関です。他にアメリカのいくつかの機関からも情報サービスを受けています。

最近では、国際会議等を開催する際にその打ち合わせや招待等の連絡を電子メールによって行うことも日常のこととなっています。会議の報告集も電子メールで原稿を集めコンピューターによる編集システムで作成するのも普通です。研究の打ち合わせや、出版等に今まで掛かっていた時間が大幅にスピードアップしたことは事実です。

4. アメリカ数学会から得る情報サービス

御存知のように、情報サービスはアメリカが最も進んでおり、実際多くの情報をアメリカ数学会に関連した機関から受け取っています。

第一は関連した研究者グループ組織内のお互いの情報交換です。私は幾何学や理論物理関係の研究者のグループに参加し、そこからワークショップの連絡や最新の結果等を知らせてきます。最近の話題は、フェルマーの問題の解決についてのアナウンスが伝えられたことです。さらに数学学者の手から新聞報道へと移っていったわけですが、一般に知られる前に専門家の元にはこういう情報が伝えられています。

第二は原稿の投稿です。アメリカ数学会によって出版されている雑誌は基本的にコンピュータによる編集方法（AMSTex）で作成されています。電子メールでの投稿が望まれています。最近出版が始まった『The New York Journal of Mathematics』は受付も出版もすべてコンピュータで行うというもので、欲しい論文は各自電子メールを使って引きだすというのもあります。

第三はこれも最近ですが、カリフォルニアのバークレイ数学研究所のスタッフが中心となり

『Differential Geometry E-prints』という、プレプリントを集め世界の研究者に情報サービスを行うシステムを始めました。このセンターに自分の電子メールの住所を登録さえすれば自分の論文をそこにインプットしたり興味ある研究者の論文をアウトプットすることが出来るのです。自分の端末から世界のカレントな情報を受けることが出来るということです。

情報の発展により、我々の元に届く結果には少し重みが薄れ、空気の様な軽さを少し感じずにはいられなくもあります。論文自身も、以前の、版組、校正、出版という過程は殆どなくなり、自分で作った原稿そのものが出版の最終過程になっているわけです。『雑誌』の存在意味が問われていくのでしょうか。多大な情報量に対しては、当然多くの取捨選択が瞬時のうちに行われるわけですが、歴史に残る結果は多くの時間をかけなければ判断が出来ない事があります。それまで本当に必要な結果を保持出来るのかという危惧は拭えません。しかし雑誌から得た情報を読みそれを保存していく今までのシステムは次第に変えざるを得ないです。アメリカ数学会が出版している『Mathematical Reviews』という、世界の数学関係の雑誌に投稿された論文のリストを掲載しているものがあります。これが唯一の数学の情報サービス機関でした。現在、CD-ROM やオンライン情報検索サービスを用いて検索することができるようになり図書館の大きなスペースから消える日も間近でしょう。

5. デジタル時代の『図書館』

メディアネットワークを用いて研究情報を得るのは勿論我々にとって有り難いシステムですし不可欠のものでもあります。コンピュータネットワークを通じて海外の研究者とも距離を感じずに議論も出来るようになっているわけです。一方では、最初に述べた様な『図書館』の存在には捨てがたいものを感じこともあります。歴史の遺産を収容し、そしてその雰囲気のなかで、学生も我々の研究も育まれていく気が致します。温室や水栽培のような、テクノロジーを用いて育てた野菜がある一方で、泥臭い農地に育てられた青みの

においの強い野菜が必要なように、『図書館』が近代的な情報システムと歴史に耐えうる資料の維持をバランスよくしていく時代なのでしょう。新しい指向の『図書館』として、メディアセンターが我々のニーズを満たしてくださることを期待しております。

6. おわりに

メディアセンターへの要望について原稿を書く

よう依頼を受けたのですが、そのサービスには大変満足しています。私が知っている他の図書館からはメディアセンターの様な親切な対応を受けたことはありません。外部から訪れた方々にも気持ち良く対応され手助けをしてくださる光景は慶應義塾が誇れるサービス機関の一つです。『要望』というよりこの場を借りていつものサービスにお礼を言わせて戴きたいと思います。

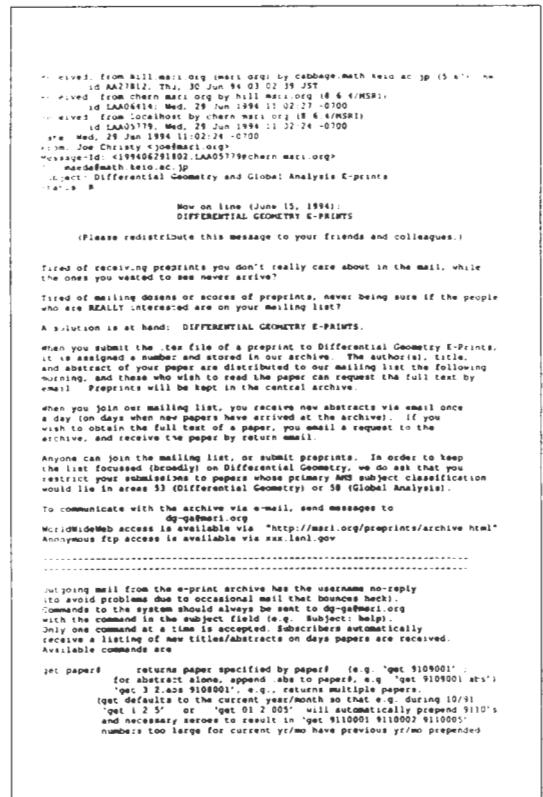
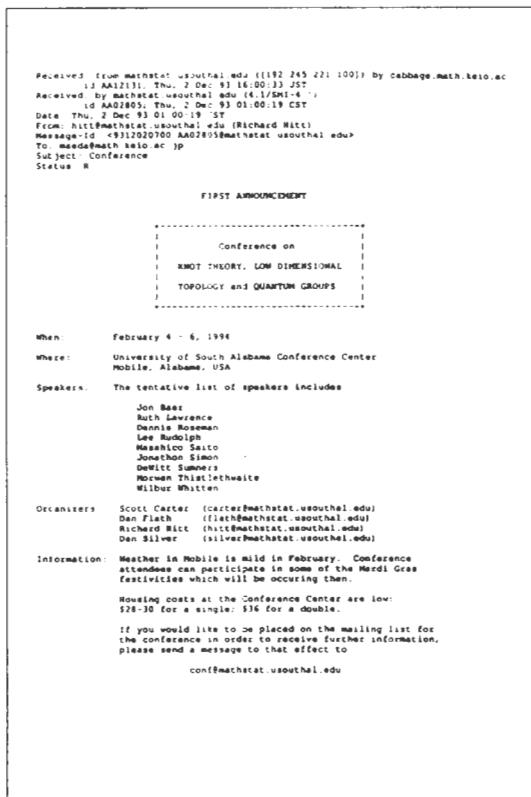


図1 e-mailによるワークショップの案内

図2 The New York Journal of Mathematics
の会議案内

ライバルからパートナーへ： 早慶館員合同合宿研修のことなど

ほんまきさとる
本間 晓
(早稲田大学図書館)

1. はじめに

今年も9月7日から9日までの日程で5回目の早慶図書館員合同合宿研修が行われる。テーマは「コレクション・マネジメント～増え続ける蔵書にどう対応するか」である。残暑の中、三日間の合宿研修が大きな成果をもたらすものと期待される。大学図書館員を対象とした集合研修はいろいろあるが、この早慶図書館員合同合宿研修のように特定の大学図書館同士が定期的に行う研修はそんなに例がないのではないかと思われる。

この研修は1990年から始まったが、その前段として両大学図書館の相互協力に関する経緯について説明しておかなければならないであろう。複写依頼や紹介状による利用を中心とする相互協力は両大学図書館で一般的に行われてきた。それを一步進めた「早稲田大学および慶應義塾の図書館相互利用についての協定」が1985年10月に結ばれた。この協定の特徴は、相手方の利用者（専任教員）を学内利用者と同様に扱うことにある。利用者は自分の所属する大学の図書館のみならず、慶應あるいは早稲田の図書館を自分の大学図書館のように利用できることを制度的に定め、図書館の枠をこえて、大学間の協定としたところにこれまでの相互協力協定の常識を破る特徴があった。この相互利用は、今後個々の大学図書館の枠を超えた分担収集であるとか、分担保存、共同利用などを実現するための条件整備の一つとして評価されるものであると思われる。とくに私立大学間における相互協力は互恵が原則であるにもかかわらず、一方の大学に比重が偏ることも多い。この相互協力の段階的進展である相互利用については、実現に様々な議論があったと思われる。なによりも、自分の大学図書館を他大学の教員にも開放することに対する利用者（研究者）の反応が問題に

なる。その反応は、必ずしも否定的ではなかったとのことである。当時、この協定を手掛けた方の話を伺うと、相手が早稲田なり、慶應であることが協定を結ぶことを可能にしたとのことである。つまり、お互い相手校は特別の存在であるとの意識を持っていたことがこの協定を結ぶのに当って力があったのではないかとのことであった。

早稲田と慶應は、「私学の雄」と称され、ライバルであるとされてきた。両大学の学生、教職員もライバルとして意識せざるをえない相手と位置づけてきた。この協定が結ばれるにあたって、利用者はそのようなことを考えたかもしれない。しかし、図書館にあっては、この協定が将来にわたっての布石であるとの認識が大きかった。これまで当然のように両大学図書館は、相互に意識しあってきたが、それぞれ日本の大学図書館における主導的位置を占める図書館であること、規模的にも同様であること、などから、このような協定を結ぶことにより、ライバルからパートナーとしての位置づけを意識したといってよいであろう。

このような両図書館の関係から、早稲田から慶應への派遣研修や館員合同合宿研修などが実現していくわけである。

2. 早稲田から慶應への派遣研修

1988年から90年にかけて早稲田の館員4名が慶應での実務研修のため派遣された。その4名は次の通りである。

- 88年10月—11月 千葉範子（閲覧課参考係、現総合閲覧課）
- 89年6月—7月 忠平美幸（整理一課和漢書係、退職）
- 89年11月—12月 渡辺幸弘（学術情報課、現同課）※渡辺は、研究・教育情報センターへ派遣
- 90年10月—11月 毛利慎二（理工学図書館、現国内図書課）

この研修の行われた88年から90年は、早稲田では91年4月の新図書館オープンを前にしていた。そして新図書館の建設、運営、サービス体制につ

いて不安を持ちながら、数々のワーキンググループが組織され、検討がなされていた時期であった。新図書館は従来の閉架式から開架式にすることが決定しており、これまでとは業務の様変わりが予想された。そこで、早稲田では、図書館として先進的な慶應の図書館に誰かを派遣し、新図書館を考える際の様々なヒントを得たらどうかとの甚だ虫の良いことを考えたわけである。勿論、結果として相互協力などを円滑に行うための人的交流もできればとの希望もあった。

最初に派遣された千葉範子は次のように書いている。「現在、早稲田大学図書館では学部学生に対しては、参考室・雑誌室・学部図書室を除き、閉架書庫からの出納による資料提供を行っています。そのため新館オープン時の開架体制研究は未知のことでもあり、不可欠のことです。今回、研究者数・学生数が若干異なるとはいえ、大規模総合大学図書館である慶應義塾図書館で実務研修ができたことは非常に幸せでした」（「薦」76）。また、実際に2ヶ月にわたる慶應の図書館員との業務において、早稲田と慶應の図書館員気質の違いも感じ、それがあったからこそ、研修がより意義の深いものとなり、「違った環境から観ることにより早稲田大学図書館を再認識できたよう思う」と述べている（同）。

この研修の最後に派遣され、各情報センターで主にパブリック部門の研修を受けた毛利慎二も、「慶應大学各情報センター全般にいえることだが、彼らの利用者への丁寧でそつのない対応には感心した。また業務マニュアルが整備されており、体系的な教育的視点での利用者サービスへの意欲が窺われた。今後とも大いに交流を深め、良き点は見習い吸収していきたいものである」（「薦」84）と研修の感想を述べている。

この派遣研修は、早稲田が新館オープンを前にして一方的に派遣したものであり、交換とはなっていない。また、早稲田の新館オープン後は途切れている。もともとそのような意味をもった派遣研修であったとも言えるが、今後、早稲田・慶應のパートナーシップを深化させるためには、人的交流が大きな力となることを考え、機会を捉えて再開したいと思っている。その時には、早稲田か

らの一方的な派遣ではなく、交換の形が望ましいと思う。

3. 早慶館員合同合宿研修

千葉は、先に紹介した派遣研修の感想の中で、早稲田と慶應の図書館員の雰囲気の違いにふれて、慶應は学問として図書館情報学を学び、そして実務としての図書館業務の流れの中から館員のパートナーシップが生まれる。それに対して、早稲田は種々の学問分野の者が集まり、図書館業務を通じてパートナーシップを作りだして行くのではないかと言っている。両大学図書館が派遣研修や合同合宿研修を行う上で、双方の図書館の相違ということは非常に重要なことであると思う。図書館としての規模が似通っているとか、歴史的にライバルと考えてきたとかいう理由で派遣研修や合同合宿研修が成功するものではないであろう。お互いが相手に異質なものを見つけ、自分を振り返ることがなくては意義が減少すると言っては言い過ぎであろうか。同質のものが協力しあって新たな展望を開くこともあるが、異質のものがお互いを認めて、新たなものを生み出すことに魅力を感じる。それぞれの図書館には長年培われてきた職場風土があり、それが良いにつけ、悪いにつけ日常業務の在り方、サービスなどに影響を与えていると思われる。ここで私が早慶の職場風土の違いを述べるのは甚だ僭越である。あくまで早稲田で考えることとしてお許し願いたい。

早慶両図書館を考える時、職場風土の違いとして思うことは、館員採用の方法の違いである。慶應が図書館情報学を学問として学んだ者で図書館員を構成しているのに対し、早稲田では採用の際に、図書館情報学を学んだことや、司書資格を持っていることを採用の条件とはしてこなかった。早稲田では、採用後司書資格の取得を勧めているが、これと強制ではなく、また司書資格を取得する方法も通信教育や講習であって、学問として学ぶといったものではない。この採用の方法には、主題専門司書を育てるに重点を置く考え方があったものである。そのように早稲田の館員は育てられてきた。それ故、早稲田では、多くの館員が、就職後初めて図書館について学び出

すことが多いわけである。そのため、図書館運営、サービス等について、日常業務のなかで考え方を体系付けて行くことになり、館員それぞれでは体系的に考えていても、共通認識が持ちづらいといった傾向がある。あくまで資料を中心に考えることから個人主義的になりやすく、そんなところから、職人気質、内弁慶であると指摘されたりする。それに対して、慶應の図書館員が図書館運営、サービス、内外の図書館や情報技術の動向などに非常に詳しく、勉強をしているとの感想を館員合同合宿研修に参加した館員が一様に述べる。慶應の館員は、図書館について、少なくとも共通認識をしっかり持っているとの感想を述べる。そんなところにも館員についての相互の図書館の採用・育成方法からくる職場風土の違いが現れているのかと考える。

さて、このような職場風土上の違いをもって、これまで4回の館員合同合宿研修が行われてきた。どの回も共通なのは、合宿当初は若干の気負いをもち、構えて望むようであるが、最後は愚痴も交えて親しくなるといったところであるようである。日程はいずれも2泊3日。プログラムは、概ねテーマに関する参加者のプレゼンテーション、グループに分かれてのディスカッション、グループ発表、全体討議、まとめ、である。気の利いた担当管理職にあっては、レクリエーションの時間をプログラムに入れ、好評を博すこともあると聞いている。

さて、これまでの4回の研修の足跡を辿ってみたいと思う。なお、早稲田大学図書館では、この研修報告を館内広報誌「薦」に掲載しており、その記事を参考にする。引用文はすべて「薦」の報告からであり、第1回が83、第2回88、第3回93、第4回98号掲載である。

1) 第1回(1990.8.20-22)

テーマ：いま、私が「図書館（員）」について
考えること
参加者：慶應5名、早稲田8名（事務局を含む）

第1回ということもあって、テーマも間口を大きく広げたとの印象がある。各自のプレゼンテーションも現在行っている業務に密接に結び

ついたもの、理念的なものと様々である。これらのプレゼンテーションからグループ討議として、「図書館員の信頼性をどう高めるか」と「柔軟な組織をめざして—図書館サービス向上のため」が討議された。

この研修について慶應の担当者であった天野氏は、この研修のこれからについて「今回は、はじめての試みということで、研修内容、方法等について、事前の具体的打合せはあまり行われなかった。しかし、もし来年以降もこのような合同研修会を実施するのであれば、両校で研修の目標を明確にした上で、研修テーマ、方法等の設定、参加者の資格等について、事前に十分な検討をしておく必要があろう」と述べている。

なお、慶應の参加者は1回目の研修ということもあって、慶應大学研究・教育情報センター職員研修委員会のメンバーであった。

2) 第2回(1991.9.2-4)

テーマ：ILLの将来展望

参加者：慶應4名、早稲田5名、アドバイザーとして天野（慶應）小川（充）（早稲田）オブザーバー高橋芳樹事務部長、事務局佐々木（早稲田）

この回の研修について早稲田側の担当管理職であった小川は事前打合せを十分おこない「テーマは『ILLの将来展望』という、それ自体は極めて大きな、また理念的なテーマになったが、参加者を原則としてILL担当者、もしくはその経験者したことから、理念だけが先走ることもなく、いわゆる『地に足のついた』討議がなされ、非常に内容豊かな成果が得られたと思われる」と総評を行っている。

3) 第3回(1992.9.2-4)

テーマ：大学図書館の自己点検・評価

参加者：慶應5名、早稲田5名、アドバイザーとして天野（慶應）小川（充）（早稲田）、事務局佐々木（早稲田）

91年7月に大学設置基準が改正され、各大学は自己点検・自己評価を行うことが努力目標とされた。その点、この回のテーマはまさに時宜に適ったものであった。この研修での検討は、

研修後も継続され、最終的には、その成果を「大学図書館研究」42号に発表し、また私立大学図書館協会東地区研修会においてメンバーの長島敏樹氏が、ここでの検討をもとにした講演を行うなど、外部に対しても、この研修の成果をアピールした。

4) 第4回 (1993. 9. 9-11)

テーマ：大学図書館におけるシニア・ライブラリアンの役割

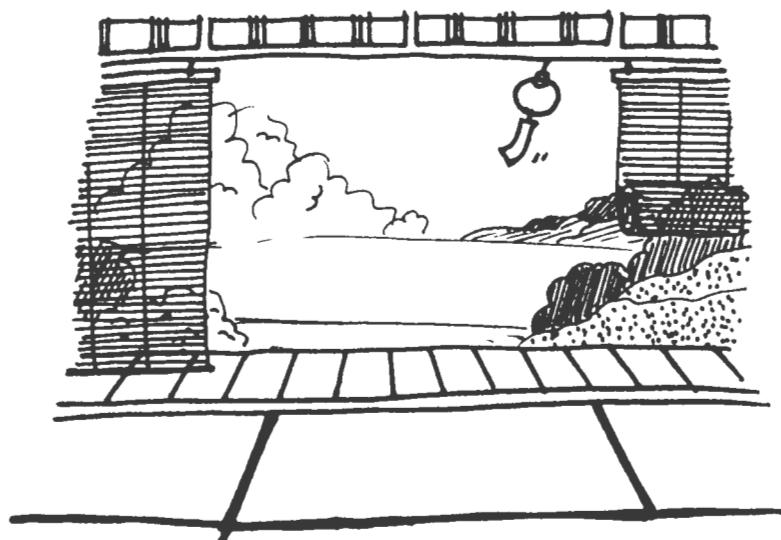
参加者：慶應5名、早稲田6名、アドバイザーとして天野（慶應）三浦（早稲田）、基調講演・渋川（慶應）

今回この研修では初めて慶應の渋川氏による「大学図書館員—アイデンティティの“ゆらぎ”」と題する基調講演が行われた。テーマは聞き慣れない「シニア・ライブラリアンの役割」ということであったが、中堅以上の館員が若手図書館員に何を、どの様に伝えていくかということであった。この問題は、現在の図書館においては、考えれば考える程深刻な問題であって、システム化等の図書館の激動のなかで、「図書館員としての感性を失いたくない」との悲鳴にも似た声も聞かれた。

4. おわりに

両図書館唯一の館員合同合宿全回参加者である天野氏は、第4回目の総評で「研修会そのものに人格がある筈はないが、第4回目をむかえた今年の合宿研修に参加して、最も印象深かったのは、この研修会が非常に成熟してきたということであった。第1回から連続して参加している筆者であるだけに、よけい強く感じられたのかもしれない。当初、いかにも早稲田対慶應といった、参加者の対抗意識のようなものが横溢していた研修会であっただけに、ごく自然に課題に取り組み、議論が進められた今回の研修会の雰囲気は、もはや一人前の研修会のそれと同じであるように思われた」と述べている。大変印象深い言葉である。

先にも書いたように、早稲田と慶應の図書館は、ライバルからパートナーへの道を着実に歩んでいる。相互協力のために制度的整備もされてきている。今後も協力して新たに行わなければならないことは多い。そのためにもこの研修は、同様に持っている課題の解決に協力しあい、協力のための人的交流にも大きな力を発揮すると考える。



<スタッフルーム>

「レボファイル」の行方

いがらし ゆみこ
五十嵐 由美子

小学生の頃、私は図書館が好きだった。それは、読書が好きだったのでなく、図書委員としてカウンターに座り、貸出カードの日付印を押したり、ブックカードをファイルしたりするのが好きだっただけ……。

そんな気持ちでいたことなどすっかり忘れていた、昭和55年に慶應義塾大学に就職し、その6月に三田の図書館（現三田メディアセンター）の収書課に配属となつた。

その頃の三田の図書館といえば、貸出のやり方などは小学校のそれとあまり変わらなかった。まして、図書館トータルシステムだインターネットだと言って仕事をしている今のメディアセンターからは、もはや想像もつかない過去となってしまっている。

というわけで、その当時、雑誌係だった私が愛用していた今や知る人も少ないカードファイリングシステムをご紹介しよう。

それは、商品名を「レボファイル」といい、ちょうど水車の羽根の中に、チェックインカードを放射状に詰め込んだ形態になっている。（挿図参照）

ABC順にファイルしたカードの入っている水車の羽根を電動で回し、上部の見えている部分に見たところを動かして止め、カードを抜き出すという代物だ。（挿絵参照）

しかし、増えづける雑誌のタイトル数にカードは年々いっぱいになり、抜き出しにくくなっていたこと、抜き出したカードを戻す場所を間違えたら、次回は探すのに一苦労等々……この「レボファイル」1台では限界が近づいていた。

と思っていた矢先、新図書館が完成し、私はその「レボファイル」と2年で別れを告げることになっ

た。収書課は分散して、私は総合資料室で仕事をする事になったが、次に私の前に現れたのは、今も使われている「カーデックス」だった。

縦長のスチールの箱に、引き出し式の薄いケースが十数段收まり、ひとつの引き出しに十数枚のカードがファイルされている。カードは抜き出さなくて記入できるし、戻す場所が分からなくなることもなかった。但し、あわててカウンターに出ようとした私のおNEWのスカートが、ちょうど出ていた「カーデックス」の引き出しのかどに引っ掛かり、見事にかぎ裂きにされた嫌な思い出がある。

昭和63年6月に、医学情報センター（現医学メディアセンター）に異動して、またもや雑誌係になった私を待っていたのは、なんと数年前に別れを告げた「レボファイル」だった。

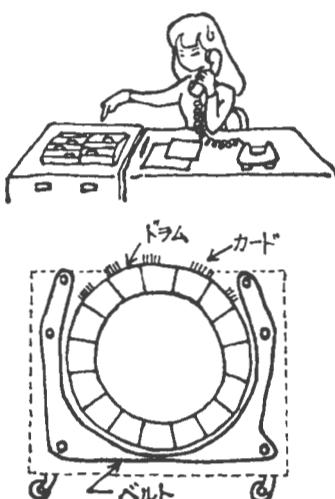
なぜかというと、三田の図書館でお払い箱になっていたのを、医学情報センターが引き取っていたのだった。先回りして待っていたかと思うと、ちょっと情も湧いたが、またこれをぐるぐる回すのかと、いささかげんなりもした。そして月日は経ち……。

現在、私の机の回りは、そのころ想像でしかなかった様相に変わった。ぐるぐる回す重たい鉄の塊も、スカートを引き裂く鋭利な引き出しも無い。いくら詰め込んでも溢れる事のない（？）容量

と、順番など気にせず出し入れできる機能、たとえ目と肩が疲れようとも、素晴らしいシステム「KOSMOS」の端末がある。いち早く稼働に乗り出した医学メディアセンターの雑誌係としては、もう夢中で「KOSMOS」と格闘した。

「KOSMOS」稼働から約3年。世の中の情報通信技術は刻々と進んでいるのに、図書館はちょっと立ち遅れている気がする。そうこう言ってるうちに、電子ジャーナルが利用者の端末に映し出される日も近いと、何かで読んだりすると、毎日郵送される雑誌の封を開けている自分に、少々の不安を感じながら、まだまだ目の前のハエしか追えない私は、今も雑誌係なのだった。

（医学メディアセンター）



日吉の情報処理教育

やま もと よし かず
山 本 喜 一

(情報処理教育室学習指導主任)
(理工学部助教授)

慶應義塾における情報処理教育全体の中でも、大学新入生に対する日吉での情報処理教育は、学生数が最も多く、専門課程に進学してからのコンピュータ利用を考えると極めて重要な位置を占めていると考えられます。本稿では、昭和40年代からの日吉の情報処理教育から現在までを振り返り、今後の在り方について私見を述べたいと思います。

1. 情報科学研究所の時代

情報科学研究所は、昭和45年の設立以来一貫して全学部の学生を対象とした設置講座を開設し、多くの学生を教育してきました。当時としては、文科系の学生までも含めた全学生に対する情報処理教育を行なっている大学は他になく、プログラムやデータのパンチカードを作り、大型コンピュータを一括処理で使うという、今から見れば考えられないほど不便な環境でしたが、他大学から見れば先端的な教育を行なっていました。

大型コンピュータによる一括処理から、カード読み取り装置と印刷装置をロビーに設置して学生に開放したカフェテリア方式を経て、端末を使った時分割処理に変わり、パソコンが導入されるに至って、情報処理教育の意味が大きく変わってきました。それ以前の情報処理では、コンピュータはまだまだ高価で、コンピュータを使うこと自体が特殊な技能とみなされていました。極端にいえば、自分の仕事をコンピュータに処理させるためにはまずプログラムを作らねばならず、プログラミングの知識が不可欠でした。パソコンが広まるにつれて、応用プログラムとよぶ業務に特化したソフトウェアが使われるようになり、いわゆる事務処理の分野では適切な応用プログラムによって、自分でプログラムを作る必要がほとんどなく

なってきました。それにともなって、情報科学研究所ではプログラミングの教育ばかりでなく、より広い範囲の学生を対象としたコンピュータリテラシー（コンピュータを使った読書き、算盤）の教育へと対象を拡大してきました。

従来のプログラミング教育には、コンピュータの仕組について学生によく理解させる、プログラムを作るためにアルゴリズムを理解し論理的に考えさせる、という大きな長所がありますが、その反面、次のような欠点も指摘されてきました。

- ・初步的なアルゴリズムしか教えられない。論理的な思考方法に慣れていない学生に、複雑なアルゴリズムを理解させるのは極めて難しい。
- ・プログラム言語の教育が大変である。自分でプログラムを作らないと、言語の文法などの細かな事柄は決して覚えられない。ところが設備が十分でなく学生がコンピュータを自由に使えない。
- ・実際の役に立つプログラムを作るには、アルゴリズム、プログラム言語とともにかなり込んだ所まで教えなければならないが、プログラムが大きくなりレポートにしても学生の負担が大きすぎる。したがって、教科書の例題程度の小規模な問題を実習するのが精一杯で、学生に達成感を持たせることが難しい。
- ・学生が講義時間外の実習のときに質問したり、細かな事を教えてもらう TA (Teaching Assistant) を十分に用意することができない。

2. 情報処理教育室

情報処理教育室は、平成元年4月にそれ以前の情報科学研究所における情報処理教育の部分を引き継ぎ、義塾の情報処理教育を全般的に考え、実施することを目的として設立されました。それにともなって日吉、三田における情報処理教育がここに移管されました。当初は情報科学研究所の設置講座をそのまま継続する形でしたが、平成3年度からは経済学部、平成5年度からは商学部、法学部それぞれの情報処理教育の入門部分を併せて担当することになりました。設置講座だけを開設

していたときには、学生は受講料を払い込んで受講するわけですから、それなりに学びとるという目的意識がはっきりしていました。特にプログラミングについて知りたいとか、自分で目的を持ってプログラムを作るためにアルゴリズムやプログラム言語を知りたいというような、はっきりした目標を持った学生が多かったように思えます。経済学部、商学部、法学部と学部の選択必修科目、あるいは選択科目として情報処理教育を行なうに際し、各学部の学習指導主任やカリキュラム検討委員の諸先生と検討を重ね、その結果として現在のカリキュラムを作り上げました。

平成6年度には、次の設置講座を開講しました。なお、講座名の最後の数字はクラス数を示します。

1. 日 吉

- (a) 情報処理概論 I (C) 2
- (b) 情報処理概論 II (COBOL)
- (c) 情報処理概論 III (FORTRAN) 2
- (d) 情報処理概論 IV (PASCAL)
- (e) 情報処理概論 V (パソコンによる
情報整理学) 2
- (f) 情報処理応用 I (コンピュータ
グラフィックス)
- (g) 情報科学 I (人工知能)

2. 三 田

- (a) 情報処理概論 II (COBOL)
- (b) 情報処理概論 V (パソコンによる
情報整理学) 3
- (c) 情報処理応用 II (統計解析)
- (d) 情報処理システム I (金融情報システム)
- (e) 情報処理システム II (ビジネスシステム
とネットワーク)

3. 経済学部講義

- (a) 情報処理入門 (パソコンによる
情報整理学) 10
- (b) 情報処理 I (C) 2
(FORTRAN)

4. 商学部講義

- (a) 情報処理 I 6
- (b) 情報処理 II (C) 2
(FORTRAN)

5. 法学部講義

- (a) 情報処理 I 2
- (b) 情報処理 II 2
- (c) 情報処理 III (C)
- (d) 情報処理 IV (C)
- (e) 統計情報処理 I (三田)
- (f) 統計情報処理 II (三田)

平成6年度については、設置講座の受講生は723名、経済学部、法学部、商学部の担当講義の受講生は1663名に達しています。

情報処理教育室は、専任教員がおらず室長をはじめとして主に理工学部教員および経済学部教員を兼任講師として迎え講義を担当して頂いています。塾内の兼任講師だけでは上に述べた講義をすべて行なうことはできないので、他大学教員あるいは企業の方々にも非常勤講師をお願いしています。

3. 教養課程での情報処理教育

日吉での1年あるいは2年間の学生生活の間に、情報処理に関する基本的な事柄を教育し、専門課程に進学してからの研究に役立てるとともに、将来社会に出てからコンピュータを使う際に役立つ知識を身に付けてもらうことが、日吉での情報処理教育の目的になっています。専門課程でのコンピュータの利用形態は学部ごとに大きく異なり、学部が同じであっても専門ごとにも異なっています。各学部から委員を出して頂いている情報処理教育室運営委員会での議論、各学部のカリキュラム検討委員会との打合せなどを通して、コンピュータリテラシー教育とその直後のプログラミング入門教育を情報処理教育室を中心に進めるようになっています。もちろん、学部ごとにそれぞれの事情があり、画一的な教育ではカリキュラムの主旨に必ずしも合わないことから、できる限り学部の希望を満足できるよう努力しています。

各学部とも1年生にはいわゆるコンピュータリテラシー教育を行なうことになり、各学部担当者、講義担当者と会議を重ね、現在の情報処理概論（パソコンによる情報整理学）のカリキュラムを決定しました。コンピュータリテラシーという言葉は、極めて広い意味に使われており、それぞ

れの大学や学部、学科によってその教育内容が異なっています。現在、情報処理教育室では、コンピュータを使った読み書きばかりでなく、コンピュータの動く仕組みやソフトウェアの仕組み、さまざまな情報を自分の目的のために収集し処理するための基礎概念までを含めてコンピュータリテラシーという用語を使っています。

現在の情報処理概論V、情報処理入門（経済学部）、情報処理I（商学部）、情報処理I・II（法学部）の講義内容は、次のようにになっています。

- ・コンピュータの仕組み
- ・日本語ワープロ
- ・オペレーティングシステム
- ・英文ワープロ
- ・表計算
- ・グラフ
- ・データベース
- ・統計計算とプログラミング

コンピュータを道具として使いこなすためには、いわゆる三種の神器とよばれる、ワープロ、表計算、データベースが使えば一通りのことはできるようになります。けれども、大学教育として道具の使い方を教育するだけでは専門学校での教育となんら変わることろがありません。コンピュータのソフトウェアには様々な種類があり、ワープロといっても数え上げればおそらく数十はあるでしょう。実際の教育にはその中の一つを取りあげ説明することになりますが、特定のソフトウェアの使い方に習熟してもほとんど意味がありません。昨今のハードウェア、ソフトウェアの急速な進歩の様子から、現在習ったことが2、3年後には陳腐化してしまう可能性が大きいのです。コンピュータのハードウェアの仕組みを理解し、ソフトウェアでの処理手順を漠然とではあっても理解していれば、パソコンの機種が替ったりソフトウェアが替っても、今までの知識を応用し、足りない部分はマニュアルを読むなどの手段で補うことができます。

上に述べたように、概念としてのコンピュータ、ハードウェア、ソフトウェアを理解させることが第一の目的であり、そのための手段として応用プログラムを使うべきである、と筆者は考えて

います。現在のメディアセンターの設備だけではまだまだ不十分ですが、現状の設備を利用して、できる限りこの目的を達成するよう講義担当の先生方にお願いしています。

一方、コンピュータリテラシーの教育を終った学生には、上級コースとしてプログラミングの入門教育を行っています。C, Fortran, Pascal などのプログラム言語を使って、アルゴリズムの基礎とプログラミングを教育しています。このレベルの教育の目的は、専門課程に進学した際に自分で簡単なプログラムが作れ、研究に利用するための基礎を作ることです。したがって、学部設置の講義ではできる限り各学部の要望に沿った内容となるよう努力しています。

4. 将来の情報処理教育

コンピュータに関連した技術革新の速度は、専門家の予測よりも早く、コンピュータ本体の価格低下も予想をはるかに上回っています。現在の学生が個人でパソコンを所有している割合は、まだ30%程度と思われますが、ごく近い将来に7,80%の学生がパソコンを所有するようになると考えられます。さらに、従来の文字を主体としたコンピュータから、画像、映像、音声までも扱えるいわゆるマルチメディアパソコンが主流になってきています。

もう一つの重要な技術革新がネットワークであり、藤沢キャンパスで既に行われているように全学をネットワークで結び、学生、教職員が自由に利用する時代がすぐそこへ来ています。このような時代の変化に対応して、コンピュータリテラシー教育もその内容を変化させていく必要があります。ネットワークは学内にとどまらず全世界に接続され、インターネットの一員になることができますから、それに対応した利用方法の教育も必要になります。

ネットワークに関連した事柄として、学生からの要望の最も多いものに電子メールがあります。御存知の方が多いと思いますが、電子的な郵便システムと考えれば理解しやすいと思います。また、電子掲示板として利用されているニュースシステムも大いに利用されると思います。これらの

利用形態では、パソコンを個人として利用するだけでなく、全世界を対象として社会に窓を開くことになります。したがって、利用方法を教育する場合にも、動作原理の理解に基づく正しい使い方をきちんと教育する必要があります。現在のネットワークは、パケット交換による通信を行っているので、宛先を間違えて迷子のパケットを送り出したり、ネットワークの混雑時に大量のパケットを送ったりという、誤った使い方をすることによって本人が困るだけでなく、ネットワークに接続している極めて多くの人々に迷惑を掛けることをはっきりと自覚させねばなりません。

単に利用方法ばかりでなく、利用する上での礼儀作法も重要なことがらです。電子メールは基本的には一対一のコミュニケーションですが、ニュースでは不特定多数が読者になります。自分が投稿した記事が投げかける波紋についてきちんと自覚する必要があります。

インターネットに接続することによって、塾内のデータベースはもちろんのこと、国内、国外の大量のデータベースにアクセスすることができます。学術論文を始めとする各種文献、統計データ、気象衛星からの画像データなどほとんどすべての分野にまたがるマルチメディアデータベースが提供されているので、自分に必要な情報を探し出しアクセスする方法を教育する必要があります。日吉メディアセンターで現在提供しているデータベースアクセスに比べればはるかに簡単にできますが、やはりネットワークを介したパケット通信によってデータを取り出すことを理解しておかねばなりません。また、元のデータの知的所有権や著作権に対する理解と、法律的に間違ったことをしないようにするための教育も必要になります。すなわち、ネットワークに関連してその動作原理を理解させ、利用方法を教育し、利用に際しての倫理・道徳をきちんと教育する必要があります。

次に重要な問題が設備です。情報処理教育室はハードウェアに関する設備はメディアセンターの設備を利用することになっていますが、現在の設備ではこれ以上の講座を開設することは不可能になっています。設置講座、学部講義ともに、パソ

コン室の空きがないために時間割編制に自由度が全くない状態になっています。パソコンの台数を少なくとも倍増し、最低2教室は必要になります。これらのパソコンがすべて、ネットワークに接続することはもちろんです。商学部の情報処理I（半期、2限連続）を除き、講義時間内の実習はほとんど不可能なので、学生の実習のための設備も必要になります。

従来のパソコン室のような机上型のパソコンを設置した教室とは別に、学生が個人所有している携帯型パソコンを教室に持ち込み、講義に利用することも考える必要があります。このような教室には、電源とネットワーク接続のための情報コンセントが不可欠となります。

近い将来、ネットワークに接続したパソコンを使ったコンピュータリテラシー教育でどんな応用ソフトウェアを使うかについて、現在の情報処理入門レベルの講義を担当されている先生方にお集まり頂き、使うべきソフトウェアについての議論をして頂きました。基本的には、文書処理（ワープロ）、表計算、ネットワーク、データベースなどですが、プレゼンテーション、アイディアプロセッサなども候補に上がっています。現在はそれぞれの分野でどのソフトウェアを使うべきかを検討しています。



情報処理教育

萩野達也
(環境情報学部助教授)

1. はじめに

湘南藤沢キャンパス(SFC)の環境情報学部と総合政策学部では、1990年開設から人工言語として情報処理教育を全入学生に対して行ってきた。ここでは、過去4年間にわたるSFCにおける情報処理教育についてふりかえってみよう。

2. 開設前

SFCが開設される1年以上前から情報処理教育については議論を行っていた。特に、アメリカの有名大学を視察したりして、そのキャンパスネットワークや情報処理教育がどのようになっているかなどを調査したりもした。この視察に私も参加したが、MITにおけるAthena Projectによる教育へのワークステーションの利用や、CMUにおけるAndrewシステムによる教育について深く感銘したことを覚えている。

調査結果や議論を通してSFCでは従来までの大型計算機やPCをつかった情報処理教育ではなく、ネットワークにつながったUNIXワークステーションを使った情報処理教育を行うことになった。しかしながら、SFCのような規模におけるワークステーションを用いた情報処理教育はこれまでに例がなく、準備をするほうでも、なにを準備すればよいのか見当がつかない状態であった。しかたがないので、とりあえず、その当時コンピュータを専門にしている人達が普段使っている環境をSFCの全学生に提供することになった。これは少し無謀にも思われたが、新しいものを考え、それが実際に使えないようなものかもしれないよりは、すでに専門家が使って、良いと分かっているものを実現するほうが確実であると判断した。

情報処理教育の内容では、プログラミング言語として教育用言語であるPASCALと、それとは

まったく異なったLISPを教育してはどうかというようなことが議論になったが、それ以上の内容については、従来までのコンピュータ系の学科における内容を考えただけだった。まだSFC開設前であり、どのような学生が入学し、どのような学生を育てるのかがあまりはっきりとはしていなかった。

3. 1990年度開設

開設時には今のメディアセンターはなく、ワークステーションは4つの特別教室で使えるだけであった。初年度最初の情報処理教育のカリキュラムとしては、情報処理言語Iaを全入学生が履修したが、これは、大人数の講義とクラス分けした特別教室における自習からなっていた。講義では、コンピュータの仕組や情報処理に関する一般の概念を教え、自習ではSFCの新しい計算機環境の使い方について教えた。自習の内容については、ログインの仕方、ウインドウ操作、emacsの使い方、電子メール・電子ニュースの使い方、LaTeXの使い方などであり、現在とほとんど変わらないものであった。

毎回の自習ではA4両面印刷の説明の紙を配り、それを説明しながら進めて行ったが、最初のことでもあり、教える内容の決定やそのための計算機の環境の整備は、教える直前になってようやくできるといった状態であった。たとえば、今ではいつでも電子メールや電子ニュースは使うことができるが、初年度は電子メールを教えるようになって初めて電子メールの環境もできあがり、電子ニュースを教える前の夜によく電子ニュースが使えるようになったりした。まさに綱渡り状態であった。また、ワークステーションを使ったこれだけの規模での教育は初めてだったため、負荷の予測がたたず、電子メールをいっせいに躰の人に送らせたりすると、メールサーバが忙しくなり、隣の人に届くのに15分以上かかることもあった。授業において「いっせいに…しましょう」という言葉は禁句であることが教訓として分った。

このように春学期は、新しい環境にヒヤヒヤしながら過ぎて行った。秋学期は、情報処理言語Ibを全員必修でプログラミングを教えることと

なり、開設前の予定通り PASCAL を使って教育を行った。春学期と同様に大人数による講義と小人数による特別教室における自習から構成されていた。講義では PASCAL によるプログラミングやアルゴリズムに関する概念を教え、自習ではそれを実際にやってみることにより理解を深めさせようとした。春学期には教科書のようなものはなかったが、秋学期には PASCAL ガイドが完成し、ほぼそれにしたがって自習を進めて行った。

初年度の PASCAL の教育にはいろいろな問題があった。その一つは、PASCAL の処理系があまり良くなかったことである。PASCAL は教育用言語としてすぐれており、他大学においても PASCAL を使って教育を行っているところもあったが、これらはすべて大型計算機などを使っており、UNIX ワークステーションを使ったものではなかった。UNIX 上の PASCAL 処理系が不親切なものであり、初心者には使いづらいものであった。また、カリキュラムの内容においても、コンピュータ関係の学科向きの内容であり、10進数を2進数に変換するなど、SFC の学生には少し取っ付きにくいものであった。しかしながら、学期の終りにはミニプロジェクトを行い、PASCAL 環境があまり良くないものであったにもかかわらず、かなりの作品を作ってくれた。

4. 1991年度

SFC 開設2年目となり、2年生に対する情報処理教育も始まった。当初の予定では2年生に対しては情報処理言語Ⅱの1科目だけであったが、SFC において単なる従来までの理系のコンピュータ利用だけでなく社会科学など幅広いコンピュータの利用が考えられたため、情報処理言語Ⅱを細かく分けることになった。Scheme を用いてプログラミングをもっと本格的に勉強する P コース、システムプログラミングを勉強する S コース、統計処理を勉強する T コース、ゲーム作成を軸としてプログラミングを勉強する Z コース、3次元グラフィックスを勉強する G コース、アート的な要素を入れた A コース、コンピュータミュージックの M コースが開講された。コンピュータ関係者からは P コースなどに人気が出

ることを期待したが、実際には T コースや G コースなどが人気であった。T コースでは S 言語を使った統計処理を心理学などのいろいろな例を用いて教え、社会科学系の必須の科目になった。G コースでは CAD ソフトをつかって3次元の物体をデザインすることを学び、熱心な学生は夜を徹してデザインをしていたようである。このようにいろいろなコースに学生の人気も高かったが、情報処理言語Ⅱは1つの科目であったため1つ以外はすべて自由科目となってしまった。

1年生に対する情報処理言語 Ia は、講義および自習とも前年度とほぼ同じ内容であった。違った点としては、SFC-CNS ローカルガイドが完成したため、それを自習の時の教科書あるいは参考書として用いたことである。ローカルガイドは SFC の環境についての素晴らしい解説書であり、SFC のみならず企業などでも読まれ、隠れたベストセラーとなっている。SFC 訪問の記念にお土産として買っていく人も多数いると聞いている。

もう1つ違ったのはタイプ練習ソフトの“yumiko 先生”が登場したことである。前年度のタイプ練習ソフトが少しシステム的に問題があり、急遽作成したソフトであった。タイプ専門家からは、あまり良い評価をもらっていないが、点数が付くため、ゲーム感覚のソフトとして学生たちに人気が出た。

秋学期の情報処理言語 Ib としては、前年度の反省から、PASCAL を教えるのではなく、C 言語を教えることになった。C 言語は UNIX のシステム記述言語であり、あまり初心者向けではないといわれていたが、どのワークステーションでも同じように利用でき、いろいろなライブラリやウインドウを使ったプログラミング導入教育を行うことにした。

C 言語になり PASCAL のような処理系の問題はなくなったが、カリキュラムの内容が、カーニハーン&リッチャーの教科書に準拠したものであり、かなり細かな文法的内容や、構造体やポインタなどの難しい概念もあり、学生たちはかなり消化不良をおこしたようである。SFC では授業調査を各授業の最終回に行っているが、いつも情報処理

言語 I b のポイントの低さが教員会議などで話題となつた。最終的には、ミニプロジェクトなどでもみんな興味を持つが、そこに至るまでが大変なようである。

5. 1992 年度

情報処理言語 I a の自習の内容についてはほぼ固まりつつあった。SFC のキャンパスライフにとって CNS は必須のものであり、その使い方をマスターさせるのが情報処理言語 I a である。

1992年の主な変更点は、オンラインノートの登場である。これまで I a の自習ではプリントを配っていたが、プリントを用意するには手間がかかるだけでなく、いつもプリントを持ち歩かなければならぬなどの問題もあるため、プリントの内容をオンライン化し iplnote としていつでもどこからでも読めるようにした。これにより、学生は予習をしたり、自分のペースで勉強することができるようになった。

情報処理言語 I b の自習でも同じように教える内容をオンライン化し、iplohp により見ることができるようにした。iplnote がテキストベースのものであったの対して、iplohp はウインドウベースであり、マウスを使うことによりプログラムの模擬実行を行うこともできる。情報処理言語 I b の教える内容も、目で見てプログラムの実行がわかるタールグラフィックスによりプログラミングへの導入を行い、なるべく身近な話題を例題として選び、ポインタなどの高度な内容については省略することにした。また、大人数の講義を廃止し、すべて小人数のクラスで講義と自習を連動して行うこととした。これらの変更により、授業評価をプラスに移行させることに成功した。

6. 1993 年度

1993 年度の情報処理言語 I a および I b は、1992 年度とほとんど同じ内容で進められた。情報処理言語 II に関しては、表計算などについても勉強できる D コースと、論理プログラミング言語 PROLOG の勉強できる L コースと、I b で扱うことのできなかつたプログラムのデータ構造を中心

に勉強する E コースが新設された。

7. 1994 年度

開設 4 年間が終り、カリキュラムの変更が可能になった。これまで、情報処理言語 I a は週 1 コマの講義と 2 コマの自習で 2 単位であったが、これを講義 2 単位、自習 2 単位に改めた。また名前も、情報処理言語から情報処理になった。これまでの I a の講義は I s として分離した。

これまでの I a の講義では、一人の先生が情報処理概論について講義を行っていたが、なかなか学生の興味を引き付けておくのが難しく、苦労をしていたため、I s ではオムニバス形式を採用した。毎回ゲスト講師を招き、コンピュータを利用した最先端の研究内容について説明してもらい、コンピュータの可能性について学生たちに考えてもらった。

情報処理 I b では、小人数クラスで行なうことには変わらないが、これまで 2 コマを週の別々の時間に行なっていたものを 2 コマ連続で行なうこととした。

情報処理 II においても、これまで 1 つしか卒業単位に数えられなかったが 3 つまで卒業単位に数えられるようになった。また、新しいコースとして C コースが追加された。上級者向けの C 言語プログラミングコースである。I b で取り扱えなかつたポインタなどの内容を取り扱っている。

8. おわりに

情報処理教育の中でも特に初心者に対する教育について過去 4 年間どのように取り組んで来たかを説明した。ここで説明した以外にも、非常勤の先生方のいろいろな工夫や努力、大学院生の TA および学部学生の SA 達の活躍などもある。また、これから将来、小中高で授業としてコンピュータの勉強をしてくる学生も入学してくるかもしれない。そのような場合の情報処理教育についても考えていかなくてはならないかも知れない。今後も情報処理教育に関して検討を続けていく必要がある。

[三田メディアセンター]

よし さわ あきこ
 吉 沢 亜季子
 (湘南藤沢メディアセンター)

1. はじめに

新館がオープンしてから、早12年が経ち、現在に至るまで「館」の中は様々な変化を遂げた。メディアや機器の普及により、利用者の情報利用の形態も少なからず変化をせざるをえない状況にある。私たち図書館員がこの変化についていくことは勿論のことだが、利用者がそうした変化に対応できるような仕組みをつくるのもまた、私たちの役割である。その為には、オリエンテーションも従来と同じ内容で行うわけにもいかず、常に新しい情報を盛り込みながら、企画してきた。ここでは、そうしてこれまで行ってきた様々な試みを紹介することにする。

2. 三田の利用者層を考慮したプログラム

どこの大学でも春休みが明け4月になると、キャンパスは急に賑やかになる。とはいっても、三田に来る学生は新入生ではなく、日吉で一般教養課程を終え、これから専門課程に入る学生たちである。学部の構成は、文学・経済・法律・商学部で、いずれも大学院まである。そして、新しく三田に来た学生を対象に春のライブラリー・オリエンテーションが始まる。参加者は学部生のみではなく、中には大学院生の姿もみられる。さて、これを企画・実行するのは、各担当から数人ずつ選ばれて構成された「利用案内検討会」のメンバーである。実施の方法は、ビデオ上映と館内ツアーの二本立てで、正味1時間のコースである。今年度は、4・5月の2ヶ月間で16回行った。実施にあたっては、参加者にどれだけの知識をつけてもらうか、という目標を明確にし、それが達成できるプログラムを組んでいる。

まず、ここでは、どの程度のレベルでオリエン

テーションを行っているか紹介するために、利用者教育を次の3段階に分けて考えてみる。

1. User Awareness
2. Orientation
3. Bibliographic Instruction

(渋川雅俊「大学図書館利用者教育研究序説」付録「テキサス大学図書館利用教育総合計画」『Library and Information Science』No. 16 1978. p. 242-251 より)

User Awareness で、利用者に図書館の存在を認識させ、Orientation で施設・サービスに慣れ基本的な使い方を知らせ、Bibliographic Instruction で個々のレベルでの文献検索利用技術を習得させるということになる。三田の学生について考えると、前述の通り、専門課程に入る学生たちであるので、いわゆる User Awareness では満足しない。そこで、この段階は日吉の図書館に任せ、三田では、Orientation のレベルから始めている。これが「春のライブラリー・オリエンテーション」である。因みに、Bibliographic Instruction については、レファレンスが担当し、ゼミ単位で予約を受け付け、主題にあった専門的な検索指導をするコースを「ステップアップ・ツアー」という名称で行っている。

3. 実行にあたっての様々な試み

3.1 施設案内中心から OPAC 検索中心のツアーヘ

オリエンテーションに自動的に参加する学生は、これから図書館を意欲的に使いこなそうという意志を持っている。その為、参加することにより直ちに利用上の改善ができる事を望んでいる。しかし当初、図書館側としては、参加者は図書館に初めて足を踏み入れる学生であるので、なるべく沢山の施設・サービスを知ってもらおうと、館内を隈なく歩き回り、内容としては広く浅いツアーになっていた。時間の制約もあり、文献の探し方に関しては、OPAC の検索方法を実演する暇も無く、口頭で紹介するに留めていたという状況であった。しかし、アンケート調査では

「OPAC の使い方が分からない」「簡単すぎる」といった内容の意見が多くみられ、参加者はこのような形態のツアーに満足していないという状況が伺い知れた。そこで、これらの意見を踏まえ、コースを大幅に短縮し、施設案内中心のツアーから、実際に検索例を示し実演してみせる OPAC 検索中心のツアーにした。勿論、文献の検索手段は OPAC だけではないので、その他カード目録や基本的な参考図書、雑誌論文の探し方にも触れている。

3.2 ビデオ『図書館の達人』の活用

昨年度から、オリエンテーションの一部として、ビデオ『図書館の達人』第1巻の上映を始めた。以前は、三田でオリジナル制作したスライドの上映を行っていたが、毎年改定箇所があり、その度ごとにフィルムの差し替えと、アナウンスを吹き込み直さなければならなく、かなりの時間と手間をかけていた。その割には学生の反応をみていると、眠っている人も見受けられ、決して効果的とはいえないかった。また、アンケート調査では「早く分からぬ」「画像がぼけている」等の指摘もあり、素人による制作の限界を感じさせられ、やはりプロが制作したビデオを活用すること

となった。一方、図書館側では、ビデオではオリジナルな事情まで説明できないのでは、という意見もあった。そこで、ビデオとツアーを相互補完的なものとして考え、ビデオで大まかな図書館の利用法を理解してもらい、三田の図書館ではどうかという部分の説明をツアーに組むような形態のオリエンテーションとした。その結果、前述のような「分かりにくい」というような意見はみられなくなり、「面白い」「役に立つ」等好意的な意見が大半になった(図1)。このような既存メディアの活用は、より効果的な演出となっているようである。

3.3 広報戦略

3.3.1 視覚的アピール

広報活動に力を入れていることは、三田のオリエンテーションの特徴のひとつでもある。オリエンテーションを行う4月・5月といえば、新学期が始まればかりで教務関係の案内等、様々なお知らせで掲示板も賑やかになる。そこにワープロで作った地味なちらしを貼っても、訴求力に乏しく目立たない。そこで、1991年から学生の目を引くようなALAのポスターを使用し、その結果、前年度の2倍以上の参加者を記録した(図2)。

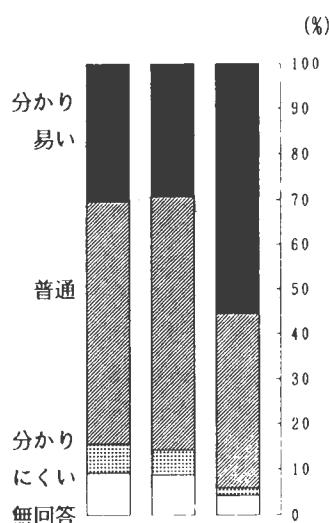


図1 アンケート「ビデオについて」

参加者数(人)

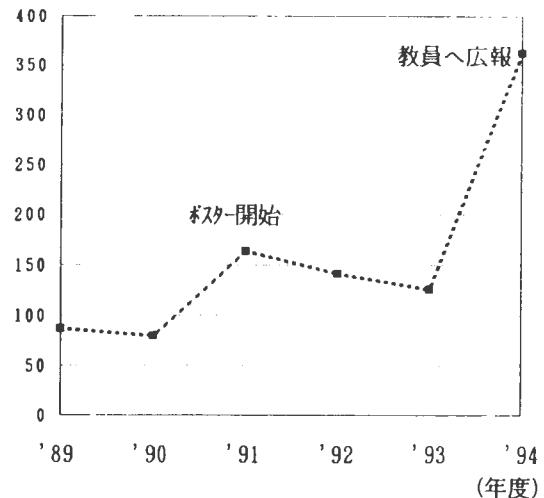


図2 参加者数推移

統いて1993年からは私立大学図書館協会企画広報研究分科会の共同制作ポスターを使用し(写真),一定の成果を挙げ続けている。ポスターは、図書館内だけでなく、館外にも数枚掲示するので、学生は必ず目にすることになる。こうした人目を引く魅力的なポスターを貼ることは、単なる「お知らせ」の機能だけでなく、「図書館のイメージアップ」にもつながっているようにも思われる。



三田利用者教育

3.3.2 教員への広報

1991年からのポスターによる宣伝効果でここ数年の参加者も定着してきた。今年度は、更に新しい方法として、教員との協力により、さらに参加者を増やすことはできないかと考えた。その手始めとして、教員のメールボックスの前にチラシを積んで置くという簡単な方法をとった。その結果、今年度の参加者数をみると、前年度の更に2倍を記録している(図2)。アンケート調査によると、その理由は、教員の協力に他ならないことが分かる(図3)。レファレンス担当によって行われる、ゼミ単位のツアーを企画していることを前述したが、ゼミの授業をこのツアーにあてる例も多く、年々ゼミ単位の参加が増えている。教員が学生の図書館利用に興味を示すことは、非常に喜ばしいことであるが、参加者の図書館利用をみてみると、Orientationから始めなければとうてい理解してもらえないような例も多い。図書館

側としては、前述の3段階を意識して、利用案内検討会の担当する、初級コースともいえる「オリエンテーション」と、中級コースともいえる「ステップアップツアーア」を分けているが、教員や参加者側から見ると、その違いが明確になっていなかったのではないだろうか。今後はこうした違いを明確に広報する手段を考え、この段階的なオリエンテーションの仕組みを、より効果的に使ってもらえるよう努めなければならないであろう。

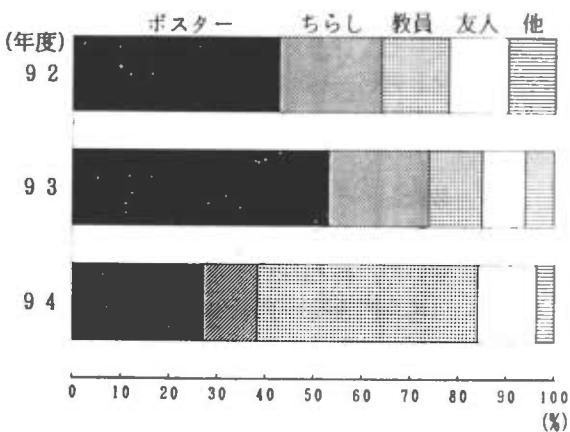


図3 アンケート「何で知りましたか」

4. 終わりに

ここでは、ここ数年の、三田における春のライブラリー・オリエンテーションについて紹介してきた。ここで改めて感じるのは、私たち図書館員は、オリエンテーションを図書館の業務の付録的なものではなく、サービスの一部と自覚して行なわなければならないということである。私事であるが、私は、昨年、三田の閲覧担当から湘南藤沢の目録担当へ異動した。業務内容は利用者と接する仕事から、本と接する仕事へと変わった。私の手元へ様々な本が来ては流れゆく。この本が書庫に並ぶとき、つくづく思う。「一人でも多くの人に見てもらえますように」と。オリエンテーションは、利用する人と図書館の資料の仲人の役割を果たすといえる。これからも、沢山の人と資料が結びつくよう、工夫をしていってもらいたい。

[日吉メディアセンター]

静 谷 裕美子
(日吉メディアセンター)

1. はじめに

日吉キャンパスは文・経・法・商・医・理工各学部の教養過程の1、2年生が集まるキャンパスである。従って、日吉メディアセンターは、これらの学生の教育のための図書館という意味合いを強くもつ。とともに、日吉所属の教員のための研究図書館としての機能も果たしている。

利用者教育という観点でいえば、その対象は前者の学生ということになる。学生たちに、図書館の機能、使い方、参考図書の利用法等を身につけてもらい、各専門過程に進んだ時に能動的に図書館、資料を使いこなせるよう橋渡しをするのが日吉メディアセンターの果たすべき大きな役割だと思われる。

そこで、まず図書館に足を運び、機能を知り、図書館を使いこなすための技術を身につけるということを、利用者教育の第一の目標としている。次の目標が、各種二次資料を使いこなした文献探索等ができるようにということである。

では、実際にどのようなメニューを用意しているかを1993年度を例に取りご紹介していきたい。年間を通して以下に挙げるようなプログラムを組んでいる。

ライブラリー・ツアー
ライブラリー・アドヴェンチャー
OPAC セミナー
図書の探し方セミナー
雑誌・新聞の探し方セミナー
CD-ROM、オンライン・データベースセミナー
この他、通信夏期スクーリング生のためにライブラリー・ツアー、資料の探し方セミナーを実施している。

これら一連のセミナーは、1年を1サイクルと

してとらえ、Library Orientation から漸次、Bibliographic Instruction (以下 B.I.) に進んでいくという構成となっている。

2. 利用者教育年間プログラム

2.1. ライブラリー・ツアー

新入生を対象として4月の1ヶ月間をオリエンテーション期間に充て、その間、ライブラリー・ツアー、展示、映画上映を行っている。ツアーの形式は AV ホールでのビデオ上映と館内ツアーを組み合わせたもので、所要1時間で設定している。

参考までに、展示、映画の企画についても記しておくこととする。

展示：ここ数年“福澤諭吉を味わう”をテーマに、三田メディアセンターの協力で「学問のすすめ」の初版本等を展示

映画上映：毎年テーマを設定

1993年度は“映画を愛する人”をテーマに「ニュー・シネマ・バラダイス」他3本を上映

実施回数、参加者数等を表1、2に示す。

表1 新入生のためのオリエンテーション

企画名	実施回数	参加者数	1回平均
ライブラリー・ツアー	14回	229名	16.4名
映画上映	4回	126名	31.5名

表2 通信教育生のためのオリエンテーション

企画名	実施回数	参加者数	1回平均
ライブラリー・ツアー	11回	427名	38.8名
資料の探し方セミナー	2回	143名	71.5名
映画上映	4回	350名	87.5名

2.2. ライブラリー・アドヴェンチャー

数年前から始めた企画で、5・6月に実施して

いる。4月に行ったライブラリー・ツアーがオリエンテーションを目標としているのに対して、このライブラリー・アドヴェンチャーは、B.I. の要素をも加味した、ツアーよりも一步進んだ内容を盛り込んでいる。

目的として次の3点が挙げられる。

- ① 図書・雑誌の目録の基本的な検索方法を理解する
- ② 日吉図書館の資料の書架上の配列を理解する
- ③ ある手がかりから目的とする資料を実際に探すことができる

所要1時間で、以下のような構成になっている。AVホールにて約10分間の説明の後、目録ホールに移り、目録の配置、請求記号の位置やカウンターでの諸手続きの説明等で10分。その後、図書と雑誌を探す事例問題を各人に約30分で解いてもらう。その間、スタッフは特設デスクに待機し、参加者から質問があればアドバイスを与える。最後に、結果についてコメントを加え、解答集を配るというものである。

参加者は、説明を受けた直後に実際に自分で行動し、その際に理解の不十分なところが明確になる。そしてその部分にスタッフからのアドバイスが得られるので、理解の度合いが高い。個人個人にきめ細かい適切な指導ができると自負している。

しかしながら、ライブラリー・アドヴェンチャーという名称が耳慣れないためか、残念なことに参加者が少ない。もっと多くの人に参加してもらうために、PPの方法を工夫する必要があると思われる。

2.3. OPAC セミナー

このセミナーは、OPAC公開に伴い1993年度から新設したもので、5, 6, 10月に実施した。

OPACの特徴、注意事項などの説明後、実際にAVホールのスクリーンにOPACの画面を映し出して、検索手順、検索技術を解説しながらデモンストレーションを行った。

2.4. 図書の探し方セミナー、雑誌・新聞の探し方セミナー

この段階で完全なB.I.に進む。実施時期はともに11月、12月で、所要1時間としている。

これら2つのセミナーでは、資料の探し方の手順を説明し、様々な参考図書を紹介。その主だったものの利用法を解説する。かなり情報量が多く、予め作成する文献リスト等の資料は図書のセミナーがB4版で13枚、雑誌のセミナーがB5版で8枚とA4版で約20枚になる。

2.5. CD-ROM、オンライン・データベースセミナー

このセミナーの意図は、図書、雑誌、新聞の探し方をマスターした次の段階でデータベース検索を利用すると、さらに多角的で有効な検索ができるということを知らせることがある。日吉図書館で利用することのできるデータベースを中心に、端末でのデモンストレーションを交えて紹介している。

表3 1993年度実施セミナー一覧

セミナー名	実施時期	回数
ライブラリー・アドヴェンチャー	5・6月	4回
OPACセミナー	5・6・10月	6回
図書の探し方セミナー	11・12月	2回
雑誌・新聞の探し方セミナー	11・12月	3回
CD-ROM, オンラインデータベースセミナー	11・12月	2回

3. 今後の展望と問題点

日吉メディアセンターでは、数年来、ここに紹介したような流れで利用者教育を行ってきた。しかしながら、近年の急激な変化—OPACの導入、電子媒体の資料の増加等—や、大学設置基準の変更などの諸要因から、抜本的にこのプログラムを見直す時期にきていると思われる。

図書館を使うにあたり、OPACを正しく使いこなせる技術は不可欠である。OPACのデータ

の構造、収録範囲等を、初めの段階できちんと理解していれば、徒に不信感を抱くことなく効率の良い検索ができる。また当然のことながら、OPAC のみならず、目録の引き方、使い方を知っておくことも必要である。

図書館が毎年実施する新入生のためのライブラリー・ツアーは、相当数の新入生の参加があるものの、まだ新入生全体の約 4 %である。また、ツアーを実施するためのスタッフのやり繩りは、カウンター業務もあることから、かなりの負荷がかかっている。

これらのこととを解決するためには、大教室を実施場所として図書館の使い方を紹介する方法も考えられる。その際、目録、OPAC の説明をかなり詳しく行う。OPAC の説明は、画面、キーボードを実際に映し出して具体的に解説する。4 月から 5 月にかけて日程を組み、日吉キャンパスに在籍している間に OPAC をはじめ、基本的な図書館の利用の仕方をマスターできるようにするのである。

ただ、この方法の欠点としては、利用者に義務的に捉えられて説明を聞き流されるおそれがあること、利用者と距離間があること等が挙げられる。

この他、教員からの依頼があると受け付けているクラス単位の B.I. に関しても、継続して前向きに取り組んでいきたい。

4. 終わりに

ソファレンス・デスクに座っていると、極めて初步なことが分からぬで苦労している利用者を目の当たりにする。その時々で応対はするが、どうしてもセミナーのように体系立てた説明をする訳にはいかない。そんな時、図書館の各種セミナーに参加してほしいと切実に感じる。

そのためにも、利用者の声やスタッフからの提案などを採り入れ、試行錯誤を繰り返しながら、より効果的で、学生達を引きつける魅力のあるプログラムを提供していきたいと考えている。

【理工学メディアセンター】

よし かわ ち わ
吉 川 智 江

(理工学メディアセンター課長代理)

1. はじめに

理工学メディアセンター（松下記念図書館）は、理工学部の専門課程がある矢上台に位置している。従って、利用者の核をなすのは、学部に所属する 3、4 年生（1 学年が約 1,000 名）、修士課程の学生（同 500 名）、博士課程の学生（同 70 名）、及び理工系の教職員（約 230 名）である。図書館がこれらの人々を対象に、利用者教育の一環として「説明会」を開催するようになったのは 1982 年であるから、早 10 年以上が経過したことになる。

そもそも当センターの利用者教育は、世界中で今も増え続ける科学技術情報の中から「必要な文献を探し出す」、また「入手する」ということを中心の課題としてきた。即ち、学生に対しては自館の利用案内に留まらず、卒業後も役立つような知識をと当初より心がけてきた。

こうして説明会を始めて 2 年目を迎える頃には、3 年生をターゲットに、館内を一巡しながら図書館の施設、所蔵資料とその探し方、サービスについて概説する「オリエンテーション」、並びに研究室を単位に、それぞれの研究領域に沿った資料の紹介や文献の探し方について主に詳説する「資料利用説明会」という 2 つの形ができ上がった。その後、1988 年からは「オンライン情報検索説明会」が開催されるようになり、最近は CD-ROM のデモンストレーションも加わり、これらが毎年 4 月～6 月にかけて利用者に提供されている。

ところで、前者 2 つの説明会については、6 年程前にかなり詳しく紹介させていただいた¹¹。そこで、今回は主にその後の変遷、今後の課題といったことについて報告させていただく。

2. 「資料利用説明会」のその後

図1は、1983年から今日に至る説明会の参加者の推移を示したものである。白抜きの部分が「資料利用説明会」に当たる。1983年、10研究室 116名であった参加者は、学生数などの影響を受け、多少ジグザグ模様を描きながらも漸次増加傾向を示し、今年度は44研究室 323名を数えるまでになつた。この説明会は、研究室が決まり、卒業論文の準備にはいる4年生に焦点が当てられており、当センターが最も力を注いできた説明会である。今年度の参加者の内訳は、学部生 265名、院生54名、教員2名、研究生2名となっている。

他の説明会も含めると、参加者はかなり増加したことになるが、閲覧部門を抱えながら、このような状況に対応できたのは、指導経験の蓄積や配布資料の充実に依る部分が大きい。

3. 「オンライン情報検索説明会」の開始

1970年代、情報を探す便利な道具としてオンライン情報検索サービスが日本にも登場したが、当センターでも2年間の試行期間を置き、1980年外部データベースの検索サービスを開始した。検索の精度を上げ、サービスを定着させるためには説

明会が有効との判断があり、1986年に日本科学技術情報センターから講師を招き、第1回のオンライン検索説明会を開催した。2年目からは職員が講師となり、研究室単位に説明会を開いている。

内容はデータベースの基本構造、検索項目、シソーラス、コマンド、演算についての基礎事項からなり、オンラインと冊子体、それぞれの長所と短所を理解してもらうことにポイントをおいている。所要時間は約1時間で、検索の一連の流れ、料金体系などを簡単に説明した上で、時間が許せば、参加者からテーマをもらいデモンストレーションも行っている。申し出があれば、資料利用説明会に続けて行うが、その場合はトータルで約2時間半の長帳場になってしまう。

図1が示すように、参加者はやはり徐々に増加して、資料利用説明会のほぼ半数となっている。

4. 新しいメディアへの対応

近年、図書館においては新しいメディアとしてCD-ROMが注目されている。当センターでも遅ればせながら、昨年度 INSPEC-Ondisc (1989-)、及び BOSTON-SPA CONFERENCE (英国図書館の会議資料所蔵目録) の2つのCD-ROMを、

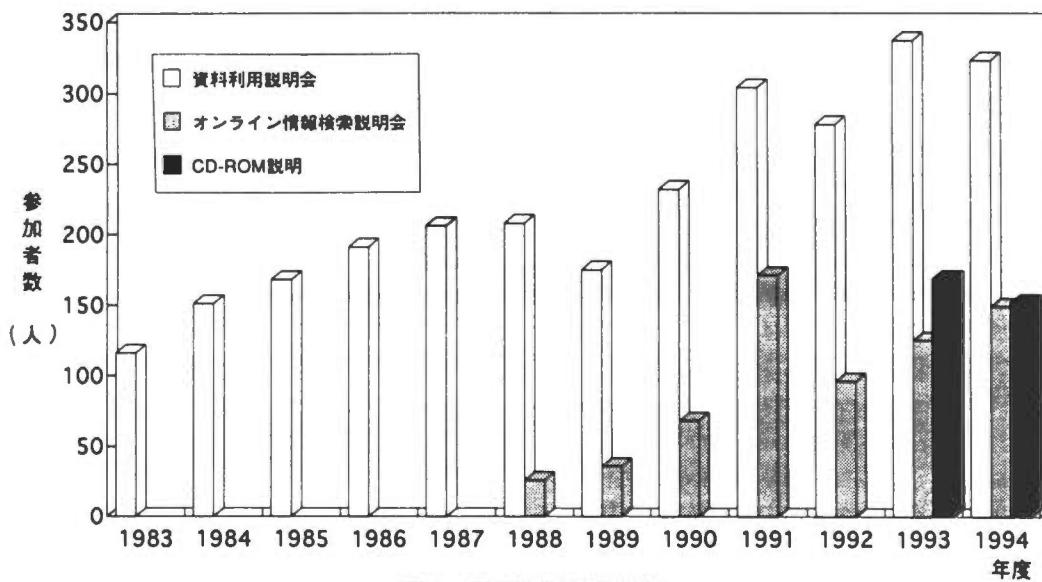


図1 利用説明会参加者数

スタンドアロンの形で利用者に開放した。前者は、冊子体 Science Abstracts に対応し、物理、電子・電気工学、コンピュータの分野では世界的な文献データベースとして定評がある。図書館では外部データベースを利用し、従来から1960年代以降の検索が可能だったが、申込みは年間数件に止まっていた。ところが、無料で、しかも利用者自身が自在に検索できる CD-ROM が提供されてからは、昨年度 1 年間で 900 件近い利用があり、今年度は 3 ヶ月で、既に 500 件を越えようとする勢いをみせている。

昨年 3 月、CD-ROM を導入したのを機に、オプションの形で説明会に取り入れたところ、関連分野のほとんどの研究室から申込みがあり、結果は好評であった。オンライン検索の説明は不要だが、CD-ROM は必要という研究室もあり、図 1 が示すようにオンライン検索説明会を上回る参加があった。

他種の CD-ROM を求める声や使い易い環境をとの要望も寄せられ、年内には学内 LAN を通じて、研究室からでもアクセスできるよう計画が進行中で、CD-ROM も増設を予定している。

5. 今後の課題

当センターでは、説明会毎に簡単なアンケートを実施してきた。質問項目は、実施時期、所要時間、説明方法、説明内容、有用性に関する評価からなる。全般的にみると、学部生の場合、目新しい情報が多くて、消化不良気味という傾向がみられる。そこで、本年度は、資料利用説明会の内容を 2 次資料中心にしたところ、評価は全体に高くなつたが、一部に不満の声が聞かれたり、大切な情報を切り捨てる事にもなり、1 回で全てをカバーすることは困難と痛感させられた。

実施時期については、今年度 92.0% の人が適当としたものの、就職戦線が厳しいためか 6 月は欠席者も多かった。また、所要時間については、90 分が限度で、約 1 割の人が 60 分が適当だと答えた。その他には、テキストに詳細な解説や練習問題を盛り込んで欲しいという要望や、実際に検索

を行いたいという意欲的な意見も目立った。

このように改善の余地は沢山残されているが、今後特に我々が考慮すべき課題の一つは、情報技術の進展に伴う情報環境の変化や、情報処理技術の拡大にどう対処していくかということであろう。紙から電子へ、メディアの拡散に呼応して、図書館の資源も、説明会の対象領域も広がった。今や、高性能で、小型化したコンピュータは、ネットワークで結ばれ、マルチメディアを志向し、Internet 上には公式、非公式の多量な情報、多様な通信機能が搭載されるようになった。情報を探索し、交換することも含めて、研究過程の多くを、コンピュータの前に座り、個人のレベルで処理することももはや夢ではない。

一昨年、理工学部の教員を対象に、情報環境に関するアンケート調査を行ったが、コンピュータは研究上不可欠との答えが殆どであった。情報交換の場では、電子メールが予想以上に普及し、ソフトウェアなどのファイル転送も盛んだが、反面データベースの共同構築や検索は限定されていることが確認された。また、情報関連のニーズとして、「図書館資料の充実」、「施設の拡充」、「ネットワークを介しての目録情報の利用」に次いで、「ネットワーク利用のための援助」や「情報検索のための技術・情報の提供」が上位にランクされた。更に、研究分野、あるいは個人によって、情報メディアが異なること、情報処理技術のレベルの差が拡大していること、ニーズに多様性があることも明らかになった。同様の傾向は、現行サービスの利用実態や、説明会の参加状況の分析からも伺い知ることができる。

こうした状況を鑑みると、理工系の大学図書館としては、既存業務を整備し、新しい情報技術を取り入れて、利用者のニーズに合った高度なサービスを目指すとともに、エンドユーザに対する情報処理教育を重要なサービスと位置付け、その内容を拡充していくことが必須と言える。米国的主要な大学図書館では、インストラクション専門の図書館員を採用し、年間を通じて組織化された教育プログラムを、教員やシステム部門と共に運用

し、新しい教育手法の導入にも積極的という^②。

当センターでは、当面の方策として、説明会のメニューを少しでも多角化し、幅広いニーズに柔軟に応えられるように、開催期間を延長し、受講単位を研究室単位から、学問領域別、メディア別、受講レベル別との併用にするよう検討している。

また、エンドユーザ自身による情報処理を支援することは、研究や教育の現場により一步近づくことでもある。従って、日頃から学問分野の動向や研究の実態に注目し、説明会では十分それらを考慮し、資料やメディアの提示を行う必要もある。

内容も、情報環境の進展に伴い、新しいメディアへ比重を移すことになるが、特に、高度な情報技術が求められる理工学部においては、情報システム担当者による支援を仰ぎ、彼らが利用者に提供する様々な教育プログラムとの間で、相互に連携をとっていくことが重要である。

その他、今後の対応としては、次のようなことを徐々に推進していきたいと考えている。

- ① テキストの内容を一層充実させ、コンピュータのモニター設備など、新しい情報機器を導入し、効率的、効果的な指導ができるよう工夫する。
- ② 「オリエンテーション」に関しては、他部門の職員に応援を求めたり、ハイパーメディアのように、変更・変換が容易なデジタル情報も採用していく。
- ③ 情報処理教育を拡充するため、授業と連動するなど、教員との協力関係を強め、主題からのアプローチや、実践的な側面を強化していく。
- ④ 執内メディアセンターの協力体制を整え、OPAC の手引き書を共同で作成したり、指導の内容による役割分担を明確にしていく。
- ⑤ 既存システムの有効な利用を促すため、説明書の作成や、PR に力を注いでいく。また、他の理工系図書館と共同で解説書を作成したり、ビデオを翻訳するなど有効な手段も

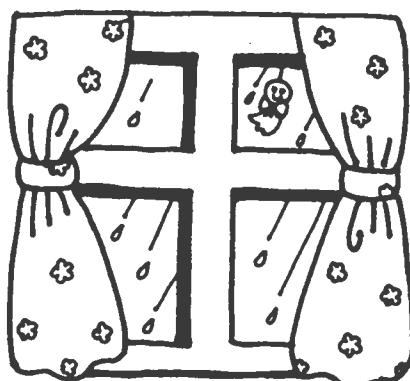
開拓していく。

6. 終わりに

説明会の参加者の評価は、非常に役立ったとする者 48.3%，役立ったとする者は 50.8% となっている。更に、時代に即した、充実した利用者教育を提供し、高いレベルのサービスを維持しながら、利用者の信頼を得ていくためには、図書館員自らが知識と経験を重ねいくことが、何よりも大切である。今後、エンドユーザによる情報交換が盛んになればなるほど、我々はそのことを認識し、図書館サービスの向上のためにも、求められる利用者教育の姿を模索していく必要があろう。

参考文献

- (1) 吉川智江. “理工学情報センターにおける利用者教育”. KULIC No. 22 p. 21-24 (1988)
- (2) “Instruction for information access in sci-tech libraries”. Science & Technology Libraries. Vol. 14, No. 2, p. 1-137, 1993



[医学メディアセンター]

ひらぶきかよこ
平吹佳世子

(医学メディアセンター)

1. はじめに

医学メディアセンターでは、1990年に利用者教育実行委員会を発足させ、利用者教育の活性化を図ることにした。約一年をかけて、対象者別に実施方法・時間・時期などを検討し、実施要領を作成するに至った。これに基づいた利用者教育を現在も継続して実施している。一方で、CD-ROMなどの電子出版物が著しく増加し、利用者教育もこれまでとは違った方法で取り組まなければならなくなってしまった。1992年1月から「情報利用講座」という名称で実施を開始している。この講座の開設当初は MEDLINE CD-ROM の利用指導のみであったが、OPAC、医学中央雑誌 CD-ROM などが次々と導入され、現在ではその他各種 CD-ROM の利用指導へと発展している。さらに1994年4月には日本医学図書館協会作成のビデオ「医学情報の達人」を取り入れた利用者教育が可能となった。このような状況の変化に伴う利用者教育について再考し、今後の利用者教育についても考えてみることにする。

2. 情報利用講座

2.1 実施方法と内容

8月、3月を除く毎月週2回～3回、午前・午後などとりませた日時を事前に設定し、開始時間に集合してもらう方式。集まった人数が多い時は指導者1人につき5、6人までを限度にその場でグループ分けをする。時間はメニューによって30分～1時間30分位としている。現在のところ次の4つのメニューを用意している。

1. OPAC検索方法の指導を中心に資料の探

しかた、館内ツアなどを盛り込んだライブラリーオリエンテーションコース。

2. MEDLINE、医学中央雑誌などのCD-ROM検索方法を指導する初心者向け検索コース。
3. CD-ROM検索テクニックの向上を目的とする上級者向け検索コース。
4. A.D.A.M.(医学解剖ソフトウェア)を始めとする各種CD-ROM解説コース。

それぞれ、学内関係者であれば誰が参加してもよい。設定した日時以外の日程を希望する場合は、あらかじめ予約をしてもらう。

2.2 広 報

2カ月分のスケジュールのポスターを作成し、館内各所および院内各所に掲示している。教務課にも依頼してポスターの掲示および広報をもらっている。

また、このポスターはカウンター脇に数十部置いておき、自由に持ち帰ってもらう。4月および9月には医局ごとのメールボックスにポスターを配付している。さらに、毎月発行の図書館報「きたさとニュース」にスケジュール表を載せている。

2.3 実 績

1992年度、1993年度の実施状況および参加人数は次のとおり。

年度	コース	回 数	参加人数
1992	1	9	30
	2	30	101
	3	6	10
1993	1	6	9
	2	49	105
	3	0	0

2.4 問題点と今後の課題

情報利用講座は開設後2年半が過ぎたが、講座内容に関してはおおむね好評である。しかし、か

ならずしも効率のよい検索をしているとは思えない利用者を見かけることがある。また、「探している文献がどうもうまくみつからないのだが」との声も聞く。こういった場合、講座を受講することを勧めるが、診療を抱えまとまった時間の取りににくい医師と、スタッフの勤務時間との調整は非常にむずかしい。これまでも、午前中に設定した情報利用講座の参加率はきわめて低かった。なるべく多くの利用者に情報利用講座を受講をしてもらえるよう、検討する必要がある。

また、上級者向けコースでは、それぞれの専門分野の医学用語知識を必要とするため、検索に熟達したスタッフにしか指導することができない。一方で、新しい CD-ROM が導入されれば、利用者以上に使いこなさなければならなく、指導者の研修や養成のための時間が必要となってくる。

さらに、情報利用講座という名称にもかかわらず、現時点では、CD-ROM の利用指導および、技術向上指導に留まっているため、今後はもう少しステップアップし、個人で得た情報の利用・活用方法などをレクチャーするコースも設定したい。しかし、利用者がどの機種のパソコンを持っているか、どんなソフトを持っているかによって指導方法が異なるなど、指導者の知識、経験がより一層必要とされるなど、課題は多く残っている。

3. ビデオ「医学情報の達人」

1993年4月に日本医学図書館協会では、医学系図書館向けビデオの作成を開始した。加盟館の中から5名が制作スタッフとして企画・作成にあたったため、どの医学図書館でも使える内容である。全4巻からなり、1巻は一般的な医学図書館の利用法、2巻は研究プロセスについて、3巻は MEDLINE の使い方、4巻は効果的な学会発表の方法についてである。

今年度4月のオリエンテーション時期には、医学部3年生、薬剤部研修生、新入局医師に対し

て、1巻および3巻を上映した。これまででは、医学メディアセンターで独自に作成したスライドを使用していたが、これは館内を説明したものにすぎなかった。これに対して、ビデオはそれぞれ20分程度なので、どのオリエンテーションでも厭きること無く興味を持って見ていたようである。特に、第3巻の「医学文献データベース MEDLINE」は、実際にキーボードに触れる前に、データベースについての知識を得ることができるために、非常に効果的である。また、シソーラスである MeSH (Medical Subject Headings) タームの説明は、特に初心者には、理解してもらうことがむずかしかったが、ビデオでは、図解によって無理なく説明している。しかし、残念なことに現在の医学部キャンパス内に、10人程度から100人程度の人数が同時にビデオを試聴できるような設備が整っていないため、今年度の上映実施にあたっては機材の移動や、座席の設営などの苦労があった。できれば医学メディアセンター内に、少なくとも医学部キャンパス内に適当なビデオ上映施設ができることを強く望んでいる。

4. おわりに

1989年以来、CD-ROM は全盛期を迎えている。これに伴って、利用者教育も CD-ROM を中心に行うようになった。今後は LAN の敷設により、CD-ROM もスタンドアロン形式ではなく、ネットワーク形式となり、図書館に出向くことなく各研究室からの検索が可能となるだろう。そうなれば、当然、これまでの方法や内容での利用者教育では不十分である。また、マルチメディアの時代になれば、利用ガイドを映像、音像付きで作成しておき、好きな時に好きな場所でみてもらうことも可能である。これまで考えられなかった展開を見せ、しかも急速にこの方向へと進んでいくだろう。これらの環境の変化に応じた利用者教育を今後は考えていく必要があるだろう。

[湘南藤沢メディアセンター]

まつ もと かず こ
松 本 和 子

(湘南藤沢メディアセンター係主任)

1. はじめに

現在 SFC では図書館の利用者教育をメディアセンター（藤沢 MC）が積極的に行っていると言える状況ではない。春・秋の新入生ガイダンスへの参加、4月時に一週間ほど館内ツアーと OPAC の簡単な説明会を実施するに留まっている。ただ SFC は他の地区に先駆けてメディアセンターと名乗り、組織も建物も 1 つとして発足していて、利用者教育というのは図書館のことだけを教えていれば済むという状況にはない。勿論それが図書館の利用者教育が積極的に行われていない理由ではないのだが、ここでは利用者教育が何故積極的に行なわれていないかという理由を述べるよりは、SFC の研究教育、メディアセンター業務の現状を報告し、今後の利用者教育のあるべき方向について考えてみたいと思う。

2. SFC の研究教育環境とデータベース

SFC では CNS (Campus Network System) に接続された数多くのワークステーションを使って研究・教育が行われ、日常生活が営まれている。1年生全員が受講する「情報処理 I」の講義案内には「この科目は、コンピュータリテラシーの修得とプログラミングを通した問題解決の基礎力養成を目標とします。」とあり、全ての学生が必ずコンピュータを使うことになっている。そこで修得された技術は電子メール、あるいは文書処理を使ったレポート提出という形で卒業するまで使われている。さらにデータ解析、統計手法などのパースペクティブ科目（一般教養）の授業に加えて、専門課程に進でもコンピュータが良く使われるを考えられている環境情報学部ばかりでなく総合政策学部でも、政策管理コースのいろいろな

授業で経済統計データベースを実際に使って分析、解析が行われて、問題解決の手段としてもコンピュータ利用が多く教えられているのである。

SFC のもう一つの特徴として、従来の講義中心の授業からグループワークに重点が置かれ、それは大学院のコラボレーション、教員と学生との枠組みを発展的に取り扱った共同研究へと繋がっている。教員と学生の線引きをなくすというのも、創設時から謳われているスローガンである。

コンピュータ資源として CNS が重要なことは勿論だが、その資源を生かすデータベースの利用が SFC で非常に大きなウェイトを占めていくことは確かである。だが実際に藤沢 MC が CNS 上に提供しているデータベースは少なく、大型計算機に搭載されているデータは CNS からアクセスできなかったり、CD-ROM のようにスタンドアロンでまったくネットワークに対応していないデータベースもある。個々の研究室で開発されたデータベースの管理は藤沢 MC ではなく研究室単位で行われているため、研究上必要なデータベースを CNS に載せて管理してほしいという要求や、ネットワークに対応していないためその存在を知らなかったという不満、あるいは使い方が分からぬといった声も耳にする。

3.1 学生コンサルタントと利用者教育

メディアセンターには、「CNS コンサルタント」「MAC コンサルタント」「AV コンサルタント」「データベースコンサルタント」という学生コンサルタントが学期期間中常駐している。「CNS コンサルタント」はメディアセンター棟が完成当初から SFC のグループワークのコンセプトに沿って「2年生が1年生に教えることができるし、学生同士で教え合うことの意味は大きい。」とスタートしたものだ。この背景には、専任職員の数が非常に少なく（藤沢地区だけの問題ではないことだが）、具体的には500台ものワークステーションをつないだネットワークを管理運用するのに専任が2名では、業務委託をしているとしても、利用者サービス、利用者教育にかけられる時間には

限界があったこと、24時間キャンパスという方針のもと開館時間に合わせたサービス運用が望まれたこと、そして実際にはこの新しいネットワークや UNIX システムについては専任職員もまだ精通している訳ではなかったことが挙げられる。

同じ様な状況から次々と学生コンサルタントがリクルートされていき、一番最近始まったのがデータベースコンサルタントである。データベースが最後になったのは、データベースは CNS の上に載って動くものであり、CNS の基盤整備が最近ようやく整ってきたということにもなるだろう。

いずれにしても、学生コンサルタントの活用は恒常的な人材不足を補うとともに、学生同士の情報交換や、担当する職員との情報交換という形で、広い意味での情報処理、利用者教育に繋がっていると言って良いであろう。また「CNS ローカルガイド」「データベースガイド」、「AV ガイド」などのガイドブックは編集に教職員も参加しているが、その中心は学生である。これらは生協で販売されていて、「CNS ローカルガイド」などは教科書としても使われているし、隠れたベストセラーとも言われている。このことは SFC で占める学生の役割の大きさを示していると言って良いだろう。

3.2 レファレンスサービスと利用者教育

学生コンサルタントの扱う分野のうちデータベースは、従来の図書館で行う利用者教育・レファレンスサービスと重なる部分が多い。2次資料や、統計のデータベースはもともと紙の形で出版され図書館で所蔵されてきたものが殆どだからである。この分野での利用者サービスはどうなっているかを紹介しよう。データベースコンサルタントは月曜日から金曜日の1時から9時まで、2階のレファレンスデスクで勤務する。2階のレファレンスセクションには、CD-ROM 検索用、OECD 等のフロッピーベースの統計データ検索用パソコン、大和総研データバンク、日経ニューステレコンの検索端末、証券情報をリアルタイムで表示する QUICK 端末が設置されている。コン

サルタントはこれらの利用に関する質問や、CNS でアクセスできる各種データベース、解析プログラム等に関する質問を受け付けている。勿論 OPAC の使い方の質問も受け付ける。レファレンスデスクに勤務する図書系の職員も、同じサービスを提供することになるのだが、その内容は従来のレファレンスサービスを超える（あるいは異質な）ことが多い。データベースコンサルタントが始まってまだ1年ほどなので、コンサルタントの全員、図書系の職員がすべてのデータベース、端末操作に通じている訳ではない。その場で答えられないことも多い。せめて「誰に聞いたら良いか」という答え位は出したいところだが、挙がる名前は時には学生だったり、研究室であったりとまだまだノウハウの共有はできていない状態である。また実際にはコンサルテーションよりは利用の多い CD-ROM の利用の受け付けや、トラブルに対応するが主な仕事となってしまっている。

例えば、CD-ROM の使い方、OECD データの検索の仕方についてのデモを行うとかも必要であるが、現在は行われていない。

今後 SFC で使われるデータベースは恐らく1次資料といわれるものや、文字情報だけではなく映像、音響を含めたものが主流になるだろう。統計・数値データも検索ソフトをバンドルして購入するのではなく、CNS のサーバ上にデータを置き、DBMS により SFC 独自のできるだけ統一の取れた検索ができるように運用されるべきであろう。

更にインターネットを通じてアクセスできる世界中のデータベースもある。アメリカ証券取引委員会の企業情報データ EDGAR のように有料であったデータベースがインターネット上に無料で提供されるようになったように、データベース検索のコストが減少し、OCLC の First Search のようにインフォメーションベンダーが研究者個人をターゲットにした情報サービスをインターネットで展開し始め、Gopher、Mosaic といったインターフェースにより、1次情報へのアクセスがより簡単になっていくと、レファレンスでのオンライン

イン代行検索の数は減っていくだろう。それとは逆に今まで触れることのなかったデータベースに関するコンサルテーションが増加することは充分考えられる。必要なデータそのものを理解し、そしてネットワークの最新の情報にアンテナを張っていくことが、レファレンスライブラリアンにとって重要になっていく。学生コンサルタントとの連携は例えば、学生をコンサルテーションだけではなくデータベースの開発、検索ソフトの開発に参加させることで、補い合うことができるだろう。

3.3 授業と利用者教育

藤沢のパースペクティブ科目に図書館情報学科の高山先生が教えている「資料検索法」がある。学生は1学期13コマの中でOPAC、書誌・索引、CD-ROMの検索を実習し、いかに自分の必要な情報を入手し整理するかを学んでいく。カウンターで受講している学生と接していると、図書館情報学の専門用語が学生に混乱を招いているので、理論より、より実践に重点を置いた講義内容の方が良いのかもしれない感じことが多い。またインターネットの使い方など、このキャンパスの環境に合わせた項目も盛り込むことが必要だろう。1994年度からこの授業を藤沢MCが公式にバックアップすることが決まっている。教員とより良い形で連携をとっていかなくてはならない。

3.4 SFCでの利用者教育の今後

SFCでの利用者教育のキーワードはやはり、学生、教職員の共同作業ということになるだろうか、ここでは図書館で使われてきた手法について何も触れていないが、創設4年目を迎えて定期に入つたことを考えると、人手云々を言ってられる状況ではない。まず藤沢MCとして実行しなければならないのは、図書館の使い方についての利用者教育を充実させることだろう。ツアーやガイダンスを新入生レベルよりもっと上級のものを企画すること。例えば「雑誌論文の探し方」といったテーマでガイダンスを行うとか、研究会単

位に呼びかけて彼等の主題のもとにライブラリーアイストラクションを行うといったことである。SFCのガイドブックの中に図書館に関わる「ライブラリーガイド」というのはない、これを作つてみるのも良いかもしれない。

次にデータベースなど新しい分野では、学生コンサルタント、研究嘱託を含めて利用者教育のアウトラインを作成することも必要である。CNSのように授業で全員に教えられることではないので、これらに興味のある学生に、データベースの存在を知らせ、藤沢MCのサービスを知らせ、使い方を教え、自由に使いこなせるように指導するといった段階を踏んで、サービス、利用教育計画を考えていかなければならない。

次に学生コンサルタントの活用をさらに良いものにしていくこと。カウンターに座っているばかりではなく、ガイダンス等を企画させ学生コンサルタントが直接指導するところまで彼等に任せることも考えられる。データベースのように学生コンサルタントのスキルアップの必要なものは、職員とある程度同等の研修を実施していく必要があるかもしれない。

3番目は授業との連携である。例えば情報処理教育の授業等で、OPACを取り上げることが可能であれば、インターネットで公開されている他の図書館OPACの利用など含めてすべての学生が早い時期に図書館に触れることにもなり、その後の利用者教育の展開が楽になるはずだ（多数の人が同一データベースに同時にアクセスということは技術的には無理かもしれないが）。

最後に利用者教育の補助ともなる利用ガイドはできるだけCNS上に置き、学生がいつでも見られるようにすることを考えなければならない。Mosaicに繋げれば映像等を取り入れてかなり良いものができるし、インターネットを通じて学外、海外に情報を提供ができる。またできればOPACやCD-ROMに繋げて、検索行程のサンプルが動画として見ることができたり、実際に指示に従って実習できるようにすると、学生の興味をひくのではないだろうか。いずれにしても利用

案内というよりは CAI と呼べるものを作っていくなければならないだろう。これは図書館という枠を離れて、CNS、AV など SFC の研究・教育に即したインフォメーションリテラシーとでも呼べるようなものを習得してもらうことが目的となってくるはずである。

4. 終わりに

図書館の利用者教育というと教員がするのか、図書館員がするのかにこだわる人も多い。教育という言葉には、教える側の資格というか権威のようなものがついてまわるからであろう。SFC ではこういう議論は意味がなくなっていくだろう。それよりも私が個人的に危惧するのは、図書館員が図書館のプロとしてのステータスをいつまで持ち続けることができるのだろうかということだ。

「クレムリンにプールがあるか?」という質問にベテランのレファレンスライブラリアンはレファレンスツールを使って数時間を費やして答えを見つけた。ところが同じ質問にまったくの素人

が自分のラップトップの前に座りインターネットを使ってわずか数分で答えを見つけたという逸話がある。従来の私たちのノウハウを超えたところで情報は行き交う時代になってしまった。

日本でも CWIS (Campus-wide Information System) のようなネットワークができてくれば、各大学の個別の情報の他に、利用者教育に必要な標準的な情報を学生がいつでもアクセスできるような状態にしておくことも可能なはずで、利用者教育もネットワークの時代が来ることは間違いないだろう。また、もしかするとネットワークの世界になると、図書館員対利用者という 1 対 1 (あるいは多) のコミュニケーションではなく、ネットワークにアクセスしている、面識のない別の第三者 (教員であるとか、コンピュータの専門家であるとは限らない) が加わって、それらから発生する多方向のコミュニケーション (オンプレーンと呼ばれる) によって情報収集が行われていくのかもしれない。もはや利用者教育という言葉は過去のものになってしまったのかもしれない。

全地区利用案内に関する調査

よし さわ あきこ
吉 沢 亜季子

(MEDIANET 編集会議)

1. はじめに

1992年4月より、慶應義塾大学研究教育情報センターは計算センターと統合し、メディアセンターと組織名称が変わった。また、全塾トータルネットワークシステム KOSMOS は全地区で稼働を開始し、他地区の所蔵や貸出状況は OPAC で検索可能となった。これに伴い、従来各地区ごとに作成してきた利用案内の現状を把握し、塾内で統一できるものがあれば提案しようという意見が MEDIANET 編集会議の中で起こり、この機会に各地区における利用案内の比較調査を行うことにした。今後は、計算機についても、組み入れ

ていく必要もあり、検討していかなければならない。ここでは、図書館側の各地区利用案内の現状をレポートする。

2. 調査方法

MEDIANET 編集会議のメンバーで、自館で作成している「利用案内」を持ち寄り担当者がまとめた。「利用案内」の性格は、大きく二つに分けられる。一つは、図書館全体の説明が掲載されているジェネラル版で、もう一つは主題別に作成されているシリーズである。前者は、初めてメディアセンターを利用する場合や見学案内に使用し、後者は個々の詳しい内容を知りたい場合に使用する。この二種類の「利用案内」を、それぞれ比較調査した。ジェネラル版については、全地区で掲載項目を統一できないかという意見があり、表にまとめてみた (3.1.3 調査表)。尚、この調査は、1994年4月現在のものである。

3. 調査結果

3.1 ジェネラル版

3.1.1 サイズ

三 田 変形 20.5×18

日 吉 A4

(フロア案内) 変形 10×21四つ折り

理 工 学 A4

医 学 A4 A3二つ折り

藤 沢 変形 20×21

3.1.2 内容(目次)

三 田

1. 図書館利用案内シリーズ一覧
2. 利用上の注意
3. ジェネラルガイド
 - 1) 開閉館情報
 - 2) 貸出・冊数と期間・返却・延滞・継続・予約
 - 3) その他
4. フロアガイド
5. 資料の探し方(図書・雑誌)
6. その他のサービス
7. 索引

日吉(フロア案内)

1. 開閉館情報
2. フロア案内
3. 日本十進分類表
4. 利用上の注意

日 吉

1. 開閉館情報
2. 利用券
3. 資料の種類と利用方法
4. 利用できるサービス
 - 1) 貸出・返却・更新・予約
 - 2) 複写サービス
 - 3) レファレンス・サービス
 - 4) その他のサービス
5. 資料の探し方(図書・雑誌)
6. 利用上の注意
7. 索引
8. 利用案内シリーズ一覧

理 工 学

1. 開閉館情報
2. フロア案内
3. 資料の種類と配置場所
4. 貸出期間と方法・貸出・返却・継続・予約
5. 複写
6. レファレンスサービス
7. 外来
8. 利用上の注意

医 学

1. 開閉館情報
2. 貸出
3. 資料の探し方(図書・雑誌・AV)
4. 返却・延滞・予約・継続
5. 複写サービス
6. その他のサービス
7. フロア案内(別紙)

湘南藤沢

1. はじめに
2. 開閉館情報
3. メディアセンターへの問い合わせ
4. 利用上の注意
5. その他
6. フロア案内(別紙)
7. 貸出期間と冊数・貸出・返却・継続
8. 資料の探し方(図書・雑誌)と配置場所
9. レファレンスサービス
10. CNS(キャンパスネットワークシステム)

3.1.3 調査表

	三 田	日 吉 (フロア)	日 吉	理 工 学	医 学	湘南藤沢
1. はじめに	○					○
2. 利用上の注意	○	○	○	○	○	○
3. 開閉館情報	○	○	○	○	○	○
4. 貸出・返却・延滞・継続・予約	○	○	○	○	○	○
5. 複写	○	○	○	○	○	○
6. レファレンス		○	○	○		○
7. その他サービス(両替・電話等)	○		○			○
8. 冊数と期間	○		○	○		○
9. フロア案内	○	○	○	○	○	○
10. 資料の探し方(図書・雑誌)	○	○	○	○	○	○
11. 資料の種類	○	○	○	○	○	○
12. 配置場所	○	○	○	○	○	○
13. データベース・サービス	○	○	○	○	○	○
14. オリエンテーション	○					
15. 購入希望	○					
16. 他メディアセンターの利用	○					
17. 学外図書の利用(相互貸借)	○					
18. 索引	○					
19. 日本十進分類表		○				
20. 利用券		○				
21. 利用案内シリーズ一覧	○					
22. 外来						
23. CNS(キャンパスネットワークシステム)				○		○

3.2 シリーズ

三 田

- (1) 慶應義塾図書館・新館利用ガイド
- 1-2 フロアマップ
- 2 資料の探し方
 - 1 図書篇
 - 2 雑誌編
 - 3 OPAC 編
- 3 NDC 日本十進分類法（8版）
- 4 配置記号と配置場所
- 5 KUL GUIDE SERIES
 - 1 GENERAL GUIDE
 - 2 FLOOR PLAN FOR NEW BUILDING
 - 3 NDC(Nippon Decimal Classification)
 - 4 LOCATION MARKS AND LOCATION OF THE BOOKS
- 6 利用時間一覧表
- 7 ヘボン式ローマ字表
- 8 [欠番]
- 9 慶應義塾図書館（日吉館）利用案内
- 10 レファレンス・サービス
- 11 雑誌室
 - 1 資料の配置編
 - 2 資料の利用編
- 12 総合資料室
- 13 セミナー室
- 14 キューピクル
- 15 図書館・情報学資料室
- 16 学外の図書館を利用するには
- 17 選書ガイド〔教員用〕
- 18 AV ブース
- 19 通教生のための図書館利用ガイド
 - 1 図書貸出について
 - 2 夏期スクーリング
 - 3 地方在住学生の図書館利用について
- 20 図書購入のご案内〔教員用〕
 - 1 見計・注文
 - 2 特別図書・補助金
 - 3 選書の資料・寄贈本の受入
- 21 ウォークマンによるオリエンテーション（現在使用せず）
- 22 データベース・サービス
 - 1 三田
 - 2 豊内
- 23 慶應義塾大学内他地区図書館（メディアセンター）
- 24 カード目録に収録されない資料

日 吉

- (1) 慶應義塾日吉図書館利用 MAP
- (2) 学部生のための慶應義塾日吉図書館利用ガイド
- 3 HIYOSHI LIBRARY (ENGLISH GUIDE)
- 4 AV コーナー
- 5 AV ホール
- 6 目録の利用法（カード・冊子体編）
- 7 逐次刊行物（雑誌）の利用について
- 8 ヘボン式ローマ字
- 9 レファレンス・サービス
- 10 図書館相互利用について
- 11 パソコンを利用した情報検索サービス
- 12 豊内図書館で利用できる情報検索サービス
- 13 教職員のための日吉図書館利用案内
- 14 キューピクル
- 15 大学院生のための4階研究者用フロア利用案内

16 通信教育部学生のための図書館利用案内

- 17 図書館活用セミナー
- 18 目録の利用法 (OPAC 編)

理工学

- 1 文献の探し方 1-図書・雑誌・会議録等
- 2 文献の探し方 2-二次資料・オンライン検索
- 3 理工学メディアセンター所蔵主要抄録誌・索引誌
 - 1 科学技術一般
 - 2 工学・機械・航空宇宙工学
 - 3 化学・金属
 - 4 物理・電気・電気工学・原子力・エネルギー
 - 5 コンピュータ・システム経営工学・数学・その他
 - 6 医学・生物学・心理学
 - 4 OPAC の手引き
 - 5 困ったときのQ & A-検索語入力画面での注意
 - 6 図書の探し方
 - 7 オンライン情報検索
 - 9 文献複写サービスのご利用にあたって(学外一般者用)

医 学

- なし

4. おわりに

調査結果から、一部は協力して作成しているものの、各地区固有に「利用案内」を制作していることが分る。今後の検討事項として提案したいのは、OPAC 等の地区共通で使用しているものは共有し、各地区固有の内容は特徴を出すということである。一定のガイドラインに沿ったジェネラル版を考える必要もあるかもしれない。そうすることにより、「利用案内」の内容も豊富になり、その上、担当者の手間を省くこともできる。これについては、現在、三田の利用案内シリーズ No. 22-2 データベース・サービス「塾内図書館で利用できる情報検索サービス」で、日吉へデータ更新を報告し、FD を借りて三田地区用に作成しているという例もある。全塾トータル・ネットワーク・システムが稼働した今、「利用案内」も従来のままでなく、地区の枠を越えることが望まれる。また、計算センターと統合されたことで、図書館の資料のみならず、湘南藤沢メディアセンターのように CNS のガイドを作成することも検討していくべきであろう。この調査を基に、一層図書館を活用してもらえるよう、利用者にとって役に立つ「利用案内」ができればよいと願っている。

三田情報センター時代のコレクション ——資料再発見——

もり その しげる
森 園 繁

(三田メディアセンター事務長代理)

別個の活動を行って来た慶應義塾図書館と研究室が、一つの組織に合体したのが昭和45年(1970)4月。“三田情報センター”の誕生である。「慶應義塾図書館史」に伊東弥之助氏が記すように「図書館は建物と蔵書と館長と副館長と、その招集による図書選定委員会のみを残して消滅した」のである。以来二十三年、平成5年4月にその三田情報センターは、“三田メディアセンター”に改組。理念的にはマルチ・メディアを駆使した情報改革に耐えられる組織への体制作りであり、慣れ親しんだ“三田情報センター”的名称とも別れた。

「三田情報センター時代には……」——と言っても僅か一年前迄のことであるが、いわゆるコレクションものを随分と受入れた、又稀覯書も数多く受入れた。その中の或るものは「三田評論」「塾」また「三色旗」などに紹介されたが、三誌とも図書を中心としており、コレクションものが対象にされる機会は存外少ない。そこで、三田情報センター時代を振り返って、収書よりその活動を書き留めて置くのも意義あると思われる。編集子より与えられた「資料再発見」の語感には距離が近すぎる懸念も拭えないが、諸記録が手元にあるものもあり、今の内に概観して置きたい。

この二十三年間に受け入れたコレクション・文庫と思われる資料はどれくらいに上るであろうか。気が付いたものを一覧表にすると、別表の如くであるが、その中のいくつかにつき若干の説明を致したい。何かの折りのご参考にしていただければと思う。

なお、本稿では図書館受入れの図書のみを対象とし、雑誌資料は除いた。非図書資料も数点の例外を残し他は除いた。また学部受入れ資料も全て除いた。

☆RILKE Collection

ライナー・マリア・リルケ Rainer Maria Rilke (1875-1926) は、現代ドイツの作家では最も馴染み深い詩人である。この詩人に関するコレクションとしては、ハーバード大学ホートン・ライブラリー Houghton Library 所蔵の “Rilke Collection” が名高く、コレクションの蒐集家數学者ミーゼス Richard von Mises 多年の努力の結果は “Katalog der Rilke-Sammlung (1966)” として全貌が公刊されている。義塾購入のものは、さるリルケ愛好家がミーゼス・コレクションの再現を目指して蒐集したものである。遺憾ながら規模においてミーゼス (1,757 タイトル) に及ばないが、今日望みうる最高のコレクションであり、詩人の散文・韻文・日記・書簡などの各初版本、欧米研究者の論文、同時代の詩人への回想など740余点の資料となる。薄くて可愛い本達が、櫛比宜しく勢揃いしている姿は研究者にはまた感銘一入であろう。

「科学的に編纂された“全集”を通して言わば学術的にしかあたえられてこなかった作品が、こんなにもここでは息づいているものかと、改めてコレクションの有難味を知る」とは推薦者塚越教授（当時）の喜びである。

閑話：後日平成2-3年に「リルケ全集」全10巻が刊行されたが、このコレクションの諸書が底本として用いられ、配本の度に各巻頭を本コレクションからの珍しい写真で飾ることになった。

昭和53年頃から暫く、洋書コレクションの購入を進めた時期があった。戦中戦後図書予算不足のため購入できなかった当時の図書が多く、これらコレクションを受け入れて蔵書の歪みを補正できた。「ワイマール共和国」「第一次世界大戦」「German Austria Coalition」「アメリカ政治史」「18-20th Century American Literature Criticism」「ドイツ帝国郵政省旧蔵書」その他諸々で、一度に数百から千冊単位の図書を受け入れるので、整理作業への負担が著しかった苦い思いである。

昭和57年三田山上に70年振りに図書館が建設され、慶應義塾図書館（新館）が開館した。今まで

の赤レンガの方は、慶應義塾図書館（本館）と名付けられ、図書収容能力は両館合わせ200万冊、今後二十年は資料増加に耐えられると予測された。竣工と前後して大口コレクションの受入れが相次いだので、ここに一括して記しておこう。

☆幻の藤山文庫

財界人として、政治家としての藤山愛一郎氏の活躍は良く知られているが、その藤山氏が政財界人には希有の愛書家でいらしたのは余り識られていない事実であった。

昭和56年春藤山氏から蔵書「藤山現代中国文庫」一万余冊を三田情報センターに寄贈致したい旨お申し出があった。義塾は早速そのご好意をお受けし受入れ準備を進めた。その年の秋に第一回受納分「長沙大公報」その他を搬入したが、以後は数回に分け翌57年2月下旬以降再開で両者了解した。これは、当時新館建設中の為、新館に移転後の受入を計画したのであった。無事新館に移り終り仕事の第一日目が昭和57年2月8日。

しかし、その同じ日の早晩ホテルニュージャパン火災の大惨事と共に「藤山現代中国文庫」は鳥有に帰したのであった。藤山氏は当時同ホテルに事務所を構えておられ、同文庫も事務所の隣に配架されていたが、出火フロアと同じ階であったため、全ての蔵書は一夜にして灰塵に帰したのである。ホテルニュージャパンで書物に囲まれて満面笑みの藤山氏と、事件後仮事務所での傷心の藤山氏と、お見舞いに伺っても慰めの言葉に詰った。

藤山氏が逝かれたのは、それから3年後であった。有為転変、人生の甘酸を舐め尽くした氏が、後世に遺したかったものは「藤山現代中国文庫」であった。世人に憶えられることはなかったが、この文庫こそ「私の人生をかけた活動」との氏の言葉は誇張ではなかったのである。

☆高橋文庫

高橋誠一郎先生（明治17年—昭和57年）に就いては改めて述べるまでもない。筆者の学生時代にも三田で良く講演をされていた。記憶にあるのは、小泉信三元塾長への追悼演説や浮世絵の話で

ある。長身瘦躯、言語明晰、一語をも疏かにしない話振りであった。

先生の西洋経済史研究の業績は学界周知のことであった。また浮世絵の蒐集も趣味の領域を遠く越え、世間には高橋浮世絵コレクションとして余りにも有名であった。先生が逝かれたのが昭和57年2月、享年九十七歳の長寿を全うされた。図書・浮世絵共に義塾への受入れのお望みがあり、早速その下見に大磯王城山荘にご遺族を訪問。母屋から書斎への渡り廊下にさしかかると、「これから先は家人でも入れて貰えなかったのですよ」とのお話を伺いながら、趣味は「西洋古書漁り」の結実たる書斎を拝見。稀覯書の運搬には業者に特別の注意をお願いしたのを覚えている。

浮世絵は過去10年間様々な形で公開されている。北斎「富獄三十六景神奈川沖波裏」の海の青さに眼底を洗われる感銘を受けた方も多いのではなかろうか。これは極く一例で、いずれの版も刷りの見事さは百年の時間差を超えているが如く新鮮である。作品リストも平成6年春に「高橋誠一郎浮世絵コレクション」として公刊、1,400余点の全貌が明らかとなった。

図書は洋1,162点、和2,102点。就中洋書の経済学史古書は、「A Compendious or briefe examination of certayne ordinary complaints...」「種々なる人々の有する目下の不平の簡単な検討」（1581年）を筆頭に斯界垂涎の貴重書を含む。幸いコレクションの内容は「高橋誠一郎旧蔵古版西洋経済書展目録」（平成6年）により知り得る。

先生の著書に、「重商主義経済学説研究」（昭和7年）「古版西洋経済書解題」（昭和18年）などを半世紀を経て復刻した「高橋誠一郎経済学史著作集」全4巻が昨年刊行された。浮世絵では「浮世絵と経済学」（1961）、「浮世絵隨想」（1966）、「江戸の浮世絵師」（1964）、その他の書に「春日隨想」（1973）、「回想九十年」（1973）、「福沢諭吉」（1979）等々多数。

昭和21年4月から22年1月まで小泉塾長を補佐して塾長代理。昭和22年第1次吉田内閣文部大臣。日本学士院会員。昭和54年11月文化勳章。日本芸術委員長始め要職多数。大学名誉博士。

☆松本文庫

松本信広先生（明治30年—昭和56年）の講義にも出席したことがある。民族学の授業であるが、所謂脱線らしき様子は微塵もなかった。図書館（今の本館）にも十年一日姿の見られない日はないと思われる程御自分の書斎であるかの如く良く利用された。それは退職後も同様であった。

東洋史・民族学・考古学関係洋書2,000冊弱、「大越地輿全編」など安南本200冊弱、和本・唐本類1,000冊弱などいずれも先生研鑽の証である。詳細は「慶應義塾松本文庫目録」（1991）が発刊されているので内容が窺える。

1928年（昭和3）“Recherches sur quelques thèmes de la mythologie japonaise”（日本神話の研究）をパリ大学に提出して文学博士、また同年パリにて “Le japonais et les langues austroasiatiques”（日本語とオーストロアジア語）を著し日本語と南方諸言語との語彙の比較研究を発表されたのは三十歳の時であり、東アジアへの文化の研究に生涯倦むことがなった。

著書に「日本神話の研究」「ベトナム民族小史」「東亞民族文化論攷」「安南語入門」その他。

ノルボンヌ大学文学博士。昭和26年「福沢先生に関する新出史料」の研究及び同27年「千葉県加茂群における古代独木船出土遺跡」の研究でそれぞれ義塾賞。日本学術会議第6・7期会員。

閑話：御専門からして図書館旧分類歴史部門(H)の図書を頻繁に利用されが、カウンターで良く出納手に訊ねられるのであった。「このHの付く本は何処にありますか」「すぐそこです。そこのE(経済部門)の隣です。」——つい先日にも同じ問答が……確かにその前にも……明日からも同じ問答が……。先生の如き大学者にして、かくも簡単な事柄を何故マスターして戴けないのか不思議であった。

☆前嶋文庫

前嶋信次先生（明治36年—昭和58年）の授業は真面目一徹であった。筆者が聴講したのは中世中央アジア某国（国名失念）の政治史であったが、聞くこと全てが初耳で早々に断念せざるを得なかつた。

戦前より慶應義塾はアラビア学と縁が深いが、今またアラビア関係図書4,000冊を受入れ蔵書に幅を加えた。アラビア語という特殊言語資料もあり、整理作業には日時を要するが、いずれ日本のアラビア学に益するコレクションとなるであろう。

「アラビアン・ナイト」をアラビア語原典から翻訳して見たいという悲願を胸底に芽えさせてから早くも数十年を過ごしてしまった」先生が、人生の最後に待望の「アラビアン・ナイト」全20巻の原典よりの翻訳に尽瘁され、無念途中の14巻で逝去頓挫されたにしても、長年の夢を大部分達成されたのはシャーラザードの伽には及ばずとも、一佳話であろう。

著書に「東西文化交流の諸相（全4巻）（1982）」「アラビア学への道：わが人生のシルク・ロード」（1982）「アラビアに魅せられた人びと」（1982）その他。

昭和33年「東西交渉史に関する研究」により義塾賞。文学博士。

☆厨川文庫

厨川文夫先生（明治40年—昭和50年）は厨川白村の長男。英文学者として既に著名。筆者入学時文学部長の先生は祝辞に「この場を与えられたのは誠に光榮」との誠意のある言葉を我々に述べられたが、虚辞と思えぬ謙遜さが未だに忘れられない。

先生のコレクションは古代英語、中世英語が中心である、Beowulf, Chaucer 云々。洋1,800冊強和400冊。塾の図書館英文学資料は良書を以て知られているが、厨川文庫を加えて一層厚みを増すこととなった。諸原稿、ノート類をも含み先生業績の足跡を観ることが出来る。

著書に「厨川文夫著作集」全2巻（1981）がある。

昭和42年「『ウォルター・ヒルトン完全に関する8章』の校訂並びに言語的・書誌的研究」により福沢賞。文学博士。

☆高村文庫

高村象平先生（明治38年—平成元年）は図書館

長として昭和33—35年の2年強務められた。館員への就任挨拶は「一つは勤務時間の励行であり、他は言いたいことは何でも言え、直接腹藏なく言え」というのであった。筆者就職時には既に数年の隔たりがあったが、その気さくな人柄は館員の語り草となっていた。筆者が先生と会話したのは高村文庫引き取りの全く事務上のこと終始したが、それでも丁寧な受け答えが印象に残る。

先生は門外漢にもハンザ同盟の権威と知られるたが、世間的には教育課程審議会長として教育界への発言で「ゆとりの必要」を提唱、受験地獄に心身を消耗する学校教育と家庭に人間性の育成を忠告、注目を浴びた。

著書に「ドイツ・ハンザの研究」(1959)「西洋経済史」(1954)「西欧中世都市の研究」全2巻(1980)「教育への提言：コペルニクス的転換を」(1981)その他。

昭和35年—40年塾長。昭和28年「独逸ハンザ研究に関する諸論文」により義塾賞。経済学博士。日本学士院会員。日本私立大学連盟会長。昭和52年勲一等瑞宝章。

閑話：毎週手にする「慶應義塾報」の題字は、先生が塾長在任中創刊の同誌に揮筆されたものである、と知ると先生の存在が身近になる。

新館開館（昭和57年）前後のコレクション随想であるが、省みると高橋、松本、厨川、高村各名譽教授ともかつて図書館長の重責を経験されたか、図書館長候補に指名された方々ばかりである。皆図書館と関係深い先生方ばかりであった。

☆横山重氏旧蔵奈良絵本コレクション

昭和50年代に横山重氏旧蔵御伽草子類を数年継続して購入した時期がある。横山氏は元義塾予科教授。氏の情熱と私財は挙げて古書蒐集に集中された。世上流布する諸本より最も信頼するに足る底本を探索し、それを翻刻して学界に提供するのに生涯を掛けて終わった。「室町時代物語大成」全15巻「古浄瑠璃正本集」全9巻などが思いつく。

三田情報センターに収められた御伽草子はいずれも氏の鑑識眼を経た、その筋での良書ばかりで

あるが、ここでは素人にも親しみ易い奈良絵本について触れておきたい。社寺縁起を描写した絵巻物が平安時代に盛行、現代に伝わる逸品が知られているが、室町時代に入ると主題も日常庶民の生活にまで範囲が拡がり、作品の形式も取り扱い易い和綴本へと替わっていったものもあり、いわゆる奈良絵本の誕生である。その名称は地名の奈良と関係ありを思わしめるが、贊否両説が並行し定説はない。

金泥銀紙、富者長者の夢舞台を眼前に繰り広げる奈良絵本は一度観て忘れ難い印象を残すが、美術家の評価はどうであろうか。最初期の奈良絵本が現れる文録・慶長期から江戸時代前期が絵本の最盛期であり、今は名も無き絵師が現代に残る作品に精根を注いだ時期であった。技法は絵巻物以来の伝統的な大和絵の手法であるが、画風が画一化し絵師の個性が観られない点が惜しまれ「芳しくない」との評価が生まれるのであろう。

物語は一介のあきんどが城主をも凌ぐ富と権力を掌中にするなど稚拙なものが多いが、庶民の夢物語を具現して時代の息吹きを伝えるものとしてはまた貴重である。

「文正草子」「觀音本地」「文殊姫」等々。

☆Gaskell Collection

フィリップ・ギャスケル Philip Gaskell の 2,000 冊になんなんとする蔵書である。Dr. Gaskell はケンリッジ大学で長く Trinity College Library の館長をつとめた現役の書誌学者である。氏の著作に、書誌学者としては “A new introduction to bibliography” (1979), 図書館長としては “Trinity College Library” (1980), 文学研究家として “From writer to reader” 等々の労作がある。

書誌学、即ち書物そのものを研究の対象とする学問、そのヨーロッパでの好例がこのコレクションに求められる。西洋書誌学・印刷史・本文校訂学・近現代英文学を収めるこのコレクションを利用して、博士の諸著作が誕生したのであるが、一連の貴重書から些細な書片まで纏められた蔵書を再見することにより、西洋書誌学者の研究工房を目の当たりに観察し得るのである。

著者から読者に至る過程に如何なる校訂が行われるのか——を James Joyce や Tom Stoppard に就いて調査した諸資料も含まれている。西洋印刷史・書誌学のオリジナル・マティリアルが厚みを増しつつある義塾図書館にとり格好の参考資料群である。

内容は英文学関係 500 点、書誌学関係 831 点、James Joyce collection 210 点、Tom Stoppard 30 点など。

☆Valéry collection

「岩波西洋人名辞典」で Paul Valéry (1871-1945) を読むと、Valéry は「常に懷疑と絶望とを秘めながら、個我の究極的完成を理性と形式との調和的な動きの中に求め、また人間精神のあらゆる事象を考察の対象とし、西欧文化に一の最高表現を与えた」とし、作品については「その詩と散文とは、明確な用語、厳密な思惟、端正な技法、堅固な構成によって音楽的・建築的な諧和を作り出している」と讃え、最後に「第二次大戦中はパリで抗独運動を支持、節操を保ちつつ終戦直前に病死」と全体賛美に似た解説で終わっている。

一方昭和57年10月14日朝日新聞（夕刊）に「バレリー像崩れる新事実 晩年に狂熱の愛 書簡で明るみに」の人目を引く見出いで、Valéry の識られざる半面を報じている。ヨーロッパの知性と崇められた Valéry が、最晩年（1937-1945）「何もかも捨ててもよい」と思ったヴォアリエ夫人 Madame Jean Voilier に 3 日を置かず熱愛の書簡を送り続け、今回その「未公開文献の四分の三はフランス国立図書館やバレリーの生地セーヌの市立図書館が落札したが、百三十三編は慶應大学」に収まったと言う記事である。

前出辞典の称賛に溢れた Valéry 像と秘匿書簡に刻印された Valéry 像と、二つの焦点を持つ楕円像が現れたのであり、今後は複眼的に研究することにより、眞実により近い人間 Valéry が歩み出て來るのであろうか。

なお、この 2 年後にもやはり未公開のカイン夫人 Madame Lucienne Julien Cain 宛書簡類その他 145 点をも受け入れた。Madame Voilier へ日夜雁の使いを欠かさなかった 1937-1945 年の同時

期に Madame Cain への心情も徒ならぬものがあったのであり、詩人の良識は何処に、ととまどいを憶える方も少なくないのではなかろうか。

閑話：Madame Voilier 「一生、Valéry は慎ましい生活をしていました。印税では食べられなかったんです。著作権の交渉に Valéry と一緒にガリマールに行ったこともあります」（井上輝夫教授〔総〕への話）

Madame Cain の言葉はまだ聞いていない。

以上三田情報センター時代二十三年間を振り返っての、限られた範囲ではあるが取り敢えずの記録である。筆者が担当責任者として処理したコレクションもあり、そうでないものもある。特に三田以外の地区に勤務していた前後 9 年間の事情は、聞き取りに頼っての記述もあり筆者の記憶違いを恐れる。また全体に個人的回顧が散見、興を削がれる向きもお在りかと思われるが、同時代人の体験談としてお許しいただきたい。

今は夏の真っ盛り。秋を迎れば図書選定委員会が再開され、刈入れの時期に入る。良質の図書が追加され蔵書が豊かになる。或る年月を経て振り返ると、また筆を取りたくなるかも知れない。



テーマ、旧蔵書等	タイトル数等	内容、参考書誌等
昭和45年（1970）：4月三田情報センター発足		
昭和49年（1974）		
高浜虚子氏旧蔵書	500	清崎敏郎「虚子文庫」塾 1979.8
為田朝一朗氏旧蔵書	107	遊部久藏「故為田朝一朗氏寄贈経済学古典図書について」三田評論 1975.4 昭和54年度に第2回目寄贈（60冊）
昭和51年（1976）		
横山重氏旧蔵書		奈良絵本等：以後数年継続して購入 松本隆信「御伽草子の奈良絵本」三田評論 1988.6
昭和53年（1978）		
小沢愛団氏旧蔵書	248	人形演劇
第1次世界大戦	400	
Pascal	153	Blaise Pascal (1623-62) 関係
French Drama	1,011	1700-1830年上演出版の作品集
18th-20th Century American Literature Criticism	574	
James Joyce Archives	63	James Joyce (1882-1941) 関係
German-Austria Coalition	1,800	
ワイマール共和国	1,068	Weimarer Republik (1919-33) 関係
昭和54年（1979）		
田村魚菜氏旧蔵書	1,778	平田萬里遠「石井泰二郎氏旧蔵 “幻の文庫” 塾へ寄贈—田村魚菜文庫として保存—」三田評論 1980.2
Karl Banse 旧蔵書	1,460	ドイツ経営学
Jan Jurrian Schokking 旧蔵書	2,476	政治哲学
17-18世紀英國演劇	249	1733-1799年出版の演劇集
アメリカ政治史	771	
ソ連東欧研究	526	
Deutsche Sozialpolitik	707	ドイツ社会政策（19世紀後半-20世紀）
昭和55年（1980）		
Rainer Maria Rilke	748	塙越敏「リルケ・コレクション」學燈 1980.1
Andrew Lang	99	Lang (1844-1912) の諸著作集
中世 Manuscripts		AD.900-1,500 (Latin Paleography and Diplomatics)
Haebler Incunabula	5	portfolios
ローマ法関係古書	15	
中国方志叢書		以後分割継続購入

テ　ー　マ，旧蔵書等	タイトル数等	内　容，参考書誌等
Wentworth Eldredge 旧蔵書	1,190	社会学
ドイツ帝国郵政省旧蔵書	3,425	政治・経済・法律が主
Regional Planning	326	ドイツの地域開発
Business and Industry History	685	英國中心
Corporate State Theories	362	協調組合主義国家関係（初期ナチス等）
中東地域研究	579	
昭和56年（1981）		
18-19世紀英國農業地圖書	50	
ドイツ憲法・行政法・法制史	657	
Paul Flaschkämper 旧蔵書	1,067	社会統計学
ロシア政治史・歴史	986	ソ連邦後を含む
精神分析学	115	Sigmund Freud (1856-1939) を中心に
Economics and History of Transportation	523	
ジャーナリズム	210	
人口問題	256	
昭和57年（1982）：4月新館開館		
高橋誠一郎氏旧蔵書		図書和洋 3,000 浮世絵 1,400 本文参照 白井厚「慶應義塾大学の高橋誠一郎文庫について」 図書館雑誌 1984.9
高村象平氏旧蔵書	2,000	本文参照
山中散生氏旧蔵書		田中淳一「山中散生コレクション」三田評論 1987. 8/9（日吉へ移管）
島村宏氏旧蔵書	133	斎藤茂吉関係
桜田勝徳氏旧蔵書	200	民族・考古学関係手稿類、古書等
竹内好氏旧蔵書	3,000	中国文学・文化
Christian-Friedrich Menger 旧蔵書	1,871	ドイツ憲法・行政法
F.K.Mann 旧蔵書	807	ドイツ金融・財政
Walter Lippens 旧蔵書	715	田中俊郎「リッペンズ・コレクション」塾 1984.6
17-18世紀イギリス社会思想	92	F.Bacon, A.Smith 等初版を含む文献集
Paul Valéry		Madame Voilier 宛書簡 立仙順朗「ジャン・ヴォワリエ夫人—ヴァレリーの エロジー」ユリイカ 1985.10
婦人問題	798	
昭和58年（1983）		
Paul Valéry	145	Madame Cain 宛書簡

テー マ, 旧 �藏 書 等	タ イ ル ド 等	内 容, 参 考 書 誌 等
松本信広氏旧蔵書		本文参照
厨川文夫氏旧蔵書		本文参照
British Thought in 18th Century	75	同世紀出版のオリジナル文献集
Fritz Neumark 旧蔵書	749	ドイツ財政学
Thomas Hearne	37	Hearne (1678-1735) の諸著作集
昭和59年 (1984)		
Helmut Schelsky 旧蔵書	2, 135	社会学
遠山一行氏旧蔵	17, 193	(書籍・楽譜) 7, 254 (レコード) 中野博司「慶應義塾図書館遠山音楽文庫」KULIC 1985. 11
Socialism in Austria	280	19世紀後半から1950年までが対象
昭和60年 (1985)		
Paul Valéry	17	献辞入り初版本等
Heinrich Rittershausen 旧蔵書	1, 697	ドイツ経済学
前嶋信次氏旧蔵書		本文参照
飯田善国・西脇順三郎クロマトポエイマ	18	
昭和61年 (1986)		
Alfred Tennyson	1, 200	高宮利行「ピーター・ホール旧蔵テニソン・コレクション」塾 1986. 8 Tennyson (1809-92)
Illuminated Manuscript on Vellum.	103	1465-86年
Paul Valéry	175	Madame Voilie 宛書簡
Bibliotheca Jesuitica	86	スペイン・アメリカのイエズス会
History of Logic, 1700-1950	248	
文淵閣 四庫全書	1, 500	
昭和62年 (1987)		
Philip Gaskell 旧蔵書	1, 740	西洋書誌学 本文参照
小津家叢古筆切		平沢五郎「小津家叢古筆切コレクション」三田評論 1987. 10
Cistercians. Statutes of 1256-7	76	on vellum. シトー修道院規則
Methodist	222	産業革命の精神構造としての
昭和63年 (1988)		
Paul Valéry	5	書簡
小津家叢名家短冊類	2	196枚
William Morris	242	横山千晶「ウイリアム・モ里斯コレクション—日常の美の創造—」三田評論 1989. 6

テーマ、旧蔵書等	タイトル数等	内容、参考書誌等
ドイツ三月革命（1848）資料集	572	
History of Development of Writing	30	書法材料・用具等
Surrealism	9	Trista Tzara (1896-1963) 関係
Neo-Latin Verse and its Composition	7	278 leaves 1490-1500年
平成元年（1989）		
パーソナル・ヒストリー・コーナ		清水龍整他「パーソナル・ヒストリー」三田評論 1989. 10
Livres et brochures socialiste français	44	高草木光一「1840年代のフランス社会主義」三田評論 1989. 11
保坂三郎氏旧蔵	700	日本・中国の古代金石の拓本
平成2年（1990）		
Leibniz, Gottfried Wilhelm	67	石黒ひで「ライプニッツ・コレクション」三田評論 1992. 10 Leiniz (1646-1716)
波多野太郎氏旧蔵 SP レコード	277	中国伝統芸能音楽
18・19世紀ドイツ諸邦の刑法典関連資料	11	
平成3年（1991）		
Saxony from 1600 to 1900	50	ドイツザクセン公国立法資料
Alfred Tennyson	79	自筆原稿5点を含む
Victor Hugo	1, 128	小瀬昭夫「ヴィクトル・ユーゴーと19世紀コレクション」三田評論 1992. 2 Hugo (1802-85)
平成5年（1993）：4月三田メディアセンター発足		

展覧会

平成5年10月6日～10月13日

「デューラー時代の書物—人文主義者と印刷工房」展

於 慶應義塾図書館（旧館）1階展示室

平成5年11月15日～11月20日

「高橋誠一郎旧蔵古版製造経済書展—『ユートピア』から『国富論』まで」

於 丸善・日本橋店4階ギャラリー

三田メディアセンター所蔵 児童コレクションについて

わた なべ しげ もり

(児童文学者・元文学部教授)

1. はじめに

現在三田キャンパスの旧図書館書庫二階に保存されている児童図書コレクションは、文学部図書館・情報学科の創設に始まり現状に至る変遷に伴ない、ある意味では、数奇な運命を辿ったともいえよう。

1951年、アメリカの援助により、わが国における初めての図書館専門職員養成の大学課程として、Japan Library School の名称の下に、文学部に図書館学科が創設された。

創設当時、学科図書室は、旧館を入ってすぐ左側の部屋の一部が当てられ、その中二階の一隅に児童図書が置かれていた。

学科の研究室、専用教室の数次にわたる移動により、図書館学全般の蔵書の一部であった児童図書コレクションは、西校舎の学科図書室、新図書館の地下、そして、数年前から、創設当初置かれた場所からほど遠くない書架に戻ったのである。現在は、その存在もほとんど知られずに、静かに眠っている。かつて児童図書館員、司書教諭の専門教育に十二分の役割を果たし、同時に、日本の戦後の児童文学の成長と「子どもの本」の出版に大きな影響を与えたこのコレクションは、果たしてその役割を終えたのだろうか。

今回、メディアセンターの依頼により、数名の協力者とともに、コレクションを數ヶ月にわたり丹念に調べてみると、予想したことではあるが、教材として充分に使用され、その使命を終えたと見えるこのコレクションの中に、国内ではここにしか存在しない。そして、アメリカやイギリスの図書館では、Rare Books（稀覯書）として扱われている貴重な初版本や絶版の受賞図書その他が数多く含まれていることが確認された。学科カリキュラムの変化という理由だけで、このコレク

ションが破棄の対象にならなかったことに、安堵の胸をなでおろしたことはいうまでもない。

2. コレクションの内容

2.1. 創設時

児童図書館員、司書教諭を目指す学生のための選択科目として設けられていた「学校図書館」「公共図書館児童奉仕」「児童文学とストーリーテリング」の教材として準備されたもので、アメリカの図書館学校（修士課程）の同種コレクションを規準として、初代の担当教授ハナ・ハント女史を中心に選択収集され、開講と同時に利用が可能であった。

コレクションの範疇には、大きく分けて三つあった。(1)幼児からヤングアダルトを対象とした児童図書の基本的知識を学ばせるための、絵本、幼年童話、伝承文学、小説、ノンフィクション、知識の本のジャンルを網羅し、古典から現代に至る傑出した価値を備えた作品群。(2)選択、批評の実習に利用するため、これらベストの作品以外に、ephemeralな（一時の価値しか持たない）図書群。(3)ストーリーテリングの話材として役立つ昔話、神話、伝説などのコレクション。以上の三つの範疇であった。

開講時は、当然のことながら、学科創設の事情から、(1)は、若干の定評あるイギリス版を加えて、アメリカで出版されたものを中心とし、その中に、ドイツ、フランス、北欧などの古典の英訳が含まれていた。

(1)の範疇に入る作品群は、イギリス、アメリカの児童文学の黄金時代を色濃く映す象徴的なもので20世紀初頭から1950年（図書館学科創設が1951年）に至る時期をカバーしていた。

その頃日本では、ほとんど知られていなかった名作の数々に触れることのできた学生は幸せだったが、関心のない学生には、「猫に小判」であつたかもしれない。アメリカで読みつかれ、増刷を重ねた図書館用の特装版で、1930年代以降1950年までに出版された図書は、初版で収集されていた。アメリカで年間の最優秀作品に与えられるニューベリー賞（小説）、コールデコット賞（絵本）の受賞作は、初版が複数コピーで購入されて

いるものもあった。

この初期コレクションの中に、絵本では、例えば、Caldecott や、Newbery の代表作はもとより、Leslie Brooke “RING O’ROSES” (1922), C.B.Falls “ABC BOOK” (1923), Wanda Gag “MILLIONS OF CATS” (1928), Marjorie Flack/Kurt Wiese “THE STORY ABOUT PING” (1939) を初めとし、『かもさんおとおり』『ちびくろさんば』『シナの5にんきょうだい』『もりのなか』の原書や、ドクター・スースの講義のあとで頂いたサイン入り本など、後年日本語訳で出版され、日本の幼い子ども達の愛読書となる名作が、数多く含まれていた。

文学では、『トム・ソーヤーの冒険』『ハックルベリー・フィンの冒険』『若草物語』の原作はもちろん、Will James “SMOKY” (1926), James Fenimore Cooper/N.C.Wyeth “DEERSLAYER” (1929), Elizabeth Coatsworth “THE CAT WHO WENT TO HEAVEN” (1930), など幻の名作といわれる作品をはじめ、後年、やはり翻訳を通して、日本の読者に愛読され、大きな刺激を与えた名著の数々が含まれていた。

アメリカの「子どもの本」黄金時代は、一般に1930年から1960年初頭までといわれるが、上記の書名は、この時代の先駆となったものの若干例を挙げたにすぎない。そして、これらに続いて世に出た同時代を象徴する名著が、初期の児童図書コレクションの中核をなしていた。

コレクションに含まれる、当時の日本の児童図書は、一部の篤志家の寄贈によるもので、特に見るべきものは少なかった。戦後の一時期、非常に貧しい状況下で出版された粗末な造本の古典の再版もの、翻訳本などだった。ただ一つ歴史的価値があるものとすれば、占領下、GHQ の指導下で、若干の絵本や童話が翻訳され、現在では存在しない、ほとんど無名の出版社から出版されたが、それらの例が、数点保存されている。戦後のわが国における児童図書出版の事始めかもしれない。この中に、後年、訳者、出版社とも更新され、今まで読みつがれる作品となったものも数点ある。

2.2. コレクションの継承と発展

開講時のコレクションは、その後六年間、ハナ・ハント教授、ジョージア・シーロフ教授、メーベル・ターナー教授により、教材としてのコレクションの充実発展が継続され、核となる優れた作品は、アメリカの書評メディアを参考として、購入が続けられて充実し、ephemeral な図書は、寄贈や破棄により、必要一定数のものだけが教材用として流動的に配架されていた。この時点までは、コレクションに存在するタイトルの日本語訳は、アメリカの教員には、翻訳のレベルを判断する根拠がなかったので、積極的には、コレクションに加えられなかった。

1957年に、アメリカ留学を終えた渡辺茂男が、児童に関する諸科目を専任で担当することになり、児童図書コレクションの選択の責任を与えられた。当人は、ウェスタン・リザーブ大学の修士課程で、児童図書館と児童文学を重点的に研究したばかりでなく、ニューヨーク公共図書館で専任の児童図書館員として、サービスと図書選択を二年間にわたり実際に経験したことが大きな助けとなった。

渡辺は、これまでの選択基準に従い、前記三つの範疇のコレクションを維持継続すると同時に、古典、創作を問わず、日本の作家によるすぐれた作品の例、既存の原書の信頼できる訳書を、購入または積極的な寄贈依頼により収集につとめた。また外国の関係機関、出版関係者とも交流につとめ、ミュンヘンの国際児童図書館、国際児童図書評議会、フランス国立児童図書館、などを通し、ドイツ、フランスの受賞児童図書、アンデルセン賞関連作品などもコレクションの一部に加えた。

1950年代後半から1970年代後半にかけ、欧米では、すぐれた児童文学作家が輩出し、それらの代表作をコレクションに収めることで、コレクションのレベルが維持された。特に英語圏の Caldecott 賞(絵本、アメリカ), Newbery 賞(文学、アメリカ), Greenaway 賞(絵本、イギリス), Carnegie 賞(文学、イギリス)の受賞作、候補作、日本語初訳などが、それらに該当する。また、同年代に国内の児童図書出版が質量共に発展してきたので、コレクションの中の日本語部分を

補強することができた。

その後、1970年代に始まる、学科のカリキュラムの変更と1975年渡辺の辞任により、児童図書コレクションの選択が、短期交代の非常勤講師と、図書館事務職員に任せられたため、初期のコレクションのレベルと範疇が保たれたとは言い難い。

2.3. 寄贈書

コレクションの蔵書印を点検してみると、数種類の蔵書印のあることに気づく。これは、学科自体の名称の推移が、そこに示されていると同時に、コレクションの中に数種類の寄贈書が含まれていることを示している。

蔵書印の変遷は、Property of KEIO GIJUKU LIBRARY: JAPAN LIBRARY SCHOOL COLLECTION に始まり慶應義塾大学文学部図書館科図書室・慶應義塾図書館となっている。SCAPE INFORMATION CENTER, TOKYO. AMERICAN CULTURAL CENTER とアメリカ文化センター TOKYO の蔵書印の押されたものもある。これらは、実習用に受け入れたものだが、今では、手に入らない貴重なタイトルも含まれている。

その他シーロフ教授の勤務先のウェスト・シアトル・ハイスクールよりの寄贈書、近年閉館されたオレゴン州立図書館からの寄贈書などもある。

特筆すべきは、Rich Memorial Collection である。清岡暎一先生のご友人だったリッチご夫妻の戦死したご子息の子ども時代の愛読書を、そっくり寄贈されたもので、1953年11月5日に、図書館記念室で、盛大な寄贈式が行なわれた。リッチ家の家庭教育が偲ばれるコレクションで、珍しい古典や Elizabeth Coatsworth の作品が、数多く含まれている。ご家族とご親交があったのだろうか。

3. コレクションの果した役割と今後

3.1. これまで果した役割

以上に要約したようにコレクションは、専門的な見識をもった関係者によって選択された今世紀

前半のアメリカ及びイギリスの「子どもの本」のエッセンスである。

このコレクションは、講義を通じ、またコレクション自体の価値により、国内の学校図書館、児童図書館などの蔵書構成の規範になった。

また著名な作家、翻訳者また編集者が授業を聴講し、新しい子どもの本の出版に関して具体的にアメリカ人教授の指導助言をうけるなど、戦後の児童図書出版に大きな影響を与えた。

いうまでもないことだが、卒業生のなかからすぐれた児童図書館員、司書教諭ばかりでなく、「子どもの本」の作家、翻訳家、研究者が育ち、このコレクションは、それぞれの立場で、そして、いろいろな意味で生き続けているのである。

3.2. 今後への提案

このようなコレクションを今後どうすべきなのだろうか。

理想的には、慶應義塾大学の教育及び研究と連動させて、二度と蒐集することのできない貴重なコレクションを維持発展させることである。

その理想を具体化させるためには、文学部の専門分野のそれぞれの視点から、このコレクションを見ていただきたい。外国文学はもちろん、国文学、教育学、おそらく美学の視点からも興味ある発見があることと思う。

内容的には、1970年代までのコレクションの質を現在の時点まで継続発展させなければならない。そのためには、この分野の専門研究者の助言が必要である。質を維持するためには、ephemeralな図書は破棄するほうがいいかもしれない。

それにしても、国際的にも国内的にも「子どもの本」の研究が重要視されている現在、このコレクションの利用が活性化される研究が、慶應義塾で再開されないものだろうか。

編集部注：蔵書の配置換えに伴い、平成6年現在、このコレクションは旧図書館一階に保存されている。

My Encounter with the Children's Book Collection

山口 マリアンヌ
(文学部講師)

In February 1993, I left my home in Australia to join my husband who had returned to Japan to accept the Fujita Chair of Management in the Graduate Faculty of Business and Commerce at Keio University. Shortly before the start of the new academic year, I was very pleased to accept an offer to teach on the Mita Campus within the Eigo Dainibu Division in the Faculty of Arts. While I was free to determine the structure and coursework of my classes it was emphasized that the course was designed to give the students an opportunity to communicate in English with a native speaker.

I have been professionally involved as a book designer and illustrator of children's books since 1960. Drawing on this experience I began to see our class as a kind of forum where we could read and discuss together a selection of children's picture books. The texts of these books contain a variety of vigorous and literate writing styles that would be accessible to all my students regardless of their previous experience in speaking English. Heartened by these ideas, I next had to solve the problem of finding the books I had in mind.

That same week I went to see Toshiko Hirota, a reference librarian for the Keio University Library. When I told her my plan for the coming year, to my surprise she asked me if I knew about a collection of children's books in the Old Library. Then, without any further delay, she very kindly led me to where the collection was housed; it was a mysterious route.

First, we had to tunnel our way through the scaffolding erected during the construction of the new North Building to the normally obscure

entrance into the Old Library. Then upstairs to the third floor, through an electronically monitored sliding door, and down steep iron stairs again to the second floor where in a dusky room off to the left she showed me a whole wall of wonderful old children's books, and in the middle section were rows of the very picture books I had hoped to introduce to my class. I can still clearly recall the mixture of pleasure and astonishment I felt in encountering this collection for the first time.

There was no time on that occasion to examine this newly found treasure more closely, but I returned the next day in old clothes and reading glasses to inspect each dusty book and record its title and author, together with the call number, which was a combination of 'E' and another letter of the alphabet, beginning with 'A'. I remember that as I scanned the shelves trying to decide the best way to approach the job ahead, I noticed several books jutting out in rather a jumble on the bottom shelf. When I bent down to align them with the other books I found the cause of the muddle was a small book wedged in behind them, askew with the wall. I pulled it out; *A Hole is to Dig* by Ruth Kraus with pictures by Maurice Sendak. Could it be true! Scuffed and dog-eared it reminded me of my own worn copy which a special friend had sent to our family years ago. I checked the back card pocket and found the last borrower, January 1973. The book was a harbinger of the discoveries ahead: Bemelman's *Madeline*, deBrunhoff's *Babar*, and Francoise's *Jeanne Marie; Pelle's New Suit* (Beskow 1929), *Make Way for Ducklings* (McCloskey 1941), *The Little Island* (McDonald /Weisgard 1946), *Crow Boy* (Yashima 1955), *Where the Wild Things Are* (Sendak 1963), *Moon Man* (Ungerer 1966), *The Biggest House in the World* (Lionni 1966), *Why Mosquitoes Buzz in People's Ears* (Aardema/Dillon 1975) and *The Bunyip of Berkeley's Creek* (Wagner/ Brooks 1977); and books of poetry and

Mother Goose.

As I gradually made my way through each picture book I began to feel the history of the Japan Library School Collection through the inscriptions and photos that annotated so many of the copies, invariably linked with the signature of Shigeo Watanabe. For example, one photo recorded the visit of Dr. Theodor Seuss Geisel to the Japan Library School; a copy of *The King's Stilts* bore a long inscription by the good Dr. Seuss, himself; and in many of the books I found

'The Richard Rich Memorial Library' bookplate, 'The child is father of the man', 1953.

Going over the books each day was also a nostalgic time for me personally. In the sixties, while we were still living in New York City, my husband and I had the first of our own books published, *The Golden Crane* and *Two Crabs in the Moonlight* and the book designer who oversaw the production was the young aspiring artist, Nonny Hogrogian. During that period we met other artists and writers included in the Japan Library School Collection: Evaline Ness, Jan Wahl, Lloyd Alexander, Bill Martin Jr., Ezra Jack Keats and Maurice Sendak. All have made a distinguished contribution to the history of children's literature.

When the academic year began, I encouraged my students to set these books in circulation again, and I listened with satisfaction as they shared their discovery of them for the first time. "As one student wrote in a review, 'w.f. wrong font', forty years ago, didn't think that in the future someone would like this book, *The Egg Tree*, and be pleased with it."

In addition, the students also began to share many of the wonderful Japanese picture books from the collection, telling me in English about the legendary folk tales and stories they had loved since childhood.

So slowly we have been revisiting this remarkable collection. Remarkable because, together with the memorabilia, it includes the

original editions and first translations into Japanese of some of the most notable and best loved children's books from around the world, and it played a significant role in introducing to Japan the first fruits of artists and writers working in what has become known in the West as the "Golden Age of Children's Books"; Wanda Gag, Marcia Brown, Virginia Lee Burton, Robert McCloskey, Lois Lensky, Robert Lawson, Marie Hall Ets, and Monroe Leaf are to mention only a few.

In spring I at last had the pleasure of meeting Professor Watanabe and hearing his own stories about the collection his vision and dedication had helped to build. I was startled to learn that even more books from the collection were stored in other sections of the library, and some in boxes in preparation for their storage elsewhere. In fact, the sad reality was that the whole collection is bound for a similar fate with space such a premium and the books considered outmoded by the technological emphasis in contemporary university education.

This seems to me to be a short sighted and narrow view of its relevance. Instead of dismantling the Japan Library School Collection or allowing it to languish in boxes where it eventually will be lost forever, it could be conserved and indexed to provide the basis for establishing and maintaining a larger updated reference library for an International Centre for Children's Books on the Mita Campus of Keio. Being easily accessible to foreign devotees of children's literature visiting Tokyo, it would surely serve to extend cross cultural exchanges in yet another area, and eventually, become a forum for seminars and exhibitions of interest to research scholar and student alike. The bookplate for this new collection might well read, 'The Child is Father and Mother of Humankind' 2000.

<ティールーム>

債務国のかな生活と 債権国の苦しい生活

なか 木 敏 夫

カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）で開かれた参加者が300人程度の小さな研究会に参加するため、ロサンゼルス国際空港に宿泊着いた。時間には余裕があったので、UCLAまでは市バスで行くことにした。路線図で調べると、UCLA行きが何系統も出ていることが分かった。乗客の一一番最後に乗ったので、ワンマンバスはすぐに発車した。料金を聞くと、なんと60セントだと言う。日本から持ち込んだ小銭は55セントしかなかったので空港で引き出した20ドル札を出すと、「お釣りはない。他の乗客に両替してもらえ。」と言うので、近くのブルーカラー風の男に頼むと、「そのぐらいならやるよ」といって5セントくれた。米国の失業率は高くなっているとはいえ、まだまだ経済的、精神的余裕を感じられる。物価もほとんど上がってないようと思える。レギュラーガソリンは1ガロン1.25ドル前後つまり1リットル33円だ。40分後にUCLAのバスターミナルに着いた。それにしても東京では60円で何ができるだろうか。米国のインフレ懸念はどうこうと言っても、我々とは異なる次元で議論しているようにも思える。

会議の参加者はほとんどが大学キャンパス内の北西の角にあるSUNSET VILLAGEというゲストのための宿泊施設に滞在した。ゲストには磁気カードが渡され、宿泊施設のエレベータのスイッチ、自分の部屋の鍵はもちろん、朝昼晩の食事券を兼ねている。ゲストにはメインキャンパスにあるスポーツジムの使用が許可されるが、磁気カードはこの入場券も兼ねている。宿泊施設は3階建のレンガ壁面で、白とレンガ色を基調にしたスペイン風の建物であり、建物の内部は日本のシティーホテル並だ。一般の学生寮と違うのは各室にバス（シャワーではなく）、トイレが完備し、テレビがある点だ。SUNSET VILLAGEは、宿泊、食事施設のほか、300人程度の会議場、プール、テニスコート、バレーボールコートも完備されている。料金は中の上くらいのホテルぐらいだが、内容から考えると割安だし、非

常に便利だ。夕方晩餐会があるときには、昼間に会議場で使っていた大ホールを3時間かけて10人用の丸テーブルを30程入れ、テーブルクロスをかけ、ちょうど日本の結婚式の披露宴会場風に早変わりする。

大学の国際化のための手段の一環として、光ファイバーを張るなど通信網を整備することは言うに及ばず、さらに、日吉や藤沢キャンパスに現有する訪問研究員のための施設で満足せず、SUNSET VILLAGEのような会議が開ける総合施設を持つことは慶應義塾にとって必要なことだと痛感する。インフラストラクチャーの完備とソフトウェアの高度化には密接な関係があると思う。外国からの研究者が来やすいような環境を作ることにより、外国との交流が活性化されるのは間違いない。

学生時代にシアトルにあるUniversity of Washingtonの学生寮に夏休みの間滞在したことがある。広く美しいキャンパス、清潔な学生寮、豊かな食生活に衝撃を受けたものだ。しかし、1978年当時は円ドルレートは確か260円くらいだと思うが、米国が豊かな国であるという事実自体にはショックを受けなかった。米国は世界有数のお金持ちはだから当然だ。しかし、今回は違う。いまや米国は世界有数の債務国であり、日本は世界最大の債権国である。世界最大の債権国のがん生活になぜ豊かさを感じることができない、あるいは実際に豊かではないのであろうか。価格の内外格差の問題自体は特に新しくないが、米国の最近の状況を目の当たりにしておおいに考えさせられた。小生は経済学は専門ではないのでよくわからないが、何かがおかしいと素朴な疑問を抱かざるを得ない。生活に反映されないような対外黒字の数字や、邦銀がいかに莫大な資産を所有しているかを発表しても、我々には何の意味があるのであろうか。

大学改革が叫ばれて久しいが、歴史的な大学の成立過程を見ても、経済的に余裕のある豊かな社会から、知的生産物を生む大学が生まれたのであり、大学も一般社会の豊かさと密接な関係があると思う。日本は今すぐに生活コストを下げなければ、日本の生活を豊かにするためのチャンスはこの先そう巡ってこないだろう。それにしても米国は借金をこの先どうするつもりなのだろうか。

（医学部専任講師）

山中資料センターの発足一速報一

しま もと みつ のぶ
島 本 光 信

(メディアネット本部事務長付)

ふる さわ けん いち
吉 沢 賢 一

(医学メディアセンター課長)

1. 経緯と概要

四半世紀前は100万冊であった全メディアセンターの蔵書が現在は300万冊に増加した。この間キャンパス内に新図書館を建設したり、書庫を増設して対処していたが、蔵書数の増加に追いつかれて各メディアセンターとも所蔵資料を独自のセンター内で保管することが、物理的に不可能、あるいは近々不可能になる状態にある。

この度山梨県山中湖畔に保存書庫棟を建設し、これを山中資料センターと称し運用することになった。

着工：平成5年3月18日

竣工：平成6年4月11日

施設の概要：

鉄筋コンクリート造地上2階建て

延面積 1,320 m² (399.3坪)

書庫面積 916 m² (277.5坪)

(1・2階合計)

空調設備：書庫の冷暖房（除湿・加湿）

書架：

固定書架 5連×単式16台

(内8台は来年度設置)

同 7連×単式16台

機械式手動スタッカラーナー

5連×複式80台 (内40台は来年度設置)

同 8連×複式80台

収容冊数：設計上は511,200冊 (1段当たり30冊で算出) 運用にあたっては大型本、製本雑誌など配架資料の形態により段数を調整、実際の収容冊数はこれを下回る。

複写機：G4 ファクシミリ複写機1台

業務委託：財団法人国際医学情報センターに委

託し、常時2名の熟練した係員が勤務している。

2. 稼働準備と運用

建物の乾燥状況をみて、平成6年7月中旬から下旬にかけて三田キャンパスの図書約10万冊と医学部キャンパスの1969年以前の製本雑誌および1944年以前刊行の図書約7万5千冊を移転した。運用ワーキンググループでは、複写資料は即日、現物は翌々日の受け取りを基本に送付依頼や受け取り、返却に関し検討を行った。正式稼働は10月からであるが、8月16日から担当者の訓練や環境整備を中心にテスト稼働を開始した。

因みに医学メディアセンターのテスト稼働の実情を紹介する。一般に単行本は閲覧・貸出が利用の中心となるが、雑誌はその大部分が複写利用である。雑誌資料の多い医学メディアセンターの8月16日から9月6日まで(実働17日間)の利用統計は閲覧・貸出7件、複写210件(1,372枚)であった。複写物は申込みから1~2時間の間に渡している。この期間は夏期休暇中であると同時に資料移動の作業を行っていたため、利用者数が少なく、今後件数・枚数ともに増加することは十分予測できる。これまで複写資料の送付・現物の送付とともに順調に推移している。現物の移送には宅配業者を利用しているが、資料センターの近くに配送センターがあり、且つ高速道路が近いためか午後に依頼したものが翌日の午前中に受け取れたこともある。

3. おわりに

山中資料センターはその第1期の書庫棟が完成し、10月に正式稼働する運びになったが、今回資料を移転したのは、三田メディアセンターと医学メディアセンターのみであり、日吉、理工学の各メディアセンターにおいても近々蔵書の一部を移さざるを得ない状況である。また全センターの年間増加数が10万冊をはるかに越えていることをみると、第2期の計画を検討する必要もあるうし、移管される資料数が多くなれば、利用サービスの体制も再検討を迫られる可能性も出てくるだろう。

<スタッフルーム>

学ぶ言語はよりどりみどり

にい くら りえ こ
新 倉 利江子

「将来、図書館に勤めるんだったら語学はやっておいた方がいいよ。」

図書館・情報学を専攻することに決めたとき、高校時代にお世話になった先生からまずこのように言われた。それから慶應に就職するまでの間に、図書館員が持つべき語学力についてはいろいろと聞かされてきた。

「英、独、仏、伊、ラテン語……できたらスペイン語はおさえてほしい。」（6か国語！）、「理想的には各国の言葉が分かると良い。」（？か国語！？）等々。

……それもそのはず。学術研究に寄与する大学図書館たるもの、「中国語の分かるスタッフがいませんから、中国語の資料は入れません」（！）などということはまかりまちがっても許されるものではない。かくして、私たち図書館サービスに従事するスタッフは、さまざまな外国語を相手にするべく、勉強をすることになる。

私が身を置いている部署は、場所が三田ということもあって、「慶應義塾外国語学校」に通ったことのある職員が多い。学ぶ言語は人によるが、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ロシア語、ハングル……と多彩。1人で複数言語勉強する人もいる。

選び方には大きく分けて、2つの傾向があるようだ。1つは、受け入れられる外国語資料のかなりの部分は英・独・仏なので、まずここをおさえてしまおう！というものである。この中でも2つの系統に分かれている、学生時代にとった第二外国語のブラッシュアップを図る「その道のエキスパート型」と、全く学んだことのない言語を新たに身につけようという「何でもOKのゼネラリスト指向型」とがある（？）。

この英・独・仏系の選択に対するもう1つの傾

向、それは、誰もやっていない「ありがたがられる言語（？）」を選択する、というものである。こちらは、一旦勉強してしまうとその言語の担当者になってしまう可能性があるため、少々プレッシャーがかかる。けれども、自分の専門領域が持てるという分、やりがいもあるのではないかと思う。（というもの、私自身はドイツ語を選んだのであるが……。）

こうした勉強は全く強制されるものではない。個人個人が、仕事を進めていくにあたって自分に必要なことは何か、を考えた結果、「外語」（慶應義塾外国語学校のこと）に通う」ことを始めているのである。こうしたことを見知してか、それとも「図書館員には是非とも外国語をマスターしてもらわないといけない」と思っているのか、ある授業で私は他の生徒さん達の3倍くらいあてられてしまった。

勉強する環境としては、私たちはとても恵まれている。終業時刻を過ぎれば、即自習ができる。手元に辞書もそろっている訳だし……（ただ、実際には「予習」であることが多いのだが）。しかしながら、残念ながら卒業までたどりつける人は殆どいない（私も中級で沈没してしまった……）。

とはいえる、はからずもこれから私は主として洋書の処理をしなければならないことになった。学んだことを生かすチャンスに恵まれたことを感謝しつつ、ここでこのとりとめのない文章の筆を置くことにしたい。

（三田メディアセンター）



資料 I

メディアネット・メディアセンターに関する書誌 1993.8~1994.7

“書物、情報、メディアへの招待” 慶應義塾大学報
Vol. 29, No. 1 (1994.4)

(三田)

清家 篤 “BCS 建築賞”受賞建築を訪ねて 第24回
受賞慶應義塾図書館・新館” BCS No. 48 p. 30-
31 (1994.7)

〔湘南藤沢〕

木村岳史 “通産省、「電子図書館」を慶應大藤沢キャ
ンパスに設置へ” 日経ニューメディア 1994.3.28
p. 5

“慶大に研究施設：文部省などの事業通産省が後押し”
日本経済新聞 1994.6.27

資料 II

スタッフによる論文発表・研究発表 1993.8~1994.7

〔論文発表〕

(三田)

原田 哲 “メディアネット計画” 墓監局紀要 No.
20 p. 8-14 (1993.10)

東田全義 “秘蔵(71)ボエティウス『哲学の慰め』—
写本とインクナブラ” 三田評論 No. 953 p. 90-91
(1993.12)

東田全義 “わが館のフランス書の中から(28)慶應義
塾図書館 [Morelly]: Naufrage des îles flottantes.
Messine (Paris) 1753” 日仏図書館情報学会
ニュースレター No. 130 p. 7 (1993.11)

東田全義 “齊藤月岑『江戸名所図会』を歩く ①王子
稻荷神社” 墓友 No. 406 p. 58-61 (1994.1)

東田全義 “わが館のフランス書の中から(30)慶應義
塾図書館 Baudelaire, Charles.: Les fleurs du
mal. Paris 1857. Edition originale.” 日仏図書
館情報学会ニュースレター No. 132 p. 7 (1994.2)

東田全義 “齊藤月岑『江戸名所図会』を歩く ②西新
井大師堂” 墓友 No. 407 p. 46-49 (1994.3)

東田全義 “齊藤月岑『江戸名所図会』を歩く ③本門
寺” 墓友 No. 403 p. 40-43 (1994.4)

東田全義 “齊藤月岑『江戸名所図会』を歩く ④白髭
明神社・木母寺” 墓友 No. 409 p. 42-45 (1994.
5)

東田全義 “わが館のフランス書の中から(33)慶應義
塾図書館 [Descartes]: Discours de la méthode.
Paris 1637” 日仏図書館情報学会ニュースレター
No. 135 p. 3 (1994.5)

東田全義 “パショーリ『スママ』の書誌学上の謎”
ピヌス No. 37 p. 15-20 (1994.6)

東田全義 “齊藤月岑『江戸名所図会』を歩く ⑤龜戸
宰府天満宮” 墓友 No. 410 p. 44-47 (1994.6)

東田全義 “齊藤月岑『江戸名所図会』を歩く ⑥金龍
山浅草寺” 墓友 No. 411 p. 58-61 (1994.7)

平尾行蔵共訳 “世纪末から20世纪音楽へ：アール・
ヌーヴォーとユーゲント様式” ユルグ・シュテン
ツル編 音楽之友社 1993.10

平尾行蔵 “ランツケ著『音楽情報はどこで見つける
か』” 学燈 Vol. 90, No. 12 p. 26-29 (1993.12)

広田とし子 “インターネットの使い方—大学図書館に
おける活用事例” 情報の科学と技術 Vol. 44, No. 1
p. 35-41 (1994.1)

広田とし子 “レファレンス・サービスの評価のため
に—慶應義塾大学三田メディアセンター(図書館)に
おけるレファレンス・サービスの調査と分析” 大学
図書館研究 No. 43 p. 12-27 (1994.3)

木下和彦 “大学図書館における視聴覚サービス” 視
聴覚資料研究分科会報告 第6輯 p. 7-24 (1994.3)

- 宮高昇三 “メディアネット計画” 塾監局紀要 No. 20 p. 8-14 (1993. 10)
- 森園 繁 “ティコ・ブライエ『近時天体现像論』 塾 Vol. 31, No. 5 表紙 p. 3 (1993. 10)
- 柴野麻里子 “駆け足英国留学の記” 塾監局紀要 No. 20 p. 58-59 (1993. 10)
- 波川雅俊 “ナポレオンの公教育を支えたりセ規準図書館目録” 塾 Vol. 31, No. 4 表紙 p. 3 (1993. 8)
- 波川雅俊 “本もコンピュータも—慶應義塾大学におけるメディアネット計画” 学校図書館 No. 515 p. 35-40 (1993. 9)
- 波川雅俊 ““ユニファイド・パブリッシング”と図書館サービスの展望—プレコンファレンス報告” Japan-U.S. Collaboration in enhancing international access to scholarly information; looking toward the 21st century／学術情報へのアクセス拡大のための日米協力：21世紀にむけて Fifth Japan-U.S. Conference on Libraries and Information Science in Higher Education, Tokyo, Japan, October 6-9, 1992. Editor: Tadao Shimizu and others. Tokyo, Universal Press, Inc., 1993 p. 282-286
- 波川雅俊 “書物に接し、メディアとコンピュータを駆使する—慶應義塾大学メディアネットとメディアセンター” 文部時報 No. 1402 p. 38-39 (1993. 10)
- 波川雅俊 “変貌する大学図書館—書物も情報もそして情報処理も” 平成5年度(第33回)大学図書館司書主務者研修会報告書 p. 117-127 (1994)
- 波川雅俊 “慶應義塾大学メディアネット計画：学術研究支援サービスの構想と課題” 人文学と情報処理 No. 4 p. 43-47 (1994. 4)
- 白石 克 “秘蔵(76)『越後名所誌』江戸末期書写本” 三田評論 No. 958 p. 82-83 (1994. 5)
- 白石 克 “江戸切絵図を読む” 別冊歴史読本 No. 52 p. 156-163 (1994. 7)
- (日 吉)
- 天野善雄 “メディアネット計画” 塾監局紀要 No. 20 p. 8-13 (1993. 10)
- 天野善雄 “新しい考え方の医学用語シソーラスを用いた臨床症例データベースの作成” 医療情報学 Vol. 13, No. 4 p. 221-228 (1994. 1)
- (理工学)
- 角田浩子 “私の薦める一冊の本「おろかな日々」” 塾監局紀要 No. 20 p. 96 (1993. 10)
- 長島敏樹 “大学図書館における自己点検・自己評価：早慶図書館員合同合宿研修報告” 大学図書館研究 No. 42 p. 69-73 (1993. 9)
- 館 田鶴子著 “慶應義塾大学図書館の研修制度” 現代の図書館 Vol. 31, No. 3 p. 166-170 (1993年9月)
- 館 田鶴子著 “よく参照される雑誌のランキング” きたさとニュース No. 168 p. 7 (1993年8月)
- 館 田鶴子著 “インターネット情報源への招待” 医学図書館 Vol. 41, No. 1 p. 46-52 (1994年3月)
- 館 田鶴子他訳・編 “病院における医学図書館の選書—選書方針と蔵書構築—” 日本医学図書館協会関東地区医学図書館協議会発行 (1994年6月)
- [医 学]
- 平吹佳世子 ‘Q & A MR の文献情報サービス自肅の影響’ 医学図書館 Vol. 40, No. 3 p. 344 (1993. 9)
- 平吹佳世子 ‘第20回「医学図書館セミナー」に参加して’ 医学図書館 Vol. 40, No. 4 p. 412-413 (1993. 12)
- 平吹佳世子 “これから相互貸借” 医学図書館員セミナー論文集 20回 p. 19-26 (1994. 2)
- 平吹佳世子 “病院図書室への文献提供” ほすびたるらいぶらりあん Vol. 19, No. 1 p. 7 (1994. 3)
- 平吹佳世子 “Book Reviews 日本の医学会会議録索引” 医学図書館 Vol. 41, No. 2 p. 247 (1994. 6)
- 市古みどり “大学図書館における自己点検・自己評価：早慶図書館員合同合宿研修報告” 大学図書館研究 No. 42 p. 69-73 (1993. 9)
- 市古みどり “Unified Medical Language System の解析と医学情報システムへの応用可能性” 医療情報連合大会論文集 13回 p. 137-138 (1993. 11)
- 市古みどり “情報の探し方22 医学資料” 情報の科学と技術 Vol. 43, No. 12 p. 1119-1126 (1993. 12)
- 市古みどり “医学図書館とコンピュータネットワーク・インターネットを中心に” 医療とコンピュータ Vol. 6, No. 3 p. 219-223 (1994. 4)
- 市古みどり ‘インターネットを利用したレファレンスサービス’ 専門図書館 No. 148 p. 6-16 (1994. 4)
- 五十嵐由美子 “専門職としての雑誌係” 医学図書館員研究集会論文集 28回 p. 59-64 (1994. 3)
- 酒井由紀子 ‘慶應義塾大学医学メディアセンターにおけるトータルシステムの導入と運用’ 医学図書館 Vol. 40, No. 3 p. 290-294 (1993. 9)

酒井由紀子 “新しきもの古きもの” 墓監局紀要 No. 20 p. 101-102 (1993. 10)
佐久間公子 “慶應義塾看護短期大学図書室の利用者教育” 看護と情報 Vol. 1 p. 95-98 (1994. 3)
田中知之 “私の薦める一冊の本「咸林丸海を渡る」” 墓監局紀要 No. 20 p. 95 (1993. 10)

〔湘南藤沢〕

村上篤太郎共著 “データベース利用教育ガイド：大学におけるデータベース利用教育システムのプロトタイプ作成” 日外アソシエーツ 96p 1993. 9
三瓶美知子 “私の薦める一冊の本「稀書自慢紙の極楽」” 墓監局紀要 No. 20 p. 96 (1993. 10)
吉沢亜季子 “私立大学図書館協会東地区部会企画広報研究会分科会ポスター等デザイン決定” 図書館雑誌 Vol. 87, No. 12 p. 876 (1993. 12)

〔研究発表〕

(三 田)
広田とし子 “インターネットの使い方：レファレンス業務への導入” 私立大学図書館協会東地区部会平成5年度第2回研究部会 1993. 12 於 青山学院大学
加藤好郎 “ケース・スタディー：図書館にエイズ感染者がいた” 私立大学図書館協会東地区部会研究部パブリック・サービス研究分科会 1994. 5 於 成城大学
加藤好郎 “これから職員にもとめられているもの” 平成6年度慶應義塾新任職員研修会講演 1994. 5 於 慶應義塾大学
加藤好郎 “慶應義塾大学メディアネット構想” 平成6年度文部省大学図書館職員長期研修 1994. 7 於 慶應義塾大学

木下和彦 “大学図書館における視聴覚サービス” 私立大学図書館協会東地区部会平成6年度第1回研究部会 1994. 6 於 慶應義塾大学

小沢ゆかり “大学図書館でどの分類を使うか：DDCとNDCの比較を中心に” 私立大学図書館協会東地区部会平成5年度第2回研究部会 1993. 12 於 青山学院大学

渢川雅俊 “A new but an old problem in US-Japan library cooperations” Subcommittee on Japanese Materials, Committee on East Asian Studies, Association for Asian Studies, Boston. 1994. 3

渢川雅俊 “変貌する大学図書館—書物も情報もそして情報処理法も” 平成5年度(第33回)大学図書館司

書主務者研修会 日本私立大学協会 1993. 9 於 アルカディア市ヶ谷

渢川雅俊 “慶應義塾大学メディアネット構想” 都立中央図書館情報科学研修会 1994. 3 於 都立中央図書館
渢川雅俊 “OCLC-KEIO パートナーシップ” 日本OCLC ユーザ会 1994. 6 於 早稲田大学
渢川雅俊 “選書から蔵書構築、そしてコレクションマネジメントへ：資料アクセス確保の終わりなき課業” 私立大学図書館協会東地区部会平成6年度第1回研究部会 1994. 6 於 慶應義塾大学

〔日 吉〕

石原智子 “慶應義塾大学日吉メディアセンターにおける利用者教育” レファレンス研究分科会7月例会 1993. 7. 19 於 武藏大学

〔理工学〕

長島敏樹 “大学図書館の自己点検・評価” 私立大学図書館協会東地区部会研究部平成5年度第2回研修会 1993. 10. 22 於 札幌大学図書館
大賀 裕 “慶應義塾大学理工学部の分散処理環境” サイエンティフィックシステム研究会 1993. 8. 31 於 長野
大賀 裕 “慶應義塾大学理工学部におけるネットワーク環境” 私立大学情報教育協会電算機センター等部門研修会 1993. 10. 23 於 滋賀
館 田鶴子 “慶應義塾大学医学メディアセンターにおけるNACSIS-ILL業務の運用と課題” 第6回国立大学図書館協議会シンポジウム 1993. 10. 21 於 放送大学

〔医 学〕

市古みどり “Unified Medical Language System の解析と医学情報システムへの応用可能性” 第13回医療情報連合大会 1993. 11. 25 於 国立教育会館
長沼真理子 “Long Range Planを中心としたNLMの活動とMedical Subject Headings(MeSH)の改訂との相関関係” 第1回医学図書館研究会 1994. 7. 15 於 広島大学医学部

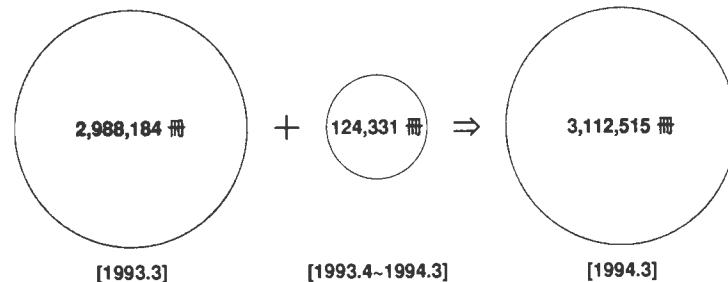
〔湘南藤沢〕

吉沢亜季子 “図書館と広報活動” 神奈川県図書館協会平成5年度職員研修会 1993. 12. 7 於 横浜市立大学

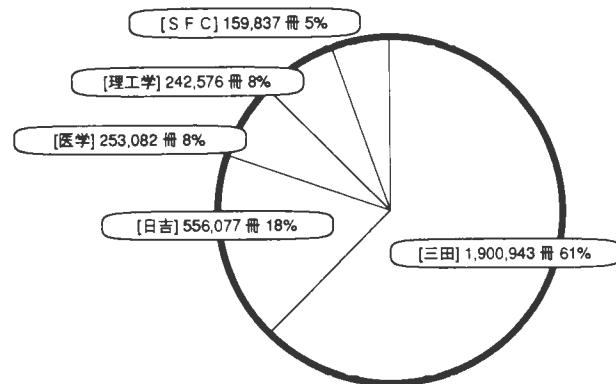
目で見る標準統計 <平成5年度>

I. 義塾の図書資料

1 年間受入冊数と蔵書数累計

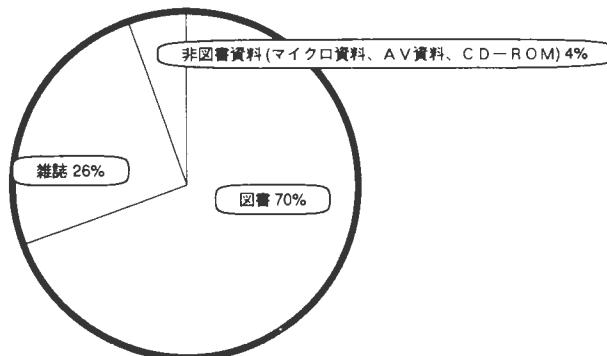


2 地区別蔵書構成比

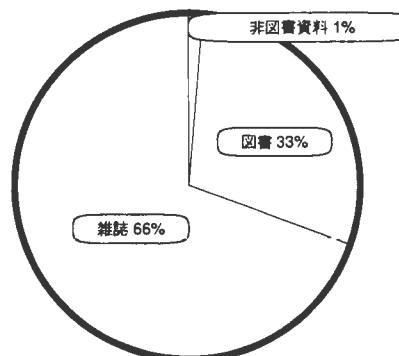


3 資料タイプ別構成比

(1) 全塾

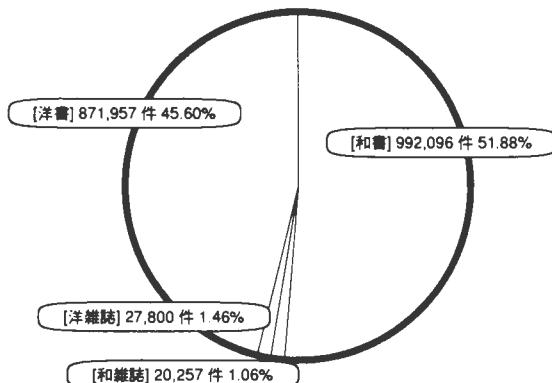


(2) 医学と理工学キャンパス蔵書構成の特殊性



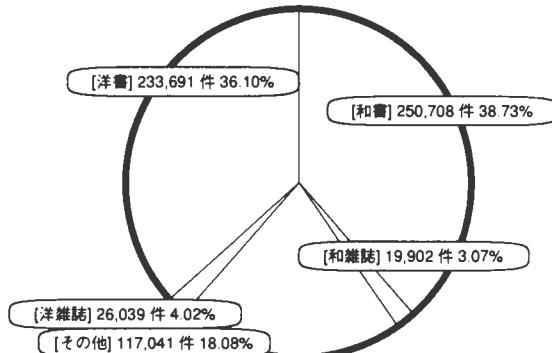
II. KOSMOS書誌データベースの現状

(1) 書誌の種類と件数



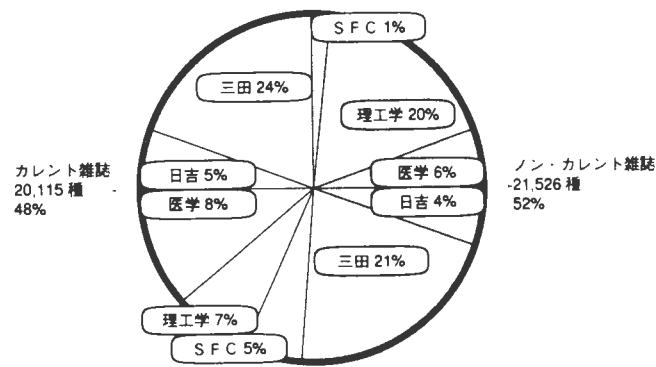
*平成6年3月末現在

(2) 完全書誌化の状況 ((1) 表より簡易書誌を除いたもの)



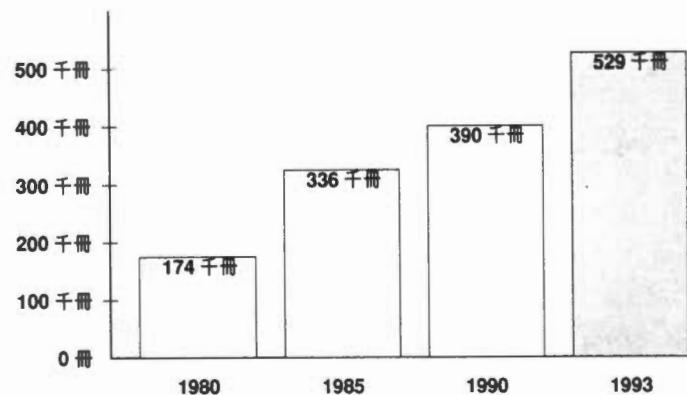
*平成6年3月末現在

(3) 雑誌タイトル地区別構成

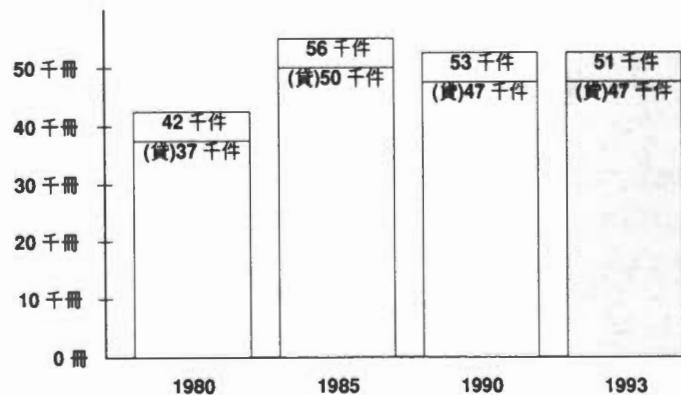


III. 図書資料の利用

1 館外貸出冊数

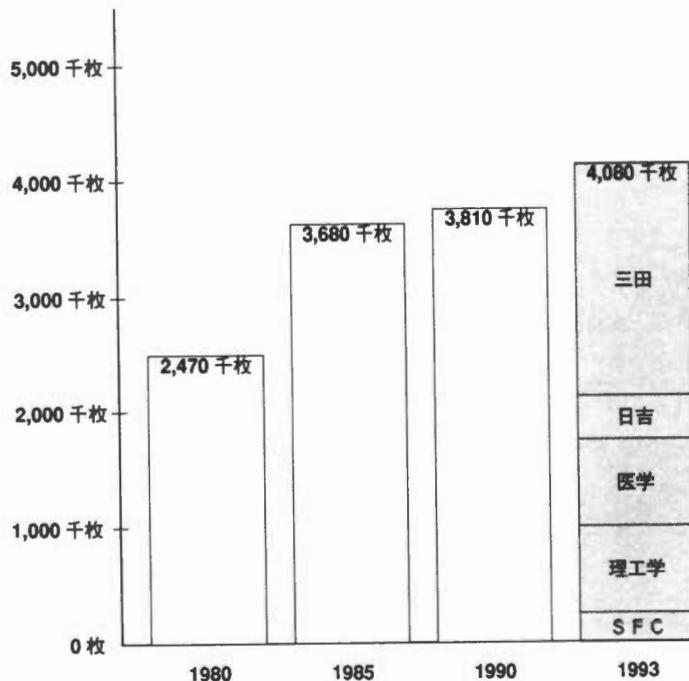


2 相互貸借



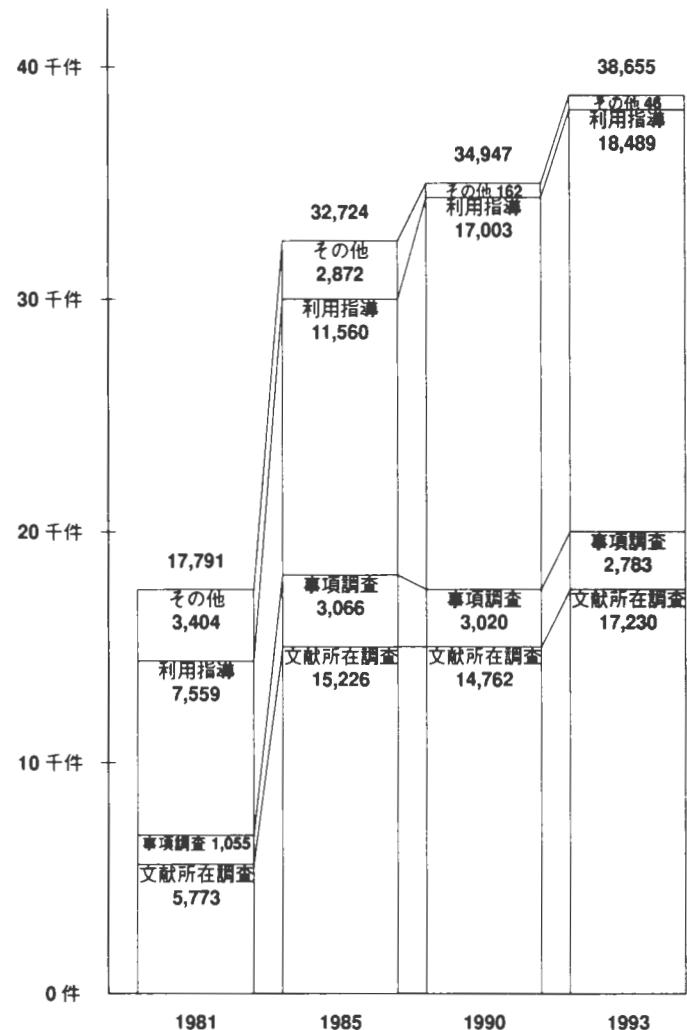
IV. 資料と情報アクセスへのサポートサービス

1 複写サービス

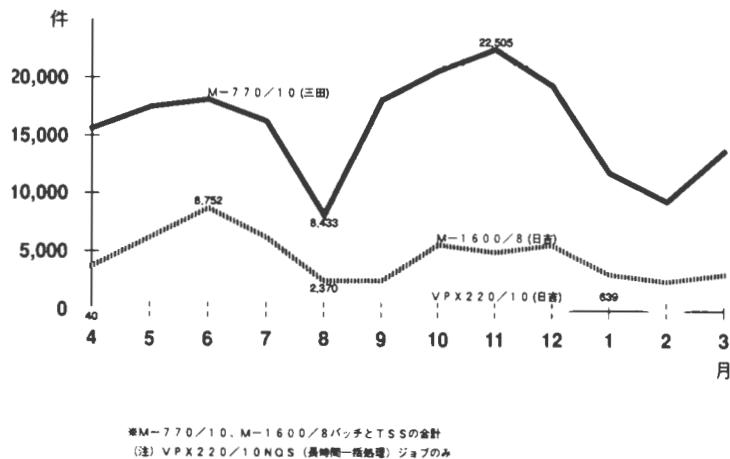


V. 計算機利用統計（情報システムサービス）

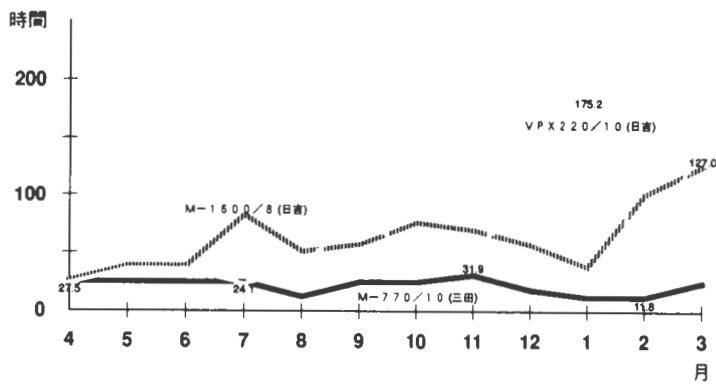
2 レファレンスサービス（業務内容別）



(1) J O B 件数



(2) C P U 時間



年次統計要覧 <平成5年度>

I. 図書費 <平成5年度実績及6年度予算>

内訳 各メディアセンター	平成5年度実績 <単位:円>			平成6年度予算 <単位:千円>		
	図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
三田メディアセンター	647,954,425	16,416,775	664,371,200	673,261	15,633	688,894
図書館	338,321,867	16,416,775	354,738,642	344,394	15,633	360,027
学部*	309,545,396	—	309,545,396	328,867	—	328,867
指定寄付金 (私大研究設備相当額)	87,162	—	87,162	—	—	**
	(61,877,085)	—	**	(24,406)	—	**
日吉メディアセンター	165,352,999	4,467,565	169,820,564	168,360	4,685	173,045
図書館	65,115,000	2,512,815	67,627,815	65,115	4,685	69,800
学部*	100,237,999	1,954,750	102,192,749	103,245	—	103,245
(私大研究設備相当額)	(7,518,524)	—	**	(7,809)	—	**
医学メディアセンター	151,644,886	10,267,675	161,912,561	152,640	10,470	163,110
"	151,644,886	10,267,675	161,912,561	152,640	10,470	163,110
理工学メディアセンター	162,637,145	3,613,608	166,250,753	167,000	3,709	170,709
"	162,137,145	3,613,608	165,750,753	167,000	3,709	170,709
指定寄付金 (私大研究設備相当額)	500,000	—	500,000	—	—	**
	(1,339,000)	—	**	(1,500)	—	**
湘南藤沢 メディアセンター	211,468,575	14,821,946	226,290,521	180,000	15,491	195,491
"	211,132,793	14,821,946	225,954,739	180,000	15,491	195,491
指定寄付金	335,782	—	335,782	—	—	**
合 計	1,339,058,030	49,587,569	1,388,645,599	1,341,261	49,988	1,391,249

注) * 特別図書費は含まず。

** () 内は合計欄に加算せず。

私大研究設備相当額は私大研究設備助成金に相当するよう義塾が臨時に手当したもの。

II-1 蔵書統計 <年間受入及び所蔵冊数>

内訳		単行本			製本雑誌			非図書資料	合計
各メディアセンター		和	洋	計	和	洋	計		
年間受入冊数	三田メディアセンター	14,642	18,479	33,121	5,488	5,609	11,097	4,527	48,745
	図書館	(9,273)	(8,920)	(18,193)	(3,401)	(2,088)	(5,489)	(2,176)	(25,858)
	学部	(5,369)	(9,559)	(14,928)	(2,087)	(3,521)	(5,608)	(2,351)	(22,887)
	日吉メディアセンター	11,398	6,488	17,886	2,286	2,003	4,289	2,367	24,542
	図書館	(8,772)	(1,578)	(10,350)	(1,585)	(200)	(1,785)	(629)	(12,764)
	学部	(2,626)	(4,910)	(7,536)	(701)	(1,803)	(2,504)	(1,738)	(11,778)
所蔵冊数	医学メディアセンター	1,657	1,375	3,032	2,257	5,451	7,708	866	11,606
	理工学メディアセンター	2,295	1,170	3,465	906	2,590	3,496	162	7,123
	湘南藤沢 メディアセンター	14,327	7,752	22,079	5,144	4,112	9,256	980	32,315
	合計	44,319	35,264	79,583	16,081	19,765	35,846	8,902	124,331
	三田メディアセンター	699,762	748,303	1,448,065	186,054	187,477	373,531	79,347	1,900,943
	図書館	(490,972)	(428,093)	(919,065)	(112,956)	(69,461)	(182,417)	(48,455)	(1,149,937)
累計	日吉メディアセンター	300,643	154,439	455,082	37,954	48,388	86,342	14,653	556,077
	図書館	(222,129)	(24,289)	(246,418)	(24,626)	(1,717)	(26,343)	(5,089)	(277,850)
	学部	(78,514)	(130,150)	(208,664)	(13,328)	(46,671)	(59,999)	(9,564)	(278,227)
	医学メディアセンター	36,547	38,945	75,492	56,693	116,378	173,071	4,519	253,082
	理工学メディアセンター	54,195	32,560	86,755	40,286	114,468	154,754	1,067	242,576
	湘南藤沢 メディアセンター	66,387	58,675	125,062	14,067	10,947	25,014	9,761	159,837
合計		1,157,534	1,032,922	2,190,456	335,054	477,658	812,712	109,347	3,112,515

注) 三田メディアセンター・学部には図書館・情報学科の製本雑誌を含む。

II-2 蔵書統計 <逐次刊行物：タイトル数>

種別 各メディアセンター	カ レ ン ト			ノンカレント			カレント・ ノンカレント 合 計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田メディアセンター 図書館学部	5,695 (2,437) (3,258)	4,423 (1,066) (3,357)	10,118 (3,503) (6,615)	5,516 (3,413) (2,103)	3,230 (1,695) (1,535)	8,746 (5,108) (3,638)	18,864 (8,611) (10,253)
日吉メディアセンター 図書館学部	1,065 (635) (430)	869 (79) (790)	1,934 (714) (1,220)	625 (247) (378)	1,061 (25) (1,036)	1,686 (272) (1,414)	3,620 (986) (2,634)
医学メディアセンター	1,514	1,770	3,284	986	1,545	2,531	5,815
理工学メディアセンター	1,156	1,597	2,753	3,009	5,219	8,228	10,981
湘南藤沢 メディアセンター	967	1,059	2,026	248	87	335	2,361
合 計	10,397	9,718	20,115	10,384	11,142	21,526	41,641

参考データ：非図書資料

内訳 各メディアセンター	種別	マイクロ資料 CD-ROM		合 計
		タイトル数	箇 数	
年間新規	三田メディアセンター	タイトル数	48	98
	三田メディアセンター	箇 数	4,264	4,527
	日吉メディアセンター	タイトル数	96	353
	日吉メディアセンター	箇 数	1,679	2,367
	医学メディアセンター	タイトル数	12	415
	医学メディアセンター	箇 数	48	866
	理工学メディアセンター	タイトル数	2	36
	理工学メディアセンター	箇 数	120	162
	湘南藤沢メディアセンター	タイトル数	158	551
	湘南藤沢メディアセンター	箇 数	528	980
累計	三田メディアセンター	タイトル数	1,555	9,399
	三田メディアセンター	箇 数	65,620	79,347
	日吉メディアセンター	タイトル数	561	3,704
	日吉メディアセンター	箇 数	7,943	14,653
	医学メディアセンター	タイトル数	33	1,339
	医学メディアセンター	箇 数	1,031	4,519
	理工学メディアセンター	タイトル数	21	94
	理工学メディアセンター	箇 数	828	1,067
	湘南藤沢メディアセンター	タイトル数	351	1,753
	湘南藤沢メディアセンター	箇 数	7,527	9,761

III-1 利用統計 <貸出及び閲覧冊数>

種別 各メディアセンター	館外貸出				館内閲覧		前年度比 館外貸出(計)
	教職員	学生	その他	計	一般図書	貴重書	
三田メディアセンター	16,320	162,397	10,548	189,265	*	1,346	1.06
日吉メディアセンター	6,874	122,060	6,600	135,534	*	—	1.02
医学メディアセンター	54,336	21,098	45	75,479	*	—	1.21
理工学メディアセンター	2,426	51,298	10	53,734	*	—	0.95
湘南藤沢メディアセンター	—	—	—	73,308	*	—	1.01
合 計	79,956	356,853	17,203	527,320	*	1,346	1.05

* 開架のため実数不明。

III-2 利用統計 <相互貸借(複写依頼を含む)>

種別 各メディアセンター	依頼をうけた(貸)			依頼した(借)			合 計
	国 内	国 外	計	国 内	国 外	計	
三田メディアセンター	3,117	2	3,199	863	283	1,146	4,265
日吉メディアセンター	453	0	453	266	90	356	809
医学メディアセンター	16,621	377	16,998	2,364	92	2,456	19,454
理工学メディアセンター	25,873	10	25,883	1,248	24	1,272	27,155
湘南藤沢メディアセンター	64	0	64	183	12	195	259
合 計	46,128	389	46,517	4,924	501	5,425	51,942

参考データ：早慶ILL

種別 各メディアセンター	貸	借
三田メディアセンター	772	274
日吉メディアセンター	67	101
医学メディアセンター	808	2
理工学メディアセンター	512	350
湘南藤沢メディアセンター	31	56
合 計	2,190	783

III-3 利用統計 <レファレンス・サービス>

利用者別

種別	学 内 者		学 外 者	合 計
	教 職 員	学 生		
各メディアセンター				
三田メディアセンター	1,361	10,013	4,733	16,107
日吉メディアセンター	2,411	4,583	215	7,209
医学メディアセンター	1,919	523	3,028	5,470
理工学メディアセンター	905	3,628	3,498	8,031
湘南藤沢メディアセンター	92	1,732	14	1,838
合 計	6,688	20,479	11,488	38,655

MEDIANET NEWS

複写業務の委託化

1994年4月より、三田メディアセンターの複写業務と相互貸借の一部が外部委託化された。複写カウンターには業者の職員が駐在し、センター職員に代わって複写サービスを行うほか、館内に設置されているセルフサービス機（外部委託後4台増設され、合計22台）の管理一切（機械のメンテナンス、トラブルの解消、消耗品の管理）を行っている。しかもこの委託によって、セルフサービス機による複写料金はす

べて10円／枚に統一されることになった。これまで20円／枚支払っていた学生には、正に朗報となったに違いない。1995年4月を目指して、日吉メディアセンターにおいても同じ業者への委託化が検討されている。三田、日吉が共通の外部委託をすることによって、将来は双方の教員が双方の資料を自由に複写できる環境が整う可能性も出てきている。

IV-1 計算機利用統計 <情報システムサービス>

(1) 利用課題数

区分	M-770/10 (三田)		M-1600/8 (日吉)		ワークステーション (日吉)		ワークステーション (矢上)		CNS. ワークステーション (SFC)		合計	
	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生
文学部	111	168	32	43	1	8	—	—	4	2	148	221
経済学部	91	586	45	299	2	16	—	—	3	1	141	902
法学部	38	85	25	46	—	8	—	—	1	3	64	142
商学部	91	400	33	49	—	15	—	—	—	1	124	465
医学部	30	6	80	155	4	1	—	—	5	—	119	162
理工学部	58	59	317	427	2	41	3	28	4	31	384	586
総合政策学部	—	—	3	4	—	4	—	—	51	1,948	54	1,956
環境情報学部	—	—	—	—	—	20	—	—	94	1,922	94	1,942
経営管理研究科	10	35	15	17	6	2	4	3	3	—	38	57
通信教育部	—	7	—	2	—	—	—	—	—	—	—	9
諸研究所	4	—	21	—	—	—	—	—	—	—	25	—
理工実習	—	—	—	133	—	—	—	—	—	—	—	133
設置講座	—	183	—	837	—	—	—	—	—	—	—	1,020
諸学校	9	1	21	1	1	18	—	—	7	—	38	20
業務部	456	—	306	—	5	—	—	—	51	—	818	—
情報システムサービス外	143	60	94	47	10	—	6	12	2	—	255	119
その他	14	—	5	—	1	—	—	—	72 (其他の合計)	1	92	1
合計	1,161	1,672	1,067	2,132	32	133	13	43	305	3,909	2,578	7,889

※三田・日吉は平成6年1月現在、矢上・SFCは3月現在

IV-2 計算機利用説明会 <情報システムサービス>

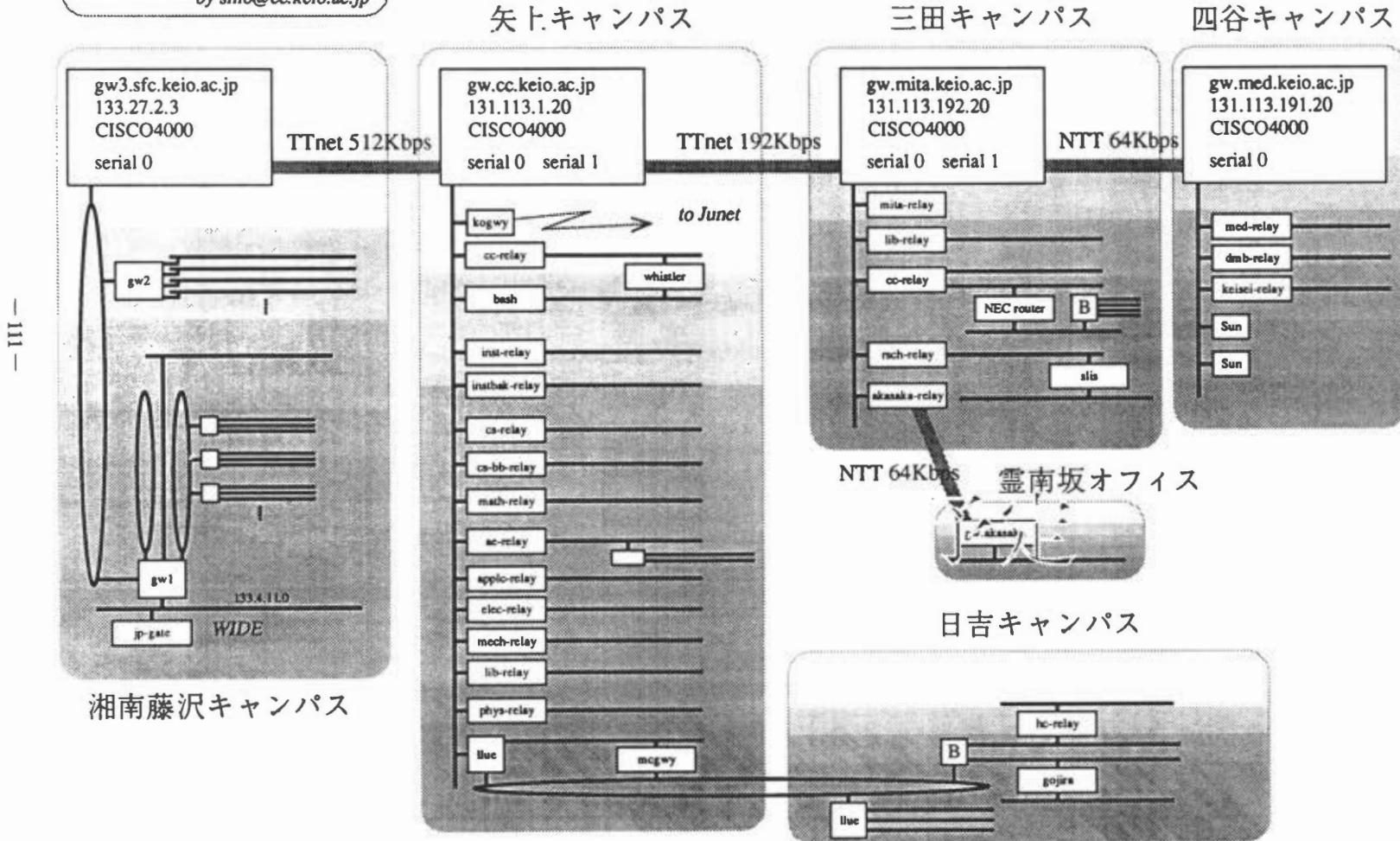
課題	期日	場所	参加人数
計算室利用説明会	4/27	三田	13名
TSS 利用説明会（初心者対象）	4/28・5/13・5/28・10/12 5/24・11/1	三田吉	61名 12名
パソコン利用説明会・日本語ワープロ (FM-OASYS)	5/10・10/15・10/20 5/17・6/15	三田吉	17名 8名
TSS 利用説明会（中級者対象）	5/11・10/14 5/26	三田吉	11名 6名
JCL（ジョブ制御言語）説明会	5/12・10/21 5/25	三田吉	5名 9名
日経ニューステレコン利用説明会	5/18・6/3・6/13・10/27 6/10・11/17 6/22・6/24	三田吉 SFC	27名 16名 16名
パソコン利用説明会・表計算とグラフ (Multiplan & Chart)	5/18	日吉	9名
パソコン利用説明会・カード型データベース（情報俱楽部）	5/19・6/17・10/29	日吉	14名
パソコン利用説明会・表計算とグラフ (Lotus 1-2-3)	5/20・5/24・5/26・10/19 6/16・10/28	三田吉	35名 15名
BITNET 利用説明会	5/25・10/12 11/25	三田吉	22名 6名
TSS 利用説明会（データセット操作）	5/27	日吉	4名
ワークステーション利用説明会	6/3・10/28・10/29 11/10・12/15	三田吉	14名 31名
UNIX メール利用説明会	6/7・6/28・11/26	日吉	37名
スーパーコンピューター説明会 (VPX 220/10 の使用方法)	6/7・11/16	日吉	8名
電話回線からのパソコン等の接続	6/8・11/29	日吉	14名
日経 NEEDS 検索システム説明会	6/15・16・17・18 10/13・14・15・18	三田	26名
ラップトップコンピュータ利用説明会	6/21・6/22・6/23・6/28 6/29	SFC	37名
SAS システム支援ソフト説明会	6/24・10/25・11/24	三田	76名
SPSS/PC+(PC版) 説明会	10/21・10/26	三田	10名
CNS 利用説明会（教職員対象）	7/5～7/7	SFC	4名
CNS 利用説明会（職員対象）	8/10～8/12	SFC	15名

IV-3 通信教育部生へのコンピュータ講習会 <情報システムサービス>

課題	期日	場所	参加人数
日本語ワープロ FM-OASYS	8/12・13 7/26・27	三田吉	26名 36名
表計算とグラフ Lotus 1-2-3	8/16・17 7/28・29	三田吉	24名 35名

Keio Internet Overview

as of May 27, 1994
by shio@cc.keio.ac.jp



1994年春の時点で、ユーザーが2,000万人を越えたといわれるインターネットは、現在様々な方面から注目を浴びている。書店にはインターネット関連書のコーナーも作られ、新聞記事でも目にするようになった。大学図書館もその例外ではない。そこで今号の特集は「インターネット」を取り上げた。概略から、図書館の現場でどのように利用しているのかまでを4つの記事でまとめてみた。

またメディアネット発足1年を経過したところで、豊富な蔵書を誇る三田メディアセンターの、情報センター時代に収集したコレクション群に、目を向けてみることにした。それが、森園、渡辺山口3氏の記事である。蔵書が膨大になり、業務も多様化して、特色ある資料群を利用者のみならず、私たち図書館員も見落としがちになってきている。このあたりでまとめて振り返っておくことも必要ではないだろうか。

増え続ける蔵書にどう対処して、図書館サービスを展開するかは、最近議論が盛んになってきたが、その対処の一つに保存書庫構想がある。慶應義塾でも山中資料センターがこの夏稼働を開始した。10月に本稼働となったが、まだ日も浅く、安定した運用報告ができない。そこで「速報」という形で掲載してみた。このセンターに関しては次号で1年の運用をもとに詳細なレポートを予定している。

今号の編集途中で、編集長が安田から石黒へ代わった。号の途中であったため、原稿を寄せていただいた方々には御迷惑もかけたようだ。来年はメディアネット3年目となる。新たなメディアサービスの構想もあるようである。メディアネットの動きを追い、レポートすると同時に、今号の資料再発見のような企画も盛り込んでいきたいと考えている。

(石黒敦子)

展示会 予告

「理性の夢」— 慶應義塾図書館稀覯書展

平成7年1月30日～2月4日

監修 驚見 洋一（文学部教授）

於 丸善・日本橋店4F ギャラリー

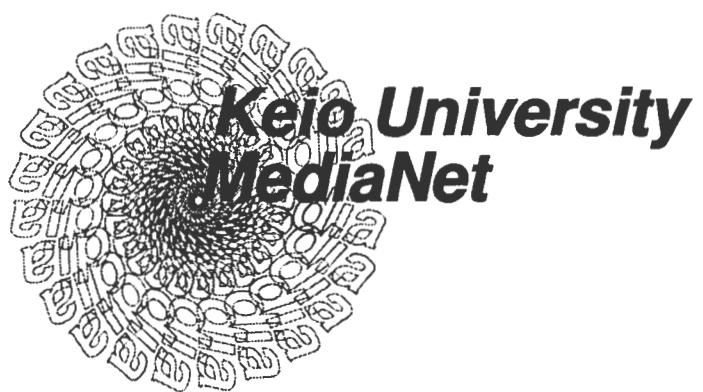
「フランスの理性論」と「イギリスの経験論」が結合して生まれた啓蒙思想は、18世紀フランスにおいて華々しく展開された。そのフランス啓蒙主義の最高の達成といえる「百科全書」を中心に、従来の思想史や文学史の枠組みに捉われず、「人間知識の系統図」（百科全書第一巻冒頭）に則り、諸領域を大胆に横断するよ

うな構成で、フランス18世紀を分析・紹介する。

「見せる」「読ませる」といったことにも一工夫をこらして、視覚的にアピールすることを念頭におき、さらに、講演やBGMでフランス18世紀を「聞かせる」ことも考案している。

フランス18世紀の「知」「心性」「感性」を味わう新鮮で華やかな展示を企画している。

編集長 日吉メディアセンター 石黒敦子 * 編集員 三田メディアセンター 小沢ゆかり 南野典子
持田裕人 * 日吉メディアセンター 宮国彰郎 吉岡菊子 * 理工学メディアセンター 清野早苗 * 医学
メディアセンター 平吹佳世子 * 湘南藤沢メディアセンター 吉沢亜季子



Mita Media Center

Hiyoshi Media Center

Medical Information and Media Center

Information and Media Center for Science/Technology

Shonan Fujisawa Media Center